

三九六ページ

「もしも魔法が使えるのなら」

山脇由布子 ペンネーム（由布園）

杏子（あんず）は35歳になろうとしていた。

杏子の職業は30歳から脚本家。

脚本家になりもう5年が経とうとしている。

杏子は19歳の頃からファミレスでウェイトレスをしながらずっと脚本を書いていた。いつか叶えたい夢のために19歳の時から一人ぼっちで頑張ってきた。

そして30歳の時脚本のコンクールで優勝し、見事脚本家になることができた。

杏子にはもう一つ大きな夢があった。

19歳の時に産んだ、この世でたった一人の娘である万梨亜（まりあ）を引き取ることだった。

杏子とはある児童養護施設の応接室に居た。

児童養護施設の先生、杏子、万梨亜と三人で応接間のソファに座っている。

「伊万里さんがやつと脚本家として安定した収入を得ることができたので万梨亜を引き取りたいとおっしゃっています。

万梨亜はどうしたい？」

当然、万梨亜は杏子と一緒に暮らしたいと言っていた。

「私、伊万里さんとは一緒に暮らしたくないです。

ずっと待っていたのに。

私もう16歳ですよ！

私頑張っていました。

いつか伊万里さんが迎えに来てくれるって。

でもどんなに待っていても待っていても伊万里さんは来てくれなくて。

面会にすら来てくれなくて。

いつも会いたいとき夜、ベッドで隠れてないていました。

でも次第にすべて諦めることにより気が楽になり、涙も流れなくなりました。

小学校の時、あんなにベッドで泣いたから、涙も流れなくなつて。

今じゃ、他のことでも滅多に泣かない誰より強い女の子になって。

この施設のリーダーみたいになることができました。

人より強くなれたので伊万里山には感謝しています。

私はここをもうすぐ卒業しようと思っています。

児童福祉施設の先生の資格を取って、一人で生きて行こうと思っています。

だから伊万里さんももう私のことなんて忘れてこれからの人生生きていってください。
その方がお互い清々しますよね。

私が言いたいことはこれだけです。

もう二度とあなたと話すことはありません。」

そう言っ、万梨亜は他の児童のいる場所に行こうとした。

「待って！」

私はずっと万梨亜と暮らせることだけを夢見て頑張ってきたの！

あなたのことを忘れた日なんてないのに。」

「私のこと気にかけていたなら会いに来られたはずです。

16年間一度も会いに来なかった癖に、よくそんな母親みたいな口聞けますね。

もうあなたのことをお母さんだなんて思いません！」

「火傷のことを今でも怒っているの？」

ふと杏子の脳裏によぎる。

仕事から帰ってきたら、キッチンで小学校1年生の万梨亜が踏み台に乗って、味噌汁の鍋をかき混ぜている姿。

そして万梨亜は踏み台から足を踏み外し、鍋が傾き、万梨亜の肩に鍋がこぼれる。

小さな万梨亜の大事な体に火傷を負わしてしまった。

応急処置でどんなに冷たい水で冷やしても万梨亜の火傷は治らない。

救急車で運び込まれる小さな万梨亜。

「火傷のことは気にしていません。

ノースリーブを夏に着なかつたらいいだけですから。

私ノースリーブなんて嫌いだし。

そのことで責任を感じて下さらなくて結構です。

伊万里さんとはもう話はありません。

さよなら、これからの人生は私のことなんて忘れて生きてください。」

「お金持ちになったの。

食事も家政婦さんがうんと美味しい食事を作ってくれるわ。

もう万梨亜が私のために料理作ってくれなくていいのよ。

万梨亜は自分のための時間を自分のために使ってくれていいのよ。

あの時買っ、あげられなかつた可愛い洋服もぬいぐるみもアクセサリーもなんだって

買ってあげられる。

あんなに行きたがっていた旅行だつてどこにでも連れて行つてあげられる。

万梨亜が行きたい学校ならどこでも行かせてあげられる。

万梨亜絵の勉強をしたいって言つてなかった？

万梨亜絵本が好きだったものね。

美大にだつて入れてあげられる。」

「そんな夢もう忘れたわ。

私はもう欲しいものは何もないし、旅行だつて行きたくない。

私は福祉施設で育つたので社会福祉に関する仕事がしたいの。

絵本作家になりたいなんて夢小学校 1 年生の時に捨てたわ。

もういいの私のことなんて放つておいて！」

そう言つて万梨亜は完全に奥に引つ込んでしまった。

児童福祉施設の先生は言つた。

「万梨亜はずっと伊万里さんのことを待っていました。

会つて抱きしめて欲しかったです。

会つて抱きしめる、それだけで良かったみたいです。

お金持ちになつて迎えに来てくれる、その前に少しでも伊万里さんに会いたかったみたいです。

あの子は気丈な子でした。

でもよく小学生の頃、ベッドで泣いていました。

よく万梨亜の泣き声が気になつて眠れないなんて文句言う子がいました。

喧嘩になつたこともあつて。

意地悪な女の子から泣き虫だといじめられたこともありました。

そのうち万梨亜が強くなつて涙を流さない子供になりましたがね。

あの子が泣く姿なんて全然見なくなりましたね。

本当に強くてたくましい女の子になりましたよ。

ここを出たら福祉に関する仕事をするつて小学校の頃から言っていましたね。

伊万里さん。

万梨亜は言い出したら聞かない子です。

万梨亜のことは諦めてもらわないといけないですね。

これ以上あなたがここに来たら、万梨亜を余計に傷つけると思います。

万梨亜はこの施設のリーダーで、小学校の高学年の頃から小さい子供たちの面倒をまるで本当のお母さんのように見ていました。

お母さんがいないと泣き喚く小さい子供たちが眠るまで抱きしめていました。

自分が小さいときにお母さんにしてもらったことを小さな子供だちにしてあげていましたね。

小学校高学年ぐらいから自立していて、しっかりした子供でした。

あの子はもう大丈夫です。

これから自分の力で強く生きて行くと思います。

そっとしておいてあげてはいかがでしょうか？」

杏子のいないところでそんなに万梨亜は頑張ってきたのだ。

抱きしめてもらいたい母親はもう自分のことを迎えないのだという諦めと共にこんなに強くなって。

杏子はもう何も万梨亜のためにしてあげられないことがないのだ。

そう思うと杏子は涙が止まらなくなった。

杏子は19歳の時、就職先の工場で、同期入社で入った男の子幸次郎と付き合っていた。

そしてコンドームを付けずにセックスしてしまい、若くして子供を身ごもってしまう。

幸次郎もまだ19歳。

遊びたいざかりだった。

「子供ができたって？」

本当か？

俺の子どもじゃないってこともあるのじゃないのか？」

「何を言うの？」

私が他の誰とセックスするって言うのよ！

あの時私はコンドームを付けて欲しいって言ったのに、どうしても生でして中に出したいってあんたが言ったからこうなったのよ。」

「俺、まだまだ遊びたいし、責任取って結婚なんて嫌だぞ。

頼む、堕胎してくれ。

その費用なら出すし。」

「よくそんなひどいことが言えるわね。」

「俺、最近思っていた。」

お前とは結婚できない。

お前とは合わないことがわかってきた。

だから別れたかったよ、実は。

だから頼む中絶してくれ。」

こうして幸次郎とは別れることになった。

中絶しないといけないのかな、そう思って、その日の帰り、公園のブランコに乗っていたら。

「お母さん、お母さんに会いたい。」

杏子のお腹からそんな声が聞えて来た。

杏子は涙が止まらなくなった。

そして思った。

このお腹の中に宿った命を産もうと。

杏子もこの子にすぐ会いたくなった。

もしかしたら杏子はこのお腹の中の子どもに会うために生まれてきたのではないかと思った。

杏子は一人でこのお腹の中の子どもを産んで育てる決心をした。

工場には正社員で入っていて、ボーナスまで出るのだから生活していけそうだ。

問題は両親の説得だった。

固い家に育った杏子。

こんなに若く子供を産んで育て、しかも結婚しないとなると両親が承知してくれそうもない。

「なんだと！」

子どもを産んで育てるだと！

お前はまだ19歳じゃないか！

相手は誰だ！

相手はどう言っているのだ！」

家に帰って父親信助の方に先に子供を産むことを告げるとすごい剣幕で叱られた。

「相手は中絶するように言っています。」

それに私への愛は冷めたと言っています。」

「なんだと！」

その男を連れて来い！

ぶん殴ってやる！

お前もお前だ！

そんないい加減なやつと付き合っていたのか？」

「私が一目惚れしたの。」

すごくかっこいい男の子だから。

だから彼を叱らないで！」

「全く、お前は心配ばかりかけやがって！

お母さんがこれを知ったらどんなに辛い思いをするか。

お前はお母さんが可哀想じゃないのか？

最近ろくにお母さんのお見舞いも行っていないと思ったら。

そんなつまらない男と遊んでいたのだな？」

杏子の母親は。

母親の奈都（なつ）は小さな頃から、心臓が悪く、結婚もやっとだった。

でもどうしても杏子を産みたくて、無理して産んだので余計に心臓が悪くなった。

あんまり心臓が痛むので、杏子が小さい頃から、病院で暮らしている。

それなのに奈都の心臓を悪くしてしまうようなことをしてかしてしまった。

「とにかく、手術をするしかないな。

お腹の子どもには可哀想だけど。

頼りないお前が子供を育てられる訳がない！

もしお母さんが丈夫だったら、お母さんに家事や育児を頼むことができるけど。

お母さんは家事さえできないくらいに弱っている。

お父さんはわかるよ。

ずっとお前を育て、家事をしてきてから。

それがどんなに大変か。

お前はなにひとつ家事を手伝おうとしなかったからわからないだろうけど。

お嬢様育ちのお前に育児と家事と仕事をいっぺんにやるなんて無理だ。

可哀想だけど、杏子、そうしよう。」

「嫌！」

このお腹の赤ちゃんにどうしても会いたい。

赤ちゃんが私に会いたがっているのがわかるの。

私、育児と家事と仕事頑張る！

もう19歳なら大人じゃない！

お父さんやお母さんには迷惑かけないから！

だからお願い！

この子の母親にならせて！」

あんまり毎日杏子が子供を産みたいと言うのでついに信助は根負けしてしまう。

そしていよいよ奈都にこんな残酷なことを告げることになった。

杏子はこのお腹の子どもと一緒にどこか遠くへ逃げたい気持ちにかられた。

「な、なんですって！」

杏子がこの若さでシングルマザーになり子供を育てるっていうの？」

そう言ったら、心臓が痛んだらしく胸を押さえてうずくまった。

「ほら！」

思った通りになった！

どれだけお母さんに心配をかけるのだ！

やっぱり考え直しなさい！

お母さんのためにも。」

「いいの。」

私のことは気にしないで。

杏子のこうと思った道を行きなさい。

お母さんのことは心配しないで。

お母さんもっと元気になって家に戻ってあなたの代りに育児や家事をしてあげる。」

「お母さん！」

思ってもいない奈都の言葉に涙が止まらなくなる。

「私は今まで杏子のお母さんらしいこと何一つしてあげられなかったから、こんな時こそ役に立ちたいの。」

「お母さん、そんなこと言わないで。」

お母さん、心臓が痛いのに、無理して運動着のゼッケンつけてくれてたじゃない。

それに裁縫箱や靴や運動着を入れる袋。

病院にミシンを持ち込んで可愛い袋作ってくれたじゃない。

お人形さんの服も作ってくれたことがあるし。

冬にはマフラーやセーター、帽子を編んでくれたじゃない。

私は小学校、中学校とどれだけそれに救われたことか。

今でもお母さんの作ってくれたもの全部宝物だよ。

お母さんには絶対に迷惑かけない。

だからこの病院で治療に専念して。

こんなに心配かけちゃったけど、私一人で頑張るから。

この家を出ようと思うの。

安いアパート借りて、このお腹の赤ちゃん二人で暮らすわ。

時々、この病院にも連れて行くしね。」

「私もこんなに若くして、おばあちゃんになるのね。

可愛い孫が見らるのね。

私、もう先が長くないと思っていたの。

あなたの子ども、そう孫もきつと見る事ができないと諦めていたのよ。

だから見られて嬉しい。

毎日見たいぐらい。」

「そう言ってもらえるの一番嬉しい。

毎日連れて行くしね。」

こうして杏子はお腹の子どもを産むことにしたのだ。

そして生まれてからが戦場だった。

杏子は生まれた子供万梨亜と二人でアパートに暮らしていた。

聖母マリアのように優しく母性溢れる子供に育って欲しいという思いを込めて付けた名前だ。

万梨亜は夜泣きを一切しない手のかからない子供だった。

でも熱を出すとすぐ高熱になるのだ。

ある日万梨亜がひどい風邪をひき、40度近い高熱が出た。

万梨亜の看病をつきつきりで行っていたらいつのまにか杏子にもその風邪がうつった。悪寒がして頭痛もひどくなった。

でも万梨亜を守らないといけない。

割れるように痛い頭を押さえ、万梨亜を必死で看病する杏子。

一晩中看病していたら何とか万梨亜の高熱が下がり、平熱になった。

しかし杏子はフラフラで立ち上がることができない。

でも仕事に行かないといけない。

そしてまた今日に限って朝早くから行かなくてはならない。

ふらふらになりながらも、万梨亜を保育所に連れて行く準備をし、それから自分が仕事に行く準備をした。

万梨亜は保育所に預けなければ仕事に専念できない。

しかしこの保育所に預けるお金も高額だ。

杏子は残業や休日出勤をして稼いだ。

40度の熱を出しながらも仕事に行った。

半導体の不良をチェックする仕事だ。

発熱と疲労と睡眠不足でフラフラになり時々記憶が飛ぶ。

その日は残業もした。

杏子は家事と育児と仕事を一挙にやるのがこんなに大変なことだとわかった。

そんな杏子が幸せに感じる時があった。

母奈都に万梨亜を会せた時だ。

「可愛いねえ。

孫ってこんなに可愛いものなのね。

神様に感謝しているのよ。

孫なんて見ないであの世に行くとかばかり思っていたし。

本当になんて可愛いのかしら。

生まれて来て良かったって最近すごく思うの。

ありがとう、杏子。

こんなに可愛い万梨亜ちゃんを産んでくれて。

万梨亜ちゃんに会せてくれて。」

この出産は間違っていたのだろうか？

育児や家事で辛い思いをするたびにそう思い、万梨亜を産んだことを後悔することもあったけど、こんな風に奈都が喜んでくれると本当に嬉しい。

万梨亜を産んで良かったのだと思える。

奈都は得意のミシンで万梨亜の可愛い洋服を作った。

そして小さくて可愛い毛糸の帽子や靴下を編んだ。

万梨亜をいつも抱っこして笑い、目の中に入れても痛くないくらいに可愛がった。

父の信助も最初は大反対だったが、万梨亜があまりに可愛いので、

奈都に負けないくらいに可愛がった。

信助は会社の重役となっていたので杏子の家事や育児を全く手伝えない。

でも可愛いおもちゃやぬいぐるみを見つけては万梨亜にあげていた。

万梨亜はすぐくと育ち、やがて小学生になった。

万梨亜は家が貧乏なことも、杏子が働いてばかりで一緒にいけないことも、なにひと

つ文句を言ったことがない。

同い年の子みたいに何かを買って欲しいと我儘を言うことも全くなかった。

残業で遅く帰ってきてても文句も言わず笑顔で迎えてくれた。

本当に聞き分けのいい、手のかからない、いい子だった。

歩行も早くできたし、言語も早く覚えた。

トイレだって誰より早く一人で行けるようになったし、おむつが取れてからもおねし

よは一度もしなかった。

絵本も同い年くらいの子より早く読めるようになった。

絵も本も大好きな万梨亜。

信助が絵本をいっぱい買ってきたので、それを大切にして読んでいた。

そして読むだけでは飽き足らなくなり、自分で絵本を作ったりしていた。

「お母さん、万梨亜将来、絵本描く人になりたい。」

万梨亜はいつもそう言っていた。

万梨亜は絵もすごく上手だった。

幼稚園でも絵を描く時が一番幸せだった。

そして童話を自分で作るのもすごくうまかった。

子どもらしい可愛い部分もあり、大人っぽいしっかりしている部分もある万梨亜。

そんな万梨亜が可愛くて仕方のない杏子だった。

万梨亜は何も欲しがらない子供だった。

ある月に残業代がいっぱい入ったので奮発して万梨亜に美味しいものを食べさせ、好

きなものを買ってあげようとデパートに行った。

「うわぁ、可愛いデディペア。」

万梨亜、買ってあげる。」

「いない。」

万梨亜何もいない。

お母さんが欲しいものを買って。」

心の優しい万梨亜はいつもそう言って絶対に杏子に買わせない。

「こーんなに可愛い服があるわ！

万梨亜に似合いそう。

じゃあ、服を買ってあげる。」

「服もいない。」

お母さん、いつも同じ服ばかりじゃない。

お母さんの服を買って！」

万梨亜はいつもこうだ。

自分の幸せより杏子の幸せを願ってしまう子だった。

あんまり万梨亜に我慢ばかりさせては可哀想だ。

信助がそう思い、杏子と万梨亜に旅行券をプレゼントした。

家族旅行なんてもちろん行ったこともなかったので万梨亜は大喜びだった。

夏休みに広島県尾道に旅行に行くことになった。

新幹線で福山駅に降りて、そこからJR山陽本線に乗って尾道まで行った。

「綺麗！

お母さん！

見て見て！

海が綺麗。

海なんて初めて見た。」

尾道に着き、海を見るなり、大喜びの万梨亜。

家族二人だけの旅が大満足しているみたいだった。

尾道駅周辺は、海と山に囲まれて美しい町だった。

杏子は真理亜を喜ばせようと綿密に旅の計画を立てた。

「万梨亜、海を見たことないでしょ？

これから遊園地に行つて、水族館に行きます。

それからちやうど夕方になるからサンセットクルージングします。」

「サンセットクルージング？」

「夕陽を見ながら船に乗るの。」

「夕陽を見ながら船に？」

本当に？

わあーい！

楽しそう！」

「万梨亜幼稚園の遠足以外で遊園地にも行つたことなかったでしょ？

これから遊園地で遊びます。」

みろくの里という遊園地に行くことになった。

万梨亜と杏子はブランコみたいになっているぐるぐる回る乗り物に乗った。

「うわあ。

楽しい！

もう一回乗つてもいい？」

普段は大人びている万梨亜もさすがに嬉しかったみたいで大はしゃぎだった。

後ジェットコースターにも生まれて初めて乗った。

「怖かったけど楽しい！

お母さん、遊園地って楽しいね。」

その後、水族館にも行つた。

天井まで水槽になっている場所があり、びっくりする万梨亜。

「お母さん、すごい、天井に魚がいっぱい泳いでいる。」

落ちてこないの？

落ちてきたらどうしよう？」

「大丈夫、水族館のガラスは頑丈だから。」

「わあ、亀さんがいっぱい泳いでいる、可愛い！」

「この水族館は亀がいっぱいいることで有名だって。」

「亀さんって泳ぐんだね。

びっくりした。

亀さんが泳ぐの知らなかった。」

「本当ね、亀も泳ぐのだね。」

「可愛いね。」

お母さん。」

水族館の最後のコーナーに可愛い亀のぬいぐるみがあった。あまりの可愛らしさについて手に取って見てしまう万梨亜。

「可愛い！」

でもはっとなり、元の場所に戻す万梨亜。

「いいのよ。」

今日ぐらい。

旅行なんて滅多に行けないもの。

今日の記念に亀のぬいぐるみ買ってあげるわ。

遠慮しないの。」

「嬉しい！」

大事にするね。

ありがとう、お母さん。」

万梨亜はよっぽど気に入ったのかその後もその亀のぬいぐるみを大事にした。そして万梨亜待望のサンセットクルージングの時間になった。

船に乗る前から夕陽がすごく綺麗だった。

そして船に乗り、サンセットクルージングが始まる。

「すごい、お母さん。」

海も真っ赤になるのね。」

「本当ね、海が真っ赤っかだね。」

「綺麗、夕陽。」

こんなに綺麗な夕陽初めて見た。

海も綺麗だし、夕陽も綺麗。

万梨亜、今、幸せ。」

こんなに幸せそうな表情の万梨亜を初めて見たような気がした。夕ご飯はリゾートホテルのベランダでバーベキューにした。

ちようど毎日花火大会をしていて綺麗に花火が上がった。

「美味しい。」

お母さん、バーベキューって美味しいね。」

「万梨亜がそんなに喜んでくれてお母さんも嬉しいわ。これもおじいちゃんのお蔭よ。」

家に帰ったらおじいちゃんにちゃんとお礼を言うのよ。」

「おじいちゃんにお土産買わないとね。」

何がいいかな。」

「おじいちゃんには美味しいお酒を買って帰るわ。」

「万梨亜、お年玉を貯めた貯金箱持って来たら良かったな。」

おじいちゃんに何も買ってあげられないや。」

「いいのいいの。」

お礼のお土産はお母さんが買うから。」

万梨亜は何も気にしなくていいの。」

万梨亜はこんな時でも自分より、人のことを考えてしまうのだ。

「おじいちゃんとおばあちゃんにもこの花火見せたいな。」

それにバーベキューも食べさせてあげたい。」

「今度はママがお金を貯めるから、おじいちゃんとおばあちゃんと、万梨亜と私で旅行に行こうね。」

「うん。」

そうしよう。

それに万梨亜が大きくなったら万梨亜のお金でおじいちゃんとおばあちゃんに旅行をプレゼントする。」

杏子はあまりにしっかりと万梨亜の発言に涙目になった。

次の日は、フェリーに乗って、向島というところに行った。

向島は瀬戸内海に浮かぶ島。

そこに小学校や病院、レストラン、コンビニなどがあり独立した世界があった。

今日は万梨亜にとって生まれて初めての海水浴だった。

この日のために可愛い水着も買ってあげた。

「きー！」

冷たい！

でも気持ちいい！」

まだ万梨亜は泳げないので浮輪につかまって海に浮かんでいる。

でもそれだけでもとても幸せそうに見えた。

「お母さん、海っていいね。」

楽しいね。」

「万梨亜がそんなに喜んでくれてお母さん嬉しいわ。」

万梨亜今、幸せ？」

「お母さん、万梨亜すごく幸せ。」

ここに連れて来てくれてありがとう。」

「そんなに喜ぶなら、毎年旅行に行こうか？」

お母さん、残業増やしてお金を貯めたら、ちよつと無理しても行けないこともないし。」

「いいの、節約しないとね。」

お母さんにこれ以上無理させたくないもん。」

万梨亜これが最後でもいい。」

「万梨亜。」

杏子は万梨亜を海の中でぎゅつと抱きしめた。

こういった万梨亜との旅行はまた行けると思っていた。

でもまさかこれが最初で最後の万梨亜との旅行になるとは杏子は思ってもいなかった。

万梨亜はおばあさんである奈都が大好きだった。

よく杏子と万梨亜の二人で奈都のお見舞いに行った。

「ほら万梨亜、算数セットの袋を作ったよ。」

「わあい、おばあちゃんありがとう。」

可愛い！」

奈都は可愛い孫である万梨亜の喜ぶ顔が見たくて、いつも可愛らしい袋をこしらえた。
奈都にとって万梨亜は可愛らしくてたまらないようだ。

「おばあちゃん、万梨亜が生まれた時が、人生でも一番幸せだったよ。」

「…本当、本当に？」

そう言った時の万梨亜の複雑そうな顔、それに奈都も、杏子も気が付いていなかった。
その複雑そうな顔のわけがわかるのはもつと後だった。
そんな万梨亜がある日思いがけないことを言った。

「お母さん。」

お仕事で疲れて帰って来るのにお料理作るの可哀想。

私にも料理を教えて！

これからはこの家のご飯、万梨亜が作る。

洗濯も掃除も家に帰って来てから万梨亜がしてあげる。

お母さんはその分、お仕事頑張つて！

万梨亜お勉強も頑張るから。」

万梨亜は小さい頃からお利口でいたら杏子が喜ぶと思っていて、勉強もよく頑張った。クラスでもいつも成績はトップだった。

杏子はまだ小学校 1 年生の万梨亜に家事をさせるのは最初、可哀想だと思った。

でももしかしたら自分の身にこれから何かあるかも知れない。

そうなったら万梨亜は自分で自分を守るしかないと思つた。

その時のために小学校から何もかもできるようにした方がいいのかも知れないと思つた。

その日から杏子は料理、洗濯、掃除を教えた。

裁縫に関しては奈都がしてくれるのでそれは今は教えなかった。

万梨亜は賢い子だったので、料理も掃除も洗濯も器用にこなした。

こうして小学校 1 年生の万梨亜の家事が始まった。

万梨亜はまだ小さいくて、踏み台に乗らないと、まな板が置いてある場所やお鍋をかける場所に届かない。

でも一生懸命に小さな背丈で料理を作った。

天ぷらやエビフライはさすがに小学校 1 年生の子どもにさせるのは危ないのでそれは杏子が土曜日か日曜日に作ることにした。

万梨亜は主に煮物や焼き魚、ハンバーグ、カレーなど。

杏子がひらかなでわかりやすく書いたレシピを元に器用に作る万梨亜。

大きなスプーンと小さなスプーンを使い煮物もびっくりするくらい美味しい煮物を作った。

カレーは慣れないうちは生煮えになっていたがやがてしっかりと煮込んだカレーを作ることができるようになった。

焼き魚はキッチンに内蔵されているタイマーを利用し、上手に焼いた。

役割分担をして杏子と万梨亜が家事をし、このままうまくいくと思っていた。

ささやかながらも杏子と万梨亜の生活はずっと続くと思っていた。

しかし、万梨亜が家事をすることがきっかけで家庭は壊れていく。

万梨亜は疲れているとか、しんどいとか全然言わない子供だった。

あの日は運動会の練習で万梨亜は疲労困憊していたのだ。

それに杏子は気がつくべきだった。

学校でどんな行事があるとも一日も家事を休まない万梨亜。

あの日もいつものように万梨亜が先に帰り、得意のわかめと豆腐の味噌汁を作っていた。

もう少しで完成という時だった。

仕事から帰った杏子が今日も料理を作ってくれている万梨亜にありがとうを言いにくッチンに行った。

そしてありがとうを言う前だった。

運動会の疲れのためふらつとなった万梨亜。

ふらついて、踏み台から足を踏み外し、その拍子で腕が鍋に当たり、ひっくり返ってしまったのだ。

万梨亜の肩から腕にかけて沸騰寸前のお味噌汁がぶっかけられる。

「きゃー！」

一瞬の出来事に悲鳴をあげる杏子。

「つつっ」

熱い。

お母さん、助けて！

熱い。」

急いで救急車を呼んだ。

そして待っている間、風呂場で万梨亜の肩と腕をシャワーで冷やす。

どんなに冷たくなっても万梨亜の火傷が消えない。

そして救急車に乗って、万梨亜は病院に行った。

奈都が入院している病院だ。

万梨亜は手当てしてもらったけど、火傷のあとが残った。

女の子なのにこんなひどい傷を負わせてしまった。

自分がまだ小学校 1 年生の万梨亜に料理なんてさせたので。

こんなに疲れて帰ってきたのに料理なんてさせたから。

それだけではなかった、こんなことも起きてしまう。

ある日、家に帰ったら、万梨亜が台所でうずくまっていた。

「うー、うー、お母さん、苦しい。」

「どうしたの？」

万梨亜、どうしたの？」

「お母さんは、私がいるから結婚できないの？」

私を産んだから、苦労しているの？」

私なんて、生まれてこなかった方が良かったのかな。」

「何を言うの。」

万梨亜、万梨亜が生まれてきてくれて、どんなに嬉しかったか。」

「うーうー、胸が苦しい。」

万梨亜も祖母奈都と同じで心臓があまり強くない。

慌てて、万梨亜を病院に連れて行った。

その間も万梨亜は。

「お母さん、私が生まれてごめんなさい。」

私がお母さんの子どもになってごめんなさい。」

ずっと杏子に謝っていた。

万梨亜は心療内科にかかることになった。

心の病が原因で心臓を悪くしてしまったみたいだ。

心療内科の先生と杏子が面会することになった。

「万梨亜さんは、小学校でいじめっ子にいじめられていたみたいです。」

『万梨亜ちゃん、生まれてこない方が良かったのよ。』

万梨亜ちゃんがいるからお母さん結婚できないのよ。

万梨亜ちゃんがいるからお母さん一生懸命働かないといけないのよ。

それに服も同じ服ばかりだし。

万梨亜ちゃんのお母さん可哀想。』

と言われたと聴きました。」

「そんな。」

私のせいで。

私が一人であの子を産んだせいで。

どうして万梨亜は何も言わないんですか？」

「万梨亜さんは一人で抱え込んでいたみたいです。

心臓が悪くなるくらいに悩んでいたみたいです。

これだけはお母さんに言えない、心配をかける、そう言っていました。

万梨亜さんは同じ年くらいのお子さんに比べて、自分のことより、人のことばかり考える女の子ですね。

これからは悩み事をお母さんが聴いてあげないといけないですね。」

万梨亜は頑固なところもある。

これからもどんなに自分が辛くても、隠して気丈にふるまうだろう。

杏子と万梨亜と一緒にいる限り、万梨亜は自分がいくら辛いことがあっても我慢して生きるだろう。

杏子は決心した、万梨亜を児童福祉施設に入れようと。

杏子と二人で生活していると万梨亜の心と体に支障をきたす。

せめて万梨亜が高校生になるまで自分と環境が一緒である子がいっぱいいる、児童福祉施設で生活させようと思った。

そしてこれからうんと頑張ってお金持ちになって、家政婦さんを雇えるくらいになって、それから万梨亜と一緒に暮らそうと。

それまでの間だけ児童福祉施設に預けよう。

万梨亜が父親のいないことからかわれないような場所に預けよう。

万梨亜が家事をしないで済むような場所に預けよう。

こんなに勉強ができるし、勉強に専念させよう。

その当時、母子家庭だったイギリスの女流作家がファンタジー小説を書いて、それが世界的ヒットになりお金持ちになったということが話題になっていた。

杏子は高校生の頃から小説を書いていた。

高校では文芸部に所属していた。

万梨亜を身ごもるまでずっと小説を書いていた。

でもさすがに万梨亜が生まれてからはそんな時間がなく小説から遠ざかっていた。子どもの頃からの杏子の将来の夢はずっと小説家になることだった。

小さな高校生の小説コンクールで優勝したこともあった。小学校の頃から作文は得意で、さまざまな賞を受賞していた。もし、自分の書いた小説が大きなコンクールで優勝したら。もし小説家になってお金持ちになったら。そしたら万梨亜にもう二度と苦労させなくて済み、勉強に専念できる家庭を築ける。工場で働きながらお金を貯めて、小説も書こうと思った。小説家の母がいたら、万梨亜もいじめられないだろう。杏子の好きなことでお金を稼ぐことができれば、万梨亜も気が楽になり安心してくれるだろう。

万梨亜は児童福祉施設に行くことになった。

その前日、奈都のお見舞いに行き、さよならすることになった。

「こんな可愛い万梨亜に会えなくなるなんて。」

奈都はそう言いながら号泣した。

「万梨亜、どこにいても、万梨亜は私の可愛い孫ですよ。

ずっと万梨亜が幸せになるように祈っているからね。

これ、万梨亜のために編んだのよ。」

奈都は自分の編んだ混ざり毛糸のマフラーを万梨亜の首にかけた。

「ごめんね。

こんなことしかしてやれなくて。

私がつと丈夫だったら、万梨亜の世話をずつととしてあげることができたのに。美味しい料理を作ったり洗濯したり掃除したり。

万梨亜に火傷させることもなかったのに。」

万梨亜を抱きしめて奈都は言う。

「何を言っているの、おばあちゃん。

おばあちゃんは算数セットや靴、体操着の袋作ってくれたじゃない。

このマフラーだって編んでくれたし。

今のおばあちゃんでもいいのよ。

今のおばあちゃんが大好き。

万梨亜、どこにいても、おばあちゃんのこと大好き。

このマフラーありがとう。

ずっとおばあちゃんだと思っただけにする。」

万梨亜と奈都はずっと抱きしめ合っていた。

万梨亜が児童福祉施設に行く日が来た。

「これでお母さん、楽になるね。」

好きな人と結婚もできるし、可愛いお洋服を着られるし、あんなに働かなくてもいいし。」

「何を言うの、万梨亜は。」

私、結婚なんかしたくないし、可愛いお洋服も着られなくていいし、働くのだって大好きよ。

そんなこと言わないでちょうだい。

今まで万梨亜がいてくれたから幸せだったのよ。

万梨亜と出会えてお母さん、人生で一番幸せだった。

おばあちゃんもおじいちゃんもそうよ。

万梨亜の笑顔は人を幸せにするわ。

だから施設に入ってもいつも笑ってなさい。

万梨亜が笑うだけでみんなを幸せにできるの。

そして、万梨亜が大きくなったら必ず迎えに行くしね。」

「大きくなったらっていつ？」

万梨亜はそれまで待ってないといけないの。」

万梨亜には珍しく困ったことを言った。

杏子と別れるのがよっぽど辛いのだ。

杏子は涙が止まらなくなった。

「ごめん、お母さんにもそれがわからない。でも待っていて。」

必ずお母さんと一緒に暮らそうね。

それまでお母さん頑張って働くから。

お金持ちになって万梨亜を迎えに行くしね。」

「お母さん。」

万梨亜お金持ちになんてなりたくない。

もう、いじめられても我慢する。

お母さんさえ、いてくれたらいいの。

お母さんが寝るときに毎晩抱きしめてくれるだけで耐えられる。

だから、やっぱり、施設に入るの嫌だ。

嫌だよ！

お母さん。」

「だめよ。

万梨亜はまたすぐ我慢するから。

施設に入っても我慢したらだめよ。

何でも先生に打ち明けて相談にのってもらうのよ。」

「お母さん！

万梨亜施設になんて行かない！

お母さんと一緒にいる！」

「万梨亜ごめんね。

お母さんが全部、悪いの。

ごめんね。」

万梨亜と杏子は、ずっと抱きしめ合って泣いていた。

杏子は里心がついたらダメなので万梨亜が大きくなるまで会いに行かないことを心に決めた。

杏子は 5 年間 24 歳になるまで工場に勤務していた。

そして 25 歳の時からファミレスで働くことにした。

昼間はファミレスでウェイトレス、夜になるとファミレスで小説を書いた。

イギリスの作家を真似した。

杏子はファミレスで小説を書くといい考えがいっぱい浮かんだ。

ファミレスに来ているお客さんの会話を聴くとそこからヒントを得て、面白いネタがいっぱい浮かぶのだ。

そして小説コンクールではなく脚本コンクールで 30 歳の時に優勝し、見事脚本家になることができた。

「派遣ロボット松次郎」という作品だ。

派遣会社で働くロボットの話。

勉強、運動、お手伝い。

何をさせても落ちこぼれの小学生ロボット松次郎。

そんな劣等生ロボットの松次郎が、子供をなくした夫婦の元に息子として派遣に行く。何をさせても劣等生の松次郎が子供をなくした二人を幸せにできるのか。

こんなストーリーだ。

これはドラマ化され、視聴率もよく、大人気になった。

それから次から次へと仕事が舞い込み、忙しい毎日を過ごしている。

後5年、後5年頑張ったら、万梨亜と一緒に暮らせる。

そう思って頑張った。

でも万梨亜は、16年間の間に待ちくたびれて、杏子なしで一人生きていくという。

杏子はそれでも諦めきれない。

何度でも万梨亜に会いに行こうと思った。

そして一緒に暮らせる日が来たら、16年間分、万梨亜に愛をあげようと思った。

杏子は万梨亜のためにもまた新しい脚本を書かなければならない。

その日も、ファミレスで隣の女の子に二人の会話に耳を傾けた

杏子は地獄耳だ。

杏子が注意して故意に聴いているせいもあり、いつも隣の人の会話を聴きとることができる。

隣に座った女の子は万梨亜と同年ぐらいの背の高い女の子と小さい女の子二人だ。その背の高い女の子の方は静音、背の低い女の子の方は美園と言った。

静音が言った。

「あんだ、お母さんの財布から、2万円抜き取ってきなさいよ！」
美園が言った。

「そんな。

それだけではない。

許して、お姉ちゃん。」

「もし2万円取って来なかったら、今までより、もっといじめるよ。
それでもいいの？」

わかったわね。

お母さんの財布から2万円取って来るのよ。」

美園と静音の二人は出て行った。

そして美園と静音は別方向へ歩いて行った。

あまりにひどい会話だったのでさすがに杏子は、美園の方を追いかけた。

「待って！」

ちよっと、待って！」

「どなたですか？」

どこかでお会いしましたっけ？」

美園は素直そうな純情そうな女の子だった。

「今の会話、聴いていたと言うか、聞えたというか。

それってまずいわよ。

お母さんの財布のお金を取るなんて。」

「わかっています。

でもそうしないと今よりもっといじめられます。」

「あの子はお姉さんなの？」

「うちはお父さんとお母さんとお姉ちゃんと私の4人家族です。

でもお姉ちゃんだけは血が繋がってないのです。

お姉ちゃんはもらわれ子で。

お母さんとお父さんの前では優等生を演じています。

でも初めて家に来た時から、私へのいじめは始まっていました。

聴いていただけますか？」

私はこれを誰かに打ち明けたいけど、打ち明けられなくて。

ずっと一人で抱え込んで我慢していました。」

「いじめを一人で抱え込んで我慢？」

まるで万梨亜の悩みを聴いているような気がした。

これは他人事じゃない。

杏子はこれからこの姉妹に関わって行こうと思った。

美園は静音がもらわれて来た日から話し出した。

元々美園は双子だったらしい。

でも双子の姉友麻（ゆま）が中学校 2 年生の時に、交通事故で死んでしまった。

友麻と美園の母親はショックから立ち直れなかった。

友麻の死から立ち直るために友麻と同じ年の静音を養護施設から引き取って養女にした。

友麻だと思つて静音を可愛がり大切に育てることにした。

美園はずっと友麻に守られていたので代わりに静音にも美園を守ってもらおうと思つた。

でも守るところじゃなかった。

静音はもらわれてきた日に美園に蔭でこう言つた。

「あなたはこれから私の言う通りにしてもらうわ。」

その言い方がすごく意地悪くて美園は震え上がった。

また美園と静音は一緒に部屋になつたので息が詰まりそうになつた。

しばらく月日が経つと、静音はこんなことを言つてきた。

中間試験のテスト 1 週間前のことだつた。

「あなたは成績が学年でもトップみたいね。」

私も成績は前の学校でトップだつたわ。

だから私より高い点数取らないでくれる。

明日の中間テストでわざと低い点数を取りなさい。」

「そんな。」

なんで私がそんなことしなきゃならないの？」

「いいの？」

あのことをお母さんに言うわよ。

あんたが男の子と付き合っていること。」

「どうしてそれを？」

美園の母親は厳しくて、大学生になるまで男の子と付き合うことに大反対だつた。

でも初恋の男の子に好きだと言われて、嬉しくて、美園はその男の子と付き合っていた。

「プリクラ撮りにゲームセンターによく行っていることも知っているのよ。」

この家はゲームセンターに行くことも禁止じゃなかったっけ？」

美園はどうすることもできずに、せっかく勉強した中間試験をわざと間違え低い点数

を取らなければならなかった。

「美園、ちよつと来なさい。」

今回の中間試験はどうして結果を見せないの？

試験結果見せないさい！」

美園は渋々、低い点数だった中間試験の結果を見せた。

数学 50 点、理科 65 点、国語 43 点、英語 32 点、社会 48 点。

散々な結果だった。

もう少しましな点数にしようかと思ったけど、一緒の部屋で過ごす静音が怖くてこうなった。

「順位は？」

順位はどうだったの？」

美園は順位の書いた紙を恐る恐る渡した。

「なんですって、122 位！」

1 年生の時はずっと学年で 5 番以内だったのに！

全然勉強できてないのね！」

「静音！」

静音いらつしやい！

中間試験の結果を持っていらつしやい！」

静音は試験用紙を持ってリビングに来た。

そしてその結果を母親に見せた。

数学 92 点、理科 95 点、国語 100 点、英語 97 点、社会 93 点。

ほとんど満点に近い成績だ。

「見なさい！」

まだこの中学に入って間もない静音はこんなに高い点数を取ることができたのに。

あなたは何をしていたの？

静音を少しは見習いなさい！

静音は学年で何位だったの？」

母親は静音から順位の書いた紙を受け取った。

「まあ、1 位！」

すごいじゃない！

施設の先生から静音は優秀だと聴いていたけどこれほどだなんて。

ずっと今までも1位だったですもんね。

静音はずっとこれからも1位を取りなさい。

美園、あなた最近、ぼうつとしていた時があるわね。

まさか付き合っている男の子でもいるのじゃないでしょうね？

だから成績が下がったのじゃないでしょうね？」

ふと、怖くなり静音の方を見た。

静音はにやつとこつちを見て笑った。

凍り付いてしまう美園。

静音はこれくらいでは許してくれなかった。

「今度の日曜日はお母さん、習っているフラワーアレンジメントの展覧会があるから一日中留守にするでしょ？」

その日、お母さんの誕生日よね？

お母さんの大好きなカレーを作って、お母さんを喜ばせない？」

珍しくまともなことを言ってくる。

そして当日、二人でお母さんの大好きなカレーを作ることにした。

いざ、静音がジャガイモの皮を剥こうとしたら。

静音の様子が変だった。

静音の体全身が震えだし、その全身の震えを自分で抑えることができないのがこつちにも伝わってくる。

静音の包丁を持つ手もずっと震えだし、それをもう片方の手が抑えようとする。でも震えはひどくなるばかり。

やがて、包丁を手を持つことができなくなり、包丁を床に落としてしまう。

「ごめん。」

美園が全部作って。

私は気分が悪いの。

部屋で寝てくる。」

美園は仕方なしに、カレーを一人で作った。

普段料理を全くしない美園だけど、カレーだけは調理実習で作ったことがあった。その時のレシピが残っていたのでその通りに作った。

カレーは初めてにしては上出来だった。

そしてカレーができて、もうすぐお母さんが帰ってくる時間に近くなった。

包丁を落とした時は真っ青な顔をしていた静音が顔色をよくしてリビングに戻ってきた。

「今日のこのカレー、美園じゃなくて私が全部作ったってことにしてくれない？」

信じられないことを静音が言ってきた。

「そんな。」

私が一人でこんなに一生懸命作ったのに、ひどい、お姉ちゃん。」

「もし本当のことを言ったら、わかっているわね。」

成績が下がっているのに、男の子と付き合っているなんてことになったらお母さんどんなにがっかりするか。

しづぶ、了解した美園。

そして家に帰って来た母親は、食卓に並べられているカレーを見て、びっくりする。

「誰がカレーを作ってくれたの？」

「お母さん、お誕生日おめでとう。」

私よ、お母さん。

お母さんへの誕生日プレゼントなの。」

「まあ、静音！」

静音が一人で作ってくれたの？」

静音は美園の方を意地悪く見た。

「そうよ、一人で作ったの。」

「ありがとう、なんて優しい子なの？」

私の誕生日にカレーの食事をプレゼントだなんて。

お母さん、こんなに嬉しい誕生日プレゼント初めてよ。

美園はその時、何をしていたの。」

美園は黙り込む。

その時静音は悪魔みたいな顔で美園を睨んだ。

「へ、部屋でゲームしてました。」

「部屋でゲーム？」

静音は一生懸命にカレーを作ってくれていたのに、あなたはゲームなんてしてたの。

日頃の私への感謝の気持ちも何もないのね。
なんて薄情な子なの？

成績も下がってきたし、お母さん、最近の静音に失望しているのよ。
本当に男の子と付き合っていないわよね。」

静音が何か言おうとした。

それを遮って美園が言った。

「これからはお姉ちゃんを見習うから。」

「本当、美園もちよつとは静音を見習わないとね。

成績は下がる、誕生日プレゼントのカレーを作るのをさぼる。
最近の美園、何もいいところがないじゃない！

静音、おいで。」

母親は静音をぎゅつど抱きしめた。「

「なんて可愛くてお利口さんの娘なのかしら。

神様が友麻の代りを私にプレゼントしてくださったのだわ

静音、あなたは私より先に死んではだめよ。

ずっとこの家にてね。」

母親は静音を抱きしめながら泣いた。

その光景を立ち尽くして見ていた美園はいたたまれなくなり、部屋に行き、一人ベッドに入って号泣していた。

まだまだいじめは続く。

母親がフラワーアレンジメントの講師の資格を取るためにみっちり勉強することになった。

朝から出かけ夜 8 時になるまで帰って来られないのだ。

その間、洗濯と掃除だけ、娘二人がすることになった。

また静音が言った。

「あんたが洗濯と掃除しなさいよ。

そして私がしたことにするから。」

「待ってよ！

あなたの思い通りになると思わないで。」

「何よ、その口の聞きかたは！

お母さんに付き合っていることばらすわよ。」

「いいわ。」

それくらい言ってくれても。

私は今までされたこと全部言うから！」

静音はお母さんが一番大事にしている友達のフランス土産の花器を持ち上げて力いっぱい床に投げつけた。

「何をするの？」

どうしてそんなひどいこと。」

「これも美園がしたことにするわ。」

「何ですって！」

どうしてそんなに私が悪い子にならないといけないの！」

「お母さんはあなたじゃなくて私の方が可愛くなってきたのよ。」

もう私なしじゃいられないみたいよ。

死んだ友麻以上に優秀な私をね。

もうあなたなんていららないのじゃないかしら？」

「お母さんがお姉ちゃんロスでおかしくなってきたところにつけ込んで。」

卑怯よ！」

「お母さんが、このビデオ見たらどんな思いをするかしらね。」

静音が手にしていたビデオは。

アダルトビデオだった。

「こんなもの静音が見ていると知ったら潔癖症のお母さんはどんな顔するかしら。冷ややかな表情で美園を見つめる静音。」

「どうして、それを…」

「カセットに録音したの。」

隠し撮り。」

そう言って静音はカセットデッキに、手に持っていたカセットを入れた。

それは先週の日曜日、美園の友達が4人遊びに来た時の会話が録音されていた。

「ねえ、ねえ、美園は彼氏の翔（かける）君とどこまでいったの？」

「そんなに進んでないよ。」

キスして、服の上から胸を触られたくらい。」

「嘘！」

もうセックスしているでしょ？」

「うわあ、そんなこと恥ずかしくて絶対にできないよ。」

「私はもう5回くらいセックスしたよ。」

「うそ！」

まじで！」

「痛かった？」

「怖かった？」

「痛いのは最初だけで段々いいものになってくるよ。

あんたたちもしないとね。」

「私は来週の日曜日に彼氏の部屋に行くの。」

その時にする予定。」

「私も実はもうしているの。」

でもまだ痛い。」

「私も実は今度の春休みに彼と旅行することになっていて。

その時にしようと思っているの。」

これ、みんなと旅行に行くことになっているしね。

その時は協力を頼むよ。」

「じゃあ、この中で彼氏とひとつになる約束も何もないのは美園だけね。」

「私、知っているの。」

翔君、エッチな本を机に隠し持っているよ。」

「嘘、なんでそんなエッチな本なんて隠し持っているの？」

「もう、美園は純情なんだから。」

そう言っつて、友達の一人が美園の耳にこそそこそと小さな声で話した。

翔がエッチな本で何をしているかを話したのだ。

「えー！」

嘘！

翔君そんなことしないもん！」

「翔君も健康的な中2の男の子だよ。」

本当は美園とエッチな事したけいけどこの本で我慢しているんだよ。」

「そうだよ。」

可哀想、翔君。」

「翔君が美園がさせてくれないので別れるって言ったらどうする？」

「嫌！」

絶対に別れない。

将来結婚したいもん。」

「じゃあ、させてあげるのね。」

私の彼は翔君と仲がいいし、今度の日曜日、四人で私の彼氏の家に行かない？

そこでお互いに違う部屋でしようよ！」

「その方がいいよ。」

翔君喜ぶよ。」

「男の子なんてみんなしたいと思っているよ。」

「わかった。」

そうする。

でも怖いな。」

「翔君にずっと手を握ってもらっていたらいいのよ。」

すぐに痛くなくなるから。」

「お兄ちゃんの部屋からこんなのを持ってきた。」

私、これで男の子のこと研究しているのよ。」

「何それ？」

「じゃん、アダルトビデオ。」

ちよつと観てみる？」

アダルトビデオを観る中学2年生5人。

制服を着た女子高生っぽい女の子が4人の男と性交をするというストーリーだった。

「すごい、男の子ってこんなの観てるんだ。」

純情な美園はただただびっくりしている。

「これ美園に貸してあげる。」

これ見て、相手を喜ばす術を身に付けるといいよ。」

こうして過激なアダルトビデオを美園は隠し持つことになった。

でも美園には過激すぎてとても恐ろしくてこのビデオが観られない。

「ひどい、これって盗聴じゃない？
プライバシーの侵害よ！」

「この 5 人の女子高校生の会話を聴いたらお母さんびつくりして寝込まないかしら？」

美園はそこらの子どもとは違って勉強に専念し、彼氏もいないと思っているのに。
来週の日曜日彼氏とセックスするだなんて。

そんなこと知ったらお母さん、どうなるのかしら？」

冷ややかに笑う静音。

「わかったわね。」

本当のこと言ったらこのテープをお母さんに聴かせるわよ。

さあ、急いで掃除と洗濯をするの！

ぼやぼやしないで！」

美園は泣きながら掃除と洗濯をした。

そしてちようと完了した時にお母さんが帰って来た。

「まあ、なんて綺麗に部屋が片付いているのかしら。

私が出かける前より綺麗になって。

洗濯ものもこんなに丁寧にたたんでくれたのね。

あなたたちありがとう。」

静音が美園をすごい目で睨んだ。

「お姉ちゃんが全部してくれたの。」

美園は何もしてないの。」

「そうなの、お母さん。」

美園はこんなのやつてられないなんて言って、お母さんの大事にしていた花器を叩きつけて壊してしまつて。

「まあ、美園！」

何をしてくれたの！

この花器は私の親友がフランスで買ってきてくれた高級花器なのに！
お母さんの宝物なのに！

美園、いつからそんなに悪い子になったの！
どうしてこんなひどいことできるの？

掃除、洗濯が嫌なら、もうあなたはしなくて結構です！

しばらくの間おこづかいも無しにします！

静音はよく頑張ってくれたわね。

おこづかいもアップアップしますよ。」

美園は毎晩のようにベッドで一人号泣した。

静音の美園へのいじめはまだまだ容赦ない。

「美園、あなた塾をさばりなさいよ。

そして今度の模試でひどい点数を取りなさい。」

「そんな、またお母さんに叱られる。」

「私の言う通りにしないと、このテープをお母さんに聴かせるわよ。

その方がどんなに叱られるか。」

「わかったわよ。」

美園はこのテープを母親に聴かれることが怖くて、仕方なしに塾をさばり、模試もひどい点数を取った。

ある日美園が学校から帰ってきたら、すごい剣幕でお母さんが玄関で迎えた。

「美園！

あなた塾に全然行っていないみたいね。

静音が行くように言っても全然聞かないって。

それに私があんなに中学のうちは男の子と付き合うなって言ってたのに、男の子と付き合って、ゲームセンターでプリクラを取っていたらしいわね。

男の子とこんなことして塾をさぼったのね！」

美園は塾をさぼってすることがないので翔とゲームセンターでデートしていた。

母親が床に投げつけたのはすごくたくさんの数のプリクラだった。

どれも翔と一緒に取ったものばかり。

中には口づけているものもあった。

「これを、どうして？」

「静音が教えてくれたのよ。

静音は美園にもしものがあつたらと心配して、知らせてくれたのよ。

静音に感謝しなさい。

今日、塾の先生から電話があつてね。

2週間塾をさぼっていたらしいじゃないの！

模試もすごく成績が下がっているって！

お母さん、どんなに恥ずかしかったか！

これを見なさい！」

母親が見せたのは静音の模試の結果だった。

「ほとんどの科目が満点に近いのよ！

同じ部屋で勉強しているのにどうしてこんなに違うの！

静音はちゃんと掃除も洗濯もして、塾にもきちんと行って。

美園と違って男の子と付き合うことないし、ゲームセンターにも行かないし。

最近、美園にはがっかりさせられてばかりだわ。

どうしてこんな悪い子になっちゃったのかしら。」

静音の方を見たらこれ以上ないくらいの冷酷な顔をしていて美園は震え上がった。

「どうして！

翔と付き合っていることお母さんに内緒にしてくれるのじゃなかったの？

どうしてお母さんにばらしたのよ！

だったら、もうお母さんに本当のことを言うわよ。

静音は天使の顔をした悪魔だって！」

「これを、お母さんに見せてもいいの？」

美園は一枚の写真を見せた。

「こ、これは…」

美園は最近むしゃくしゃしていた。

母親の愛情不足で。

静音が憎らしくて。

結局あの日曜日は静音にまた弱みを握られるのが怖くて、友達の家翔と遊びに行くのはやめた。

塾をさぼりゲームセンターに翔と毎日デートをしていた美園。

ゲームセンターの近くに派手なラブホテルがあった。

翔にラブホテルに入らないかと誘われた。

翔の家は放任主義の家なので高校生からバイトしていた。

なのでそんなお金も持っていた。

美園はすごく怖かったけどさばらしたくなり入った。

でも結局は下着になった時点で怖くなり泣き出して一線は超えなかった。

そのラブホテルに翔と一緒に入っていく写真だった。

ますます弱みを握られていじめは一層エスカレートし、ついには母親に盗みまでするように言われた。

喫茶店で今まで静音のしたひどいことを全部聴いた杏子。

「お母さんに、全部私から話してあげるわ。」

これ以上エスカレートしたら、あなたが家にいらなくなるわ。」

「でもそんなことしたら、私が友達と部屋で話していたこともばれるし、翔とラブホテルに行ったこともばれるし。」

「それは仕方がないよ。」

それを覚悟してでも真実を話すべき！

静音ちゃんがどんな子かお母さんに話さなきゃ！」

「そんなことしたら静音ちゃんが亡くなったお姉ちゃんの変わりみたいに思っているお母さんが可哀想だし。」

お母さんお姉ちゃんを亡くして家事や育児を放棄するぐらいに落ち込んで、心療内科にもかかっていたの。

でも静音姉ちゃんが来てから、見違えるくらいに元気になって。

でも静音姉ちゃんがあんなに意地悪だって知ったら、それ以上にショックを受けるわ。私だけ我慢する。

おばさん、時々こうして会ってもらえますか？

話を聴いていただけるでも気が楽になりました。

だから私、我慢します。」

「ああ、美園ちゃんはなんていい子なの？

こんなに優しい娘さんがいてお母さんも幸せよ。」

「母には一生気がついてもらえそうもないですがね。」

でも母が落ち込んでいるよりは今みたいな状況でも幸せならそれでいいです。」

杏子は財布から2万円出して、美園に渡した。

「これを静音ちゃんに渡しなさい。」

「こんなことしてもらって！」

悪いです！

お話を聴いてもらえるだけで良かったですよ！」

「でも2万円持っていけないとまたいじめられるでしょ？

あなたの身を守るためだと思つて。

これを静音ちゃんに渡しなさい。」

美園は冷酷な静音の顔を思い出し、仕方なく受け取った。

家に帰ったら部屋に静音がいた。

「2万円、お母さんの財布から抜き取ってきた。」

「大した度胸じゃない！」

静音はそれだけ言つて2万円を受け取り、部屋を出て行つた。

「お母さん、参考書買いたいけど、お金貰える？」

「いいわよ。」

2千円あったら足りるわね。

あら、大きいのしかない。

1万円渡しし、またお釣りくれる？」

静音はすごい形相で美園を睨みつけた。

静音はお母さんの財布に2万円札が2枚あるのを知っていたのだ。

さつき美園からもらつた2万円は、お母さんの財布から抜き取られた2万円ではないことがわかつた。

でもこれでわかつた。

静音が美園は泥棒だということを暴露しようとしていたのだ。

また2万円が盗まれた、その犯人が美園だと。

でも静音はすぐ天使のような笑顔になり、鼻歌を歌いながら去つて行つた。

逆に美園にとってそれはすごく怖いことのようにも思えた。

そして美園がその日お風呂から上がった時のこと。

裸のままバスタオルで体を拭いていたら、お母さんが入つて来た。

こんなこと初めてだった。

「そ、その体、男の子に見せたのね？」

ラ、ラブホテルに行つたのは本当？」

すごい形相で睨み付ける母親。

「とにかく、早くパジャマ着て、リビングに来なさい！」

パジャマを着て、リビングに行ったら、リビングのオーディオからは、あの友達5人で話していた猥談がかかっていた。

「静音、あなたもあなたよ。」

どうしてもっと早く言ってくれないの？

もっと早くにこのテープ聴かせてくれたら良かったのに。」

「お母さん、私、美園にずっといじめられていたの。」

私がこの家に来た時から、部屋で二人つきりになる時はいつも。

最初に言われたのが一番応えたな。

あなたのことお姉さんだなんて認めないってね。」

「な、なにを言うの。」

私、そんなこと一度も。」

「ことあるごとに、あんたなんてお姉さんじゃないなんて言われてね。」

いい子ぶってお母さんに取り入っているとかね。

あんたが来る前、お母さんは私のものだったのに、お母さんを横取りしたとかね。

挙句の果てにここから出て行けとまで言われたわ。」

「美園！」

そんなひどいこと静音おねえちゃんに言ったの！

それも部屋で隠れてこそこそ。

静音お姉ちゃんはいつも美園の幸せを考えていたのよ。

風の噂で美園が男の子と付き合っているって知って。

だから心配になり友達5人の会話を録音してくれたのよ。

美園が間違った道に踏み外さないかなってね。

そんな妹思いのお姉ちゃんなのにひどい言葉ばかり投げつけてたのね。

可哀想に、可哀想に辛かったでしょう？

静音。」

そう言ってお母さんは静音を抱きしめて泣き出した。

「私がこんなひどい子を産んだのが間違いだったのね。」

もういいわ！

出て行きなさい！

美園なんてもう可愛くない！

こんな子私の娘じゃないわ！

出て行って！

静音を不幸にする子なんていらない！」

「お母さん！

おかあさー！ー！ーん。

ひどいー！ー！ー！

おかあさ…」

母親は泣きながら美園を家から追い出した。

静音がその脇からこれ以上ない幸せそうな顔をして微笑んでいた。

家を出たら、なんと、杏子が立っていた。

「やっぱり、こうなったか。」

「おばさん、どうしてここへ？」

「その静音ちゃん、普通の女の子じゃないと踏んでいたのよ。

私の嫌な予感が当たったわ。

2万円も毘だと思っていたの。

あなたを陥れて、お母さんから嫌われさせるための。

それができなかったとき、どう出るか、何となく全部わかっていた。

説明しなくてもいいわよ。

何があつたか大体わかったわ。」

「おばさん、今日、泊めてくれる？」

「もちろんよ、もしもそうなったときのために、今日ここへ来たんだから。」

「おばさん、推理力がすごいね。」

「おばさん、脚本や小説書いているの。

だから何となく先が読めちゃうのよ。

美園ちゃんは心配しなくていいから、しばらくは私の家にいなさい。

こう見えてもおばさん、いいマンションに住んでいるのよ。」

「おばさん、何者？」

「脚本家。

あなたもドラマ観たことあるかもね。」

杏子が万梨亜と一緒に暮らすつもりで買ったマンションに美園を連れて来た。

「ほら、可愛いパジャマでしょ？」

おばさんは一緒に暮らしたくても暮らせない子供がいてね。

その子と一緒に暮らすためにその子のために服や鞄や靴、アクセサリなどいっぱい買っているの。

いつその子の気が変わって暮らすことになるかも知れないしね。

いつでもその子がここで住めるようにね。」

「おばさんも家族のことで悩んでいるんだね。」

「さあ、今日はゆつくりとここで休みなさい。

明日学校でしょ？」

制服じゃなくて私服の学校で良かったね。

取りに戻れなりものね。

学生鞄もあるのよ。

これを持って行きなさい。」

「こんなによくしてもらっていいんですか？」

「私のことお母さんだって思ってくれていいのよ。

これからのことは心配しなくていいわ。

私が直接あなたのお母さんに話してあげる。」

「嫌です！」

それだけは！

私はどうなってもいいです！

お姉ちゃんの正体を知ったらお母さん死んじゃう！

わあああああ！

言わないで！」

「ほらほら、落ち着いて。

美園ちゃんは本当にいい子ね。

こんなにひどい目にあってもまだお母さんの幸せを一番に気にかけて。

こないいい子、いないのに。

ひどいお母さんだね。」

「お母さんを責めないで！」

杏子は美園をぎゅつと抱きしめた。

「今日はこうやってぎゅつと抱きしめて眠ってあげる。
私の胸で思いつきり泣いてもいいですよ。」

「おばさん！」

美園、どれだけ苦しかったか！

お姉ちゃんが家に来てからずっとあまり眠れてなくて。

息が詰まって死にそうだったのよ。

美園、もう疲れちゃった。

おばさん、助けて。」

美園は最初、杏子の胸で泣いていたが、やがて安らかな顔になり眠りについた。

杏子は美園が眠るまでずっと頭を撫でていた。

時折、美園はお母さんと寝言を言った。

今日の一件は人生で一番ショックだったことだろう。

杏子は次の日、美園が学校に行ってから、美園と静音の住む家を訪ねた。

もちろん母親に真実を話すためだ。

ピンポンを鳴らすと、すごい勢いでドアが開いた。

そして杏子を見るなりがっかりした表情の母親がいた。

「美園ちゃんのお母さんですね。」

今美園ちゃんを家でお預かりしています。」

「美園！」

美園は無事ですか？

携帯電話で登録してある全部のお友達のところにかけてんですが美園がどこにも行っていないくて。

昨日は一晩中眠れませんでしたよ。」

杏子はこうなることもわかっていた。

同じ娘を持つ親として当然だ。

でもあまりに美園にひどいことを言ったので反省さえたってお灸をすえた。

「美園ちゃんは昨日、ちゃんと睡眠を取って、朝食も済ませ、きちんと学校へも行き
ましたよ。」

気丈な子です。

昨夜何があったかも全部聴きました。」

「あなたはそもそも美園とはどういった関係ですか？

美園がお世話になったことはお礼を言いますが。」

「氣を確かに持って聴いてください。」

私が話すことはすべて真実です。

私、ファミレスで隣に座った人の会話を聴くのが趣味です。

そこでとんでもない女子高生同士の会話を聴いてしまいました。

お宅の静音ちゃんの方が美園ちゃんにお母さんの財布から2万円盗んでこいと言っているんですよ。」

「な、なんですって？

可愛い静音がそんなこと言う訳ないじゃないですか？

美園の間違いでしょ？」

「私もあまりのことに放っておけなくなり、お宅のお嬢さんの美園ちゃんの方に2万円貸しました。」

静音ちゃんの方は、昨日ちゃんと美園ちゃんが2万円盗んだかチェックしていたと思いますよ。

なんか心当たりはないですか？

お母さんの財布の中身をチェックするような。」

母親ははっとした。

参考書が欲しいので2千円欲しいと言った時のことを。

そう言えば1万円札を渡した時に怪訝そうな顔をしていた静音。

「それだけじゃないのです。」

美園ちゃんの方が、テストをわざと悪い点数になるようにと仕向けたし。

美園ちゃんの方がお母さんの誕生日にカレーライスを一生懸命作ったのに静音ちゃんの手柄にしたこともありました。」

「うそ、そんなこと、カレーは静音が作ったはず。」

「静音ちゃんは極端な先端恐怖症なはずです。」

静音ちゃんが包丁を持っている姿見たことありますか？

「そう言えば、掃除や洗濯はしてくれるけど、料理は下手だと言ってしてくれたことがない。」

あの私の誕生日のカレーの時だけだった。」

「それも作っている姿ご覧になりましたか？」

「見て、ない。」

「あれは美園ちゃんが鳴れない手つきでお母さんを喜ばそうと一生懸命に調理実習の時のレシピを見て作ったんですよ。」

なのに自分が作ったって言えなくてどんなに辛かったと思いますか？」

「他に掃除や洗濯も全部美園ちゃんの方がしていました。」

そして全部これも自分がしたことのように言っていましたね。

そしてあのお友達からもらった花器を床に投げつけたのも静音ちゃんの方です。それも美園ちゃんのせいにしてね。」

「あの、花器を床に？」

静音の方が？

何故？」

「そうでもないけどあなたが美園ちゃんを嫌わないからです。」

なんとかして美園ちゃんからあなたを引き離そうと必死だったみたいです。

塾もさぼらせて、模擬の成績も悪くさせました。

美園ちゃんにあの 5 人の友達の会話のテープをお母さんに聴かせる、翔君と付き合っていることを告げ口する、ラブホテルに行ったことを告げ口すると脅してね。

これは美園ちゃんも確かに悪かったですが。

でも美園ちゃんは脅されていたことだけでお母さんに黙っていたわけじゃありません。

お母さんは美園ちゃんと双子だった友麻ちゃんを亡くされた時、ひどいうつ状態になり日々の生活ができないくらいだったらしいですね。

お母さんがあの頃に戻ってしまうくらいなら、美園ちゃんは辛くてもいいと思っています。

むしろお母さんが静音ちゃんの正体を知り、ショックを受けるよりはいいと。

昨日、美園ちゃんなんてもう可愛くない、こんな子私の娘じゃないなんて、あんなひどいことをお母さんから言われても尚、お母さんが静音ちゃんの正体を知ったら死んじゃうなんて言って私が真実を話すのを止めましたよ。

美園ちゃんは強い子です。

でも優しすぎるところがある。

友麻お姉ちゃんを亡くしてから、ずっと自分がお母さんを守るんだと思ってきたんでしょね。

美園ちゃんのことどうか、抱きしめてあげてください。

美園ちゃんは静音ちゃんに毎晩いじめられて部屋でも窮屈な思いをしていましたし、あまり眠れてなかったみたいですよ。

昨夜私のベッドで眠ってすごく安らかな顔をされていました。

今まで静音ちゃんのことですごく苦労されていたのでしょね。

時折、お母さんと呼ばれていましたよ。

こんなことになってもお母さん大好きですよ、美園ちゃんは。」

「美園——！」

うわあああああ……」

母親は涙がとまらくなり、嗚咽した。

その日の夜、両親と美園と静音4人で話をした。

「静音、悪いけど、もうあなたとは一緒に暮らせないわ。

全部、真実を聴きました。」

「き、聴いたって誰に？」

「そのうちに誰かわかるでしょ。」

あなたにはこの家から出て行ってもらいます。」

「お母さん、私友麻だよ！」

友麻の代りだよ。

成績だって優秀だし。

友麻みたいに頭いいよ。」

「うちは美園がいるからあなたはもういりません。」

「お母さん！」

抱きしめてくれたじゃない！

大好きだっていつも言ってくれたじゃない！

美園なんてもう可愛くない、こんな子私の娘じゃないって言ったじゃない！

今は私の方が可愛くないの？

もう美園なんていらないでしょ？

それに私の言うことより、他の誰かの言うことの方を信じるの？」

「私はあなたの言うことはもう信じません。

よくも静音にひどいことばかりできたものね。

あなたとは縁を切ります！

籍も抜こうと思っています。

静音をひどい目に合わせる子なんて娘として住まわせておけません。」

「そんなことできないはずよ。

福祉施設にそんな簡単に送り返すことなんてできっこないわ。」

冷ややかな表情で静音は言う。

「いえ、あなたは福祉施設じゃないところにこれから住んでもらいます。

伊万里さん入って来てください。」

静音は隣の部屋に誰かがいるのを知らなかった。

伊万里と名乗る女は 30 代後半ぐらいだった。

その年齢の女性にしてはファッショナブルだ。

地味過ぎず派手過ぎないメイクとファッション。

「私は伊万里 杏子と言います。

今日から静音ちゃんは私の家に住んでもらいます。」

「嫌、誰、この人！

私はずっとお母さんというの！

お母さんにずっと抱きしめてもらうの！

嫌、嫌———！

お母さん———！」

杏子の脳裏に幼い頃、児童福祉施設に入れられる前、珍しく駄々をこね、お母さんと

叫んだ万梨亜を思い出し、胸が痛くなった。

杏子は心を鬼にして言った。

「今日から私と一緒に暮らすの。

そのねじ曲がった根性を叩き直してあげる。」

「あなたなのね。

お母さんに嘘を言ったのは！

お母さん！

こんな赤の他人の言うことの方を信じるの？

お母さん、私はお母さんの子どもよね？

お母さんは私が美園より可愛いよね？

お母さん、ずっとここに置いてくれるでしょ？

お母さん、お母さん、答えてよ！

答えてよ、お母さん！

母親に食ってかかる静音。

でも残酷にもこんな言葉が静音に発せられた。

「私の子どもは今、美園だけです。」

あなたは私の子どもじゃありません。

今日から他人です。」

静音が母親から聴いた最後の言葉だった。

杏子に抱えられながら静音は夜の道を歩いている。

アタッシュケースもひきずりながら杏子は言った。

「安心しなさい。」

自慢じゃないけど、私は結構、いいマンションに住んでいるのよ。

私にもあなたぐらいの年の娘がいてね。

その女の子と一緒に住みたかったのよ。

本当はね。

だけどその子からお母さんと一緒に住みたくないうって言われてね。

19歳の時にその子を一人で産んでね。

お金持ちになったら迎えに来てあげるって約束してね。

それがやっと果たせたの。

でも年月が16年も経っていて。

もうすっかり大人になっていてね、自分で自立するからあなたの世話にはならないって言われてね。

静音、静音ってこれから呼びつけにするね。

静音、あなたも自分のこと話してくれないかな？

どうしてあなたがそうなったかおばさん知りたいわ。

あなたも最初からそんな性格じゃなかったと思うのよ。」

「人間なんて、人間なんて大嫌い！

おばさんだってそうじゃない！

自分の子どもを捨てた癖に！

何をいい人ぶっているのよ！

捨てられた娘がどんなに辛い思いをするか！

子どもの頃、夜中に一人でどんなに泣いたことか！」

杏子はびっくりした。

あの自分と暮らすのを拒んだ万梨亜にそっくりだ。

静音は万梨亜なのだと思った。

万梨亜はでも静音は万梨亜みたいに前向きで強くなれなかった。

ただそれだけの違い。

産みの親に対する恨みがすごく強い。

それは全く同じだった。

これから二人がどんな風な関係を築けるかわからないけど。

でも不思議な縁で繋がっていた静音を大事に育てて行こうと思った。

静音の抱えている憎悪や恐怖心が普通じゃないことをその日の夜に知ることになった。

「お母さん！

お母さん！

やめて！

やめて！

私を殺さないで！

お母さん、静音いい子にしているから！

お母さん、お母さん！」

杏子はその日の夜、静音の叫び声でびっくりして飛び起きた。

隣の静音の部屋に行くと、静音はすごい寝汗をかいているのがわかる。

ベッドの上で暴れていた。

「静音、静音！

どうしたの、しっかりしなさい！」

「お母さん、お母さん、去って行かないで。

静音、ピアノ上手に弾けたでしょ？

ピアノの発表会大成功だったでしょ？

かけっこだって一等賞取ったし。

テストもいつも満点だったし。

おトイレだって一人で行けるし。

人参も嫌いだけどころと食べているし。

注射だって痛い我慢するし。

歯医者さんだって怖い我慢するし。

お母さん、私はここにいるよ。

なのにどうして叱るの？

こんなに私は頑張っているのに。

私はこんなにお利口なのに。

どうしてお利口じゃないあの子の方がいいの？

お母さん！

お母さん！

教えて！

お母さん！」

これは。

美園がいた家のことじゃない。

まだもつとシヨックなことがあったのだろうか？

杏子は何のことかさっぱりわからなかった。

どうしてこんなことを言うのだろう。

取りあえず、魔されている静音を起こした。

「どうしたの？

ピアノがどうか言っていたわよ。」

ふと我に返って起きた静音が恥ずかしそうな顔をした。

「静音、美園ちゃんの家にもらわれてくる前に何かあったのね？

おばさんに話してちょうだい。

おばさんはさっき、自分の恥ずかしい話を正直に話したじゃない。

今度は静音の番よ。

この家ではどんな小さなことも秘密は無にしましよ。

何でも話して。」

静音は観念して小さな声で話し出した。

でもまだ自分の産みの親の話はしてくれなかった。

静音が話し出したのは、自分が小学校 2 年生の時の話からだった。

静音はすごく心の優しい家族にもらわれることになった。

その家族は可哀想に一人娘を小学校 1 年生の時、病気で亡くしていた。

その家の母親がそれはそれは優しいお母さんだった。

固く心を閉ざしていた静音も次第に本当のお母さんのように愛するようになっていった。

両親とも静音にはすごくよくしてくれた。

でも落とし穴があったのだ。

その家にはピアノがあったのだ。

娘の莉奈が亡くなる前によく弾いていたピアノ。

両親は静音にピアノを習わせた。

静音はとてもピアノなど通わせるお金の余裕のない家に生まれていた。

だからピアノなんて全然弾けなかった。

でも頑張り屋の静音は母親に笑顔になって欲しいので一生懸命にピアノの練習をした。

あまりに上達したのでピアノの先生からいつも褒められることになる。

家でも段々つまらずに弾けるようになった。

でも最初たどたどしいピアノを弾いていた母親は静音が上達するにつれて笑顔が消えていった。

不思議に思いながらも発表会の日が来た。

発表会でもし間違えでもしたら来てくれるお母さんがっかりすると思い、一生懸命にピアノを弾いた。

静音は筋がいいのか、大成功し、なんと賞まで貰えた。

当然お母さんは喜んでくれるだろうと思ってお母さんの元に、賞状とトロフィを持って駆け寄ったら、こんなことを言われた。

「静音ちゃん、別に失敗しても良かったのよ。」

そしてこんなこともあった。

静音がある夜、トイレに一人で行くと、お母さんも来ていた。

「静音ちゃん、まだまだ甘えないでおこうと思っているのね。」

トイレに行くの怖かったら、お母さんを起こしてもいいのよ。」

静音は人參が大嫌いだった。

でもちゃんと食べないとせっかく作ってくれたお母さんに悪いと思い、我慢して食べた。

「静音ちゃん、嫌いな食べ物何も無理して食べなくてもいいのよ。」

こんなこともあった。

静音は我慢強い子供だった。

注射だって歯医者だって幼稚園の頃から一度も泣いたことなんてなかった。怖かったけどそこをぐっと我慢する芯の強さがあった。

そうすると母親が言うのだった。

「注射だって歯医者だってお母さん手を握ってあげるって言ってるのに。」

どうして怖がらないの？

どうしてお母さんそばにいてって言わないの？」

運動会のかけっこで一等賞を取ってもこう言われるのだ。

「別にビリでも良かったのに。」

静音は足が速すぎるわ。」

そして通知表が 5 段階でオール 5 だった時もこんなことを言われた。

「何にも面白くない成績表ね。」

さすがの静音も悲しくなり泣き出した。

「お母さん、こんなに静音、お利口になっているのに、全然喜んでくれないね。」

「静音、泣いてないでピアノ弾いてよ！」

「お母さんが喜ばないならピアノなんて弾かない！」

お母さんいつも静音がピアノ弾いていたら悲しそうな顔するだけじゃない！」

静音は幼い頃から大人の顔色ばかり伺って暮らしてきたから、静音がどんなにお利口にしても喜ばない母親の心情がわかってしまう。

「いいから、静音！」

ピアノを弾いて！」

静音は泣きながら綺麗にピアノを弾いた。

静音は上達が早く、バイエルの赤も黄色も終わって、

ブリュクミラーがもう弾ける。

「あの子は…」

死んだ莉奈は…

バイエルなんていけないくらいにピアノが下手だったの。

お願い、もつと下手にピアノを弾いて！

こんなにうまくブリュクミラーなんて弾かないで。

ピアノの発表会でどうして間違えて泣き出さないの。

間違えて泣きじゃくっていた莉奈がお母さんは可愛くて可愛くて。

運動会のかけっこも途中で転んでビリになってまた泣いて。

なのにどうして静音は一等賞なんて取るのよ。

注射の時だって歯医者の時だっていつも泣いて困らせて。

お母さんの手をいつも握って、お母さんがそばにいて欲しいって。

20点、30点ぐらいのテストだってひどい点数ばかりで。

人参だって大嫌いで、いつも残して。

それに夜中おトイレだって一人でいけなくて、いつも私を起こして。

それから…それから…莉奈は…」

そう言って母親は泣きだしてしまった。

「お願い！」

莉奈になって！

あの手がかかって仕方ない莉奈になって。

あの間違っただけの下手くそなピアノがもう一度聴きたいの。

あのできの悪い莉奈になって…

お願いよ。

あなたはやっぱり死んだ莉奈にはなれない。

悪いけど、やっぱり静音とは暮らせない。

莉奈とあまりに違い過ぎて。

それに気づかされる度に、死ぬほど辛くて。

お母さん、お利口さんの静音といると辛い。

手のかかる甘えん坊の莉奈のことを余計に思い出して。

お母さん、静音を愛せないのよ。

ごめん、お母さん残酷なことを言っているわね。」

「お母さん、静音のことが嫌いなのか？」

母親は黙っている。

「お母さん！」

静音のことが嫌いなのかね！

お母さん！

お母さん！」

母親は堪えきれず泣き出してしまう。

「お母さんとこのまま一緒に暮らせないのか？」

お母さん！

お母さん！

答えてよ！」

静音は静音なりにお母さんの手を煩わさないように努力して頑張ったのに。

それが裏目に出てしまった。

甘えん坊の莉奈と甘え下手の静音。

あまりに極端に二人の性格が違い過ぎたのだ。

母親は何も言えずにずっと泣き続けた。

静音もずっと泣き続けた。

いつもどんなに辛いことがあっても泣かない静音が、ずっと泣いていた。

自分の生い立ちを話すと、静音の顔色が少しましになった。

今まで誰にも言えずにため込んできたことが吐き出せて少し楽になったのかも知れなかった。

「そんなことがあったの。」

辛かったわね。

小学校2年生なんてまだお母さんに甘えたい時じゃないの。

可哀想に。」

杏子は静音のベッドの中に入り、静音を優しく抱きしめた。

「な、何をするのか？」

よしてよ！

放っておいて！

あなたなんか大嫌いよ！」

静音は杏子を突き放した。

杏子はそれでも力づくで静音を抱きしめた。

「あなたにはぬくもりが必要よ。

あなたは精神的に病んでいるわ。

あなたは気がついていなかったかも知れないけど、夢ですごく魔されていたわよ。今、話してくれたお母さんに対しても叫んでいたのよ。

そして殺さないでって、叫んでいた。

良かったらちゃんとその話も聞かせて。

私には何でも隠さず話して。」

「ごめんなさい。

その話はまだできない。

恐ろし過ぎて。

ごめんなさい。

ごめんなさい――！」

静音は頭を掻き筆った。

杏子はぎゅっと静音を抱きしめる。

「まず抱きしめることから始めないとね。

愛情不足なのね、きっと。

美園ちゃんの家では気が張っていたからきつとその夢も見なかったのね。

それは安心してぐっすり眠れてなかったからでもあると思うけど。

安心してね。

ここでは何も考えずに暮らしてくれていいのよ。

そのままの静音でいて。

私はそのままの静音が好きよ。

何も取り繕わないでね。」

「私は、あなたなんて大嫌いよ。

それに私はここで暮らす気なんてないから！」

そう言いながらも振り払わない静音。

「どこにも行けないでしょ。

あなたはここに居るのよ！」

静音は疲れたのかすやすやと眠り出した。

杏子が優しく抱きしめたせいかな、静音は安らかな表情になった。

静音は色々あつて疲れたのか、昼まで眠っていた。

そしてチャイムの音で目が覚めた。

「ちよつと何よこれ！」

部屋を見て、思わず静音が叫ぶ。

お昼近く、3人の運送業者が部屋に入ってきて来て、大きな荷物が搬入され始めた。

それを見て、静音は驚いている。

「家具屋さんにダブルベッドを朝買いに行ってきたの。

あなたが眠っている間に。」

「一体、誰と誰が眠るのよ！」

「静音と私に決まっているじゃないの！」

「これから毎晩、私の部屋のこのダブルベッドで私と静音が眠るのよ。

安心して、すごい寝心地いいから。

ついでに快眠できる枕も買っておいたわよ。」

「何度も言いますが、私はあなたが嫌いです。

あなたと一緒に暮らしたくありません。」

そうこうしているうちに搬入が終わり、大はしゃぎの杏子は、大きなカバーを外し、

ダブルベッドの上に寝転ぶ。

「わあ、気持ちいい。

これで驚されずに安眠できるよ。

静音もいらつしやいよ。

根っころがつたらわかるわよ。

ほらっ！

おいで。」

静音は恐る恐る、ベッドの上に座った。

「本当だ、すごく気持ちいい！」

静音が嬉しそうな顔になった。

「ほらごらん。

気持ちいいでしょ？」

静音の心を見透かしているような表情の杏子。
はっとして静音はまた怖そうな顔に戻る。

「せっかく、こんな高いベッド買ったし、ここで眠ります。
でも私から離れて眠ってくださいね。」

高校生にもなつて大人に抱きしめられて眠るなんて恥ずかしいし。」

「明日から高校に戻らないとね。」

それも先生に話をしてあるの。

一身上の都合により、今日から私があなたの保護者になるってことも。
安心して。

先生には詳しい話をしていないし。

静音は安心して、勉強に集中して。

勉強部屋は私の娘が使うはずだったあの部屋を使ってくれたらいいしね。」

「な、何から何まですみませんでした。」

でもあなたにずっと私の保護者をやってもらうことにはなりませんから。

ご安心を。」

「静音はここにずっと住んでくれてもいいのよ。」

ただ私は仕事ですごく忙しい時期があつてね。

その時期はお手伝いさんを雇うことにしているしね。

信頼のおけるお手伝いさんがいるの。

私の友達なの。

静音の好きな料理を言ったら作ってくれるしね。」

「どうして？」

どうして見ず知らずの私にそんなによくしてくれるのですか？」

「私は実の娘と住めない、あなたも実のお母さんと住めない。

だからそういう者同士仲良くしましょ？

私たちそのために出会ったのかも。

あなたのことが他人に思えないのよ。

意地っ張りで甘え下手で。

私の娘に怖いほどそっくりで。

一日中抱きしめていたくらいよ。」

そう言ってまた、ベッドに座っている静音を背中から抱きしめた。こうして静音は杏子と一緒に住むことになった。

「今日は静音に会わせたい人がいるの。」

一つ言っておくと、私、生涯結婚はしないでおこうと思っているの。でもボーイフレンドはいて欲しくてね。

脚本家という仕事柄恋はいつもしていたくて。

私は36歳です。

そして26歳の彼がいます。」

「すごい、10年も下の彼氏がですか？」

「彼は演劇をやっている人です。」

脚本も自分で書いていて。

仕事で一緒になることがあり知り合いました。

彼はすごく貧乏なのよ。

全然お金がなくて。

だから時々私にたかりにきます。」

「それって、ひもみたいなもの？」

「それに時々、ご飯を食べに来ます。」

そして宿泊させてあげることたまにあります。

でもこれからは静音がいるし、宿泊は遠慮してもらうわ。

ちゃんと自分のアパートもあるしね。

でもご飯だけは許してやってね。

ちやらんぼらんでいい加減な男だけどどこか憎めない奴でね。

もちろん、お風呂も遠慮してもらうしね。

いくらなんでも年頃の娘がいるのに、宿泊とか風呂とかまずいので。

静音も嫌だと思うし。

銭湯代でもあいつに渡しておくわ。」

「なんかお母さんみたいですわね。」

「そうなの。」

すぐ手のかかるやつで。

恋人同士というより母と息子みたいだねってみんな言うのよ。でも付き合っていたら面白い男ではあるわね。

そいつの名前は新之助って言います。

たちまち今日来るのよね。」

そしてしばらくしたら、やっぱり新之助がやって来た。

「久しぶり！」

もう1週間くらい会ってなかったね。

元気していた？

ほら、今日は手ぶらじゃないよ！

劇団員の女の子の差し入れ！

田舎から送って来たさつまいもをこんなにいっぱいもらってさ。」

「久しぶり、よく生きていたわね。

わあ、たくさん、お芋さんもらったのね。

蒸かし芋にしてあげる。」

「ん？

なんかすごく綺麗な子がいるけど、誰あんた？」

リビングに高校生の静音がちよこんと座っているのでびっくりする新之助。

「紹介するわ。

私の娘みたいなもの。

引き取ることにした静音。

静音、これが噂の新之助。」

「静音ちゃんこんにちは、初めまして。」

「新之助さんこんにちは。

初めまして。」

「しんちゃんでもいいよ。

可愛いね。

高校生？

いくつ？」

「16歳です。」

わかい。

俺より 10 も下かあ。

道理で可愛いと思ったよ。

これから、俺の妹になってね。」

そう言つて、静音に微笑んだ。

静音も新之助に笑いかけた。

一瞬、新之助と静音の間に不思議なムードが漂った。

新之助と静音、二人の心の中に何かが走り抜けた。

その後杏子は気になっていた。

静音の帰りが遅いことも。

新之助が最近、家に来ないことも。

そしてある日静音が夜 10 時過ぎても戻って来ない日があった。

杏子が心配していたら静音からスマートフォンに着信があった。

「静音！

今どこ？

どうしてこんなに遅くなったの？」

「お・おばさん。

助けて！

今、しんちゃんのもの部屋にいるの。

おばさん、来て！」

「静音、新之助の部屋？

どうしてそんなとこに！」

「今、しんちゃんはお風呂に入っているの。

とにかく、しんちゃんのアパートに来て。」

血相変えて杏子は静音と新之助のいるアパートまで走った。

「おばさん！

怖かった！」

ドアを開けるなり、静音は杏子に抱きついた。

静音はぶるぶる震えている

「何があったの？」

「しんちゃんに体を求められたの。」

私どうしていいかわからなくなって。

怖くなって、おばさんに電話したの。」

「なんですって？」

新之助が静音に？」

「なんか騒がしいな。」

静音ちゃん何かあったの？」

風呂からあがった新之助がバスタオルを巻いてリビングに来た。

新之助は、杏子が来ているのでびくりした表情をした。

「杏子、違う。」

違う、杏子、これは！」

バシッ！

静音は新之助の頬をぶった。

「年頃の娘に何をしようとしていたの？」

静音はまだ高校生なのよ！

嫌がる静音を無理やり部屋に連れ込んだのね！」

「違う、違う、誤解だって。」

静音ちゃんの方から誘ってきたし。

アパートにも静音ちゃんの方が行きたがっていて。」

「そんなわけではないでしょ？」

静音こんなに怖がって。」

「しんちゃんを責めないで！」

おばさん、しんちゃんは本当のことを言っているの。

本当なの。

私の方からしんちゃんに付き合っって欲しいと言って。

私の方からしんちゃんのアパートに行きたいって言ったの。」

「嘘でしょ？」

静音、あんなに怖がっていたじゃない？」

「おばさん、これだけは信じて！」

体の関係まで持とうだなんてこれっぽっちも思っってなかったわ。

ただしんちゃんといると、ほっとするの。
おばさん。

これは私の病気なの。
幼い時から父親がいなかったから。
年上の人にすぐ恋しちゃう病気。

この病気が治らないの。

おばさん、助けて！

どうしたらこの病気が治るの！」

「とにかく、家に帰ってゆっくりあなたの話を聴くわ。

明日、学校もあるし、今日は家に帰って早く寝ましょう。」

次の日はなんとか学校へ行った静音。

そして家に帰って来てから、リビングのソファに座り、どうして静音は年上の男の人にそんなに惹かれるか話し出した。

新之助も来ていた。

一緒に話を聴く。

あれは静音が中学校 2 年生の時まで話が遡る。

静音は中学校 3 年生の時に養子縁組にしてもらったことがあった。

あの小学校 2 年生以来、久しぶりの養子縁組だった。

静音は小学校 2 年生の時に受けた傷が大きすぎてずっと養子縁組を拒んできた。

あれは静音が中学校 2 年生の時のこと。

担任の先生が井原孝之先生という先生になった。

勤続 10 年の 33 歳の先生だった。

静音はそれまで恋をする余裕なんて全くないハードな人生だったから恋なんてしたことがなかった。

でも静音は、父親の愛を知らずに育ったから、年上の男性への憧れみたいなものが芽生えた

井原先生にいつしか恋するようになった。

静音の初恋の人だった。

井原先生は優しくて頼りがいもあった。

大きな愛で孤児で育った静音に接してくれた。

井原先生は静音が心に闇を持って生きていることを知っていたので、他の生徒より深く静音と関わるようになった。

先生と静音の交換日記が密かに始まった。

先生は悩んでいることがあればなんでもこの交換日記に書いてみると言ってくれた。

静音はこれまで誰にも言えなかった母親のことを書いた。

そしてこれも自分の受けた大きな傷である小学校2年生の時の養子縁組の話。

心を閉ざしてしまつて誰にも心の扉を開けられないようにしていることも話した。

今までの人生でこんなに静音に対して親身になってくれる人もいなかったので静音は

自分の苦しみを全部先生に吐き出した。

そうすると今までグレーだった世界が黄金にキラキラ輝き出した。

静音はとても部活動などする心の余裕なんてなかったが、先生が顧問なのでバドミントン部にも入った。

先生はこれまた特別に休日に公園でバドミントンのコーチをしてくれる時もあった。それに家庭の料理の味を知らない静音のために自分の家まで呼んで、料理を食べさせてくれた。

井原先生は結婚していたが、奥さんが不妊症で子供がいなかった。

奥さんも静音をすごく気に入り、家にくたび、申し訳ないくらいに料理をいっぱい作ってくれて最高のもてなしをしてくれた。

泊まりに行くこともしばしば。

先生夫婦と遊園地に行ったり、水族館に行ったりした。

段々、先生の夫婦と静音は家族みたいになってきた。

ある日静音は信じられない言葉を先生から聞く。

「お前、うちの子どもにならないか？」

俺はもう、お前を娘みたいに思っている。

ちょうど今中学校2年生の3学期だ。

俺は以前から転勤を希望していた。

来年はこの学校にいないだろう。

3学期が終わったらお前を養女にしようと思う。

静音は嫌か？

静音が嫌だったら、このままの関係を続けて……」

「私、先生の子どもになりたい！」

ずっと先生がお父さんだったらどんなにいいかと思つてて。

包容力があつて優しくて。

静音の悩みを何でも、大きな心で受け止めてくれて。

私、先生がお父さんだったらどんなにいいだろうってずっと思つていて。

先生、私のお父さんになってください。

先生と出会ってから、今生きている世界が信じられないくらいに明るくなって。

もう、闇の世界には戻りたくないの。

先生、ずっと私と一緒にいるって約束してください。」

「ああ、約束するよ。

静音がずっと笑つていれるようないい家庭を築くからな。」

こうして静音はやつと心から愛してくれる人と家族になることができた。

静音の見る世界はキラキラと輝いていた。

ここから地獄が始まるうとしていたなんて思いもしないで。

静音の苦しみはすぐに始まつた。

「静音、お先。

いい風呂だったよ。」

先生が丸裸でお風呂から出て来た。

静音は先生の全裸を見てしまう。

真っ赤になつてしまった。

好きな人の裸なんて見てしまったら。

「ちよつと！」

あなた！

年頃の娘がいるのだからね！

これからは服をちゃんと着て、あがつてきて！」

母親が叱る。

静音はそれから打ち消そう打ち消そうとしても先生の全裸が頭から離れなくなった。

静音は先生のパジャマ姿さえ眩しかった。

リラックスしている先生がすごくセクシーに思えて。

夜、濡れた髪を乾かしている姿も、朝、眠たそうに眼をこすっている姿も色っぽい。

好きな人と一つ屋根の下にいられるのだからときめいてときめいて心臓がすごい音を立ててしまう。

静音の部屋は先生たちの寝室の隣だった。

それが気になって静音はいつしか不眠症になってしまった。

静音は父親に恋をしてしまっているのだ。

ある冬の日、家族でスキーに行くことになった。

しかし、当日、母親の方が風邪になってしまった。

結局、静音と先生の二人で行くことになった。

先生の車に乗って夜道をとばし、スキー場に行くことになった。

「寒くない？」

毛布、使う？」

「ありがとう、お父さん。」

助手席で毛布をかぶる静音。

「お腹空いてない？」

この近くに美味しいうどんの店があるよ。

行こうか？」

「ううん、今はいいいい。

ありがとうお父さん。」

「音楽、邦楽のお前の好きなアーティストのをかけようか？」

「いいよ。

お父さんの大好きな洋楽で。」

「いいって！」

無理すると車に酔うぞ！

音楽も大事だしな。」

「じゃあ、そうしてくれる？」

あつ、でも私CD家に置いてきた。」

「じゃーん。

この袋の中を見てみる？」

静音は先生が渡した袋の中に入っているものを取り出した。

「わあ、私の好きなアーティストばかり。」

どうしたの、これ？」

「お前と車の中で聴こうと思って買い込んだんだ。お前が喜ぶと思つて。」

「わあい！」

嬉しい。

お父さん、かけていい？」

大好きなアーティストの曲を聴いて、大好きなお父さんと夜のドライブ。

静音は最高に幸せだった。

「静音、お菓子を食べる？」

ほら、この袋。」

また、今度はスーパーのナイロン袋を静音に渡した。

「わあ、チョコボールにアポロに、いちごポッキーだ！」

どれも私の大好物ばかり！

ありがとう、お父さん！

お父さん、どうして私の好きなお菓子がわかったの？」

「お菓子だけじゃないよ。」

静音の好きな物なら何でもわかるよ。

お父さん、静音が大好きだから。」

先生から発せられる、大好きという言葉聴いて。

静音は複雑な気持ちになる。

この好きは父親としてなのか、恋人としてなのか？

父親としてに決まっているか、静音は自分で自分を笑った。

こんなに優しくされると求めてしまう。

父親としてじゃなく恋人としての愛も。

この時欲張りになっていた静音は父親としての愛も恋人としての愛も両方手に入れたくなっていた。

しばらくして大きな広場に車が停車した。

「夜通しドライブすると眠気が襲ってきて危険なのでちょっとここで5時間くらい仮眠します。」

先生と二人っきりでこんな狭い空間で仮眠？

静音はますます異性として先生を意識してしまう。

シートを倒して、二人で寝る体制に入る。

先生との距離は30センチくらい。

先生は車の窓の方を向いて寝る体制を整えた。

先生を意識しながらも静音も車の窓の方を向いて寝ようと努力した。

静音は次第に眠くなってきて眠りについた。

次第に先生が車のドアを閉める、ボタンボタンという音が常に聞えてくる。

それが気になって熟睡できない。

先生は居心地悪いのか、何度も外に行っているみたいだった。

薄目を開けて車から出て行く先生を目で追った。

車から少し離れたところで、はあはあとすごい呼吸をしていた。

胸が苦しくてしようがないみたいだった。

静音はすぐにそれが何を意味するのかわかった。

先生の野性的な呼吸のわけがすぐにわかる。

先生は30センチの距離で眠っている静音を異性として意識しているのだ。

性的な欲望が生まれてしまったので、理性を保つために車から出て呼吸を整えているのだ。

先生はやがて戻って来た。

静音とは相変わらず30センチの至近距離。

静音は何事もなかったかのように眠るふりをする。

何度も苦しそうに寝返りを打つ先生。

寝返りにも野性的な何かがあり、ドキドキする静音。

静音はこの時、はつきりとわかった。

先生には父親としてじゃない愛情が芽生えてきていることを。

明らかに寝不足の二人はなんとかスキー場にたどり着いた。

スキー場にも仮眠室があったのでそこで少し二人で眠った。

今度は周りに大勢人が居たこともあり、安心してぐっすり眠れた。

スキーなんて初めての静音。

まずリフトに乗ろうとしたのだが、どうしても転んでしまう。

挙句の果てに次に来た空のリフトに頭をぶつけてしまった。

「まずリフトから練習しないとな。」

ストックは両方を片手にまとめて持ち、板は進行方向な。

リフトが来たら椅子を持ちながら座る。

そしてストックは膝の上にそろえておく。

降り口に近づいたら板を真つすぐにそろえ、椅子を持ちながら立つ。

リフトが押してくれて、立ち上がるだけで前に滑り出すよ。」

先生が初心者にも丁寧に教えてくれたので、段々、リフトに乗り降りできるようになってきた。

でも肝心の滑りが全然上達しない。

「わあ、先生、止まらない！」

どうしよう！

わあ、どいてください。」

どすんと尻もちをついた。

「お前は本当にスキーについて何もわかってないな。」

俺が後ろ向きに滑るから、静音は俺と全く同じ板の形にしろ！」

「まず真つすぐに、よしよし。」

板を真つすぐだ。

そして人が来た、さあ止まろう、ハの字しろ。

ハの字にすると減速する。

ハの字、ハの字。」

スキー板をハの字にしたら。

ちゃんと先生の言うとおりに減速し転ばなくても止めることができた。

自分でスキー板が操れるようになると楽しいものだ。

でも調子に乗っていたらミスをしてしまった。

リフトでスキー板とストックを落としてしまったのだ。

「お父さん、どうしよう。」

もう泣きたくなってきた。」

「わかったわかった、俺が取っていくるよ。」

「でもあんな怖いところ。」

取りに行くところは急斜面の怖い場所だった。

「俺はもつと普段怖い上級者コースを滑っているの。だからあれくらい全然大丈夫。」

先生は気持ち良さそうに急斜面を滑り、簡単に静音の落としたストックとスキー板を拾って戻って来た。

「ほら、今度はスキー板をきちんと付けて、ストックも落とさないように持つておくのだよ。」

先生は眩しい笑顔でそう言った。

先生は普段もかっこいいがスキーウェアに身を包むと余計にかっこ良く見えた。それにすごく頼もしくて男らしくて。

余計に先生のことを好きになってしまう。

そして静音は次第に滑れるようになってきた。

「わあ、楽しい。」

お父さん、滑れるようになるとスキーって楽しいね。」

「楽しいだろ。」

この楽しさを静音に教えたかったよ。」

「ありがとう、お父さん、静音すごく楽しくて幸せ。」

本当に幸せなひと時だった。

大好きな先生を追いかけながらスキーを滑る静音。

人生でもそうない幸せな時間だった。

大好きな先生と美しいゲレンデでスキーができる幸せを噛みしめていた。

そして段々、上達し、すいすいと滑れるようになってきた時だった。

向こうから静音と同じ初心者らしき人が滑って来た。

さっきまでの静音のようにその人は叫んだ。

「きゃあ、きゃあ。」

どいてどいてどいて！

誰か止めてーーーーー！」

その人がすごい勢いで静音の左足めがけて突進してきた。

どすーん。

静音も転んでしまった。

その人も転んでいる。

静音は立ち上がろうとした。

でも足が痛くて立ち上がれない。

「つつう、痛い。」

先生がびっくりして来てくれた。

「立ち上がれるか？」

「無理みたい、骨が折れているかも。」

「ほらっ、おぶってやるから。」

先生の背中にしがみつく。

先生におんぶされて、リフトに乗らずに、ふもとまで行くことになった。

先生はスキー用具を付けたままで器用に私を背負って滑っていく。

「先生、重いでしょ？」

大丈夫？」

「今まで何回かこんなことがあったから。

慣れているし大丈夫。

俺、言わなかったっけ？」

信州の出身だ。

幼稚園ぐらいから滑っているし、雪と友達だ。

だから心配しないでいいよ。」

先生の背中が優しくて頼もしくて。

涙が出るくらいに居心地が良かった。

ずっとこのまま時間が止まって欲しい、静音はそう思ってしまう。

そして父親としてじゃなく恋人としてこの先生の背中を独占したい気持ちになってしまった。

足の骨は幸い折れてなかった。

軽い捻挫だった。

でもこの日のスキー旅行での先生に対するときめきが静音の運命をまた変えてしまうのだった。

静音はこのスキー旅行で自分の先生への思いが恋だとはっきりわかってしまった。

それ以来ひとつ屋根の下にしていると先生を異性として意識してしまい、目が合わせられなくなってしまった。

先生に見られていると意識してしまい、可愛い部屋着にしたり、可愛いネグリジェを着たりしてしまう。

恋の力でどんどん家の中で綺麗になっていく静音。

そして眩しいくらいに綺麗になっていく静音を見てとまどう先生。

先生の目も父親じゃない目になっていくのがわかってしまう。

先生も異性として意識しているのがわかるのだ。

生まれて初めて自分を必要としてくれる家族ができて。

静音にとっても人生の中で最も幸せな生活を送れたのに。

その自分を幸せにくれた家族を静音自らの手で壊してしまうことになった。

ある日、家に帰ったら、母親が買い物に行っていた。

先生はもう帰って来ていた。

静音と先生はこの部屋で二人つきりになった。

この頃はこの二人に会話がなかった。

お互いに異性として意識しだったのでお互いにそれがわかり気まずい雰囲気になっていた。

静音は限界に来ていた。

どうしても先生に自分の気持ちを伝えたくなくなった。

「先生、私、やっぱり先生が好き。」

お父さんとしてじゃなくて、一人の男の人として……」

「それ以上、言うな。」

お前と俺は父と娘だ。

だから、こんなことがあってもいけないんだ。」

「私、もう一度孤児に戻ってもいい！」

先生と恋愛したい！

先生と父と娘じゃなく、恋人として一緒にいたい！

もう限界、先生を父親として見られなくなってきたの。」

「そんなこと言うなよ！」

先生は静音を思わず抱きしめてしまったのだ。

自分に対して告白をする静音を愛しくなってしまうって。

先生の方も娘としてじゃなく一人の女の人として抱きしめてしまった。」

「好きだ、静音。」

俺も一人の女性としてお前が愛しい！」

静音と先生は口づけをかわしてしまった。

そして、その時、買い物から帰って部屋に戻って来た母親の存在に気がついていなかった。

「あなた……」

静音……

どうということ？

私を裏切るの？

私は静音の本当のお母さんになろうと愛情をたっぷり注いできたのに。

二人は私を裏切るって言うの！」

母親は家を飛び出した。

そしてそれを追いかけて行った、先生。

先生とその奥さんが作り上げてくれた楽園を静音自らの手で壊した瞬間だった。

先生の奥さんは本当の娘のように可愛がってくれたのに。

追いかけて行った先生は夜遅くまで戻って来なかった。

そして戻って来た時に静音は先生を父親としても恋人としても失ってしまうことになった。

静音はその後もその恋の後遺症が残り、学校の先生ばかり好きになっていた。

同級生の男の子を好きになることは決してなかった。

そして先生に言い寄り、先生に迷惑をかけていた。

ちよつと自分に優しい先生がいると、つい追いかけてまわしてしまう。

先生もあまりに静音の思いが重いので、その恋を受け入れる先生などいなかった。

そんな中、しんちゃんが現れた。

10年上のしんちゃんは井原先生と似ていて、聴き上手で、自分の辛かったことを何でも聴いてくれた。

この間美園の家であった辛かったことも聴いてくれたのだ。

杏子にはまだ打ち明けていない自分の生い立ちのこともしんちゃんには信用して話していた。

しんちゃんは軽くてちゃらいけど、そんな性格が返ってほっとさせてくれる。

しんちゃんと一緒にデートしていると自分の苦しみが癒され、気持ちが軽くなった。しんちゃんを好きになるのに時間はかからなかった。

でもそんなある日、しんちゃんが静音と体の関係を持ちたいと言ってきた。

大好きなしんちゃんの頼みだから仕方なしにしんちゃんのアパートに行った静音。

でもしんちゃんがお風呂に入っていたら怖くなってきて、思わず杏子に電話してしまったという訳だ。

「静音、よくわかったわ。

辛かった話なのによく話してくれたわ。

しんちゃんとはこれからどうするの？

体の関係なしなら私はしんちゃんと静音が付き合ってもいいわよ。」

「お婆さん！

私を叱らないでいてくれるの？」

「叱る？

どうして？

静音がしんちゃんという幸せで気が晴れるのならそれでいいと思っているわよ。

でも大人の関係はダメだけだね。」

「お婆さんの恋人だったのでしょ？

いいの？」

「私の優先順位は今あなたはあなたよ。

静音が本当に幸せなら応援するわよ。」

「お婆さん！」

静音は杏子に抱き付いてきた。

「お婆さん。

しんちゃんはちゃらいからもういい！

だからお婆さんとよりを戻して！」

「おいおい！

俺との縁がそんな簡単に切れるのかい！

俺はそんなにちゃらいのか！」

「ちゃらい！」

「ちゃらい！」

二人で言って、顔を見合せて笑った。
新之助はその後、杏子の恋人だった。
悪気はない男だからだ。

ある日、杏子が家で脚本を書いていると、静音が14時頃帰って来た。
放課後にしては早い帰りだ。

心配した杏子は言った。

「どうしたの？」

どこか具合でも悪いの。」

静音は青い顔をして何も言わずに部屋に閉じこもってしまった。
しばらくすると、電話が鳴った。

電話に出ると、静音の担任の先生だった。

「静音さん、どうですか？」

具合の方は。」

「一体どうしたんですか？」

「静音さんから何も聞かれていませんか？」

私は家庭科を担当していますが、今日の調理実習の時、煮物を作る時に、里芋を剥いていました。

そしたら静音さん、次第に体全体が震えだして。

震える包丁を持つ手をもう片方の手で押さえていましたが、堪えきれずに包丁を持つ手から包丁が床に落ちて。

そしたらうずくまってしまつて。

顔も真っ青で。

すぐに保健室に連れて行きました。

保健の先生は心的外傷後ストレス障害じゃないかと言われていました。
何か過去に包丁で怖い目にあったのじゃないかと言われていましたね。

心当たりはおありでしょうか？」

「さあ、私は何も知らなくて。」

「静音さんの心のケアが必要かも知れませんか。」

あの怖がり方はひどかったです。

全身すごく震えて汗が出て、顔が真っ青になって。」

「そうだったのですか？」

わかりました。

今から静音に聴いてみます。」

杏子は静音の部屋をノックした。

返事がないので部屋の中に入った。

「静音、どうして包丁をそんなに怖がるの？」

過去に何があったの。」

「わ…わたし…」

実のお母さんに殺されそうになったの。」

「お…お母さんに殺されそうに？」

いつ？

いつの話？」

「小学校2年生の時。

私、生まれてきたらいけない子だったの。

望まれて生まれてきたわけじゃないの。

お母さん、私がいるから幸せになれなかったの。

だから私を殺そうとして…」

「話してちょうだい！」

静音はうつろな目をしながら小学校2年生の時に起きた出来事を話し出した。

静音は覚えている。

母親、良子が静音に包丁を向ける。

逃げ惑う静音。

包丁が胸に当てられそうになり、それを防ぐために手を差し出したので手に包丁が刺

さり、血だらけになる右手。

鬼のような形相の良子。

まるで童話に出てくるやまんばみたいな良子。

もうその時の良子の顔は母親じゃなくやまんばだった。

母親良子は恋愛体質の女だった。

高校3年17歳で静音を産み、やがて離婚。

その後も、顔のいい男を好きになつては結婚していた。

24歳までに3回の結婚と離婚をしていた。

良子は男と出会う目的で仕事はしていたが、あまり暮らし向きはよくなかった。掃除も洗濯も料理も嫌いな良子は、静音が小学校の頃から家事をさせていた。

良子が家に男を連れ込む時は、例え寒い冬であっても家から追い出された。

ある時期良子は、寛（ひろし）というすごく顔のいい年下の男に夢中になった。

良子が24歳で寛が18歳の時だった。

寛は気乗りしないながらも嫌々6つ年上の良子と付き合っていた。

静音が家の前で遊んでいたら、寛が家から出て来た。

そしてそれを追いかけるように静音が出て来た。

「待って！」

寛！

どうして結婚できないのよ！」

「俺はまだ18歳だよ。

そんなに早く結婚できないよ。

それに俺とお前はやっぱり合わない！

俺はお前のことがやっぱり好きになれない！

家事も一切できないだろ？

そんな奴と俺、結婚できない。」

それだけ言い放って、寛は去って行った。

「ひ……ひろし……！」

一目もはばからず、泣き叫ぶ良子。

「お母さん、家に入ろう。」

近所の人びつくりした顔でこっちを見ているので恥ずかしくなり静音がそう言った。家に入った静音と良子。

「ひ……ひ……！」

机に突っ伏して良子は泣き出した。

そしてふと静音を見て言った。

「そうよ！」

寛に嫌われたのはあなたがいるからよ。

あなたがいるから寛は結婚できないなんて言うのよ！」

静音さえいなかったら私は寛と結婚できたのよ！

あんたなんか！

あんたなんか！

産まなきゃよかった！

静音、あんたは望まれて産まれて来たこじやないの。

あんたがお腹の中にいたから好きでもないあんたの父親と結婚して。

私はあんたを産むつもりなんてなかったのよ。

堕胎するのがこわくてあんたを産んだだけなのよ。

あんたなんか産まなければ良かった。

あんたなんか産むのを望んでいなかった。

あんたなんか、あんたなんか、いらない！」

そう言って、台所から包丁を持って来た。

「あんたなんか殺してやる！」

あんたなんて死ねばいいのよ！」

静音はびっくりして外に逃げようとした。

それを追いかける悪魔となった良子。

逃げても逃げても追いかけてくる。

「お母さん、やめてやめて————！」

「あんたなんて殺してやる！」

あんたのせいで私は寛にふられたのよ！」

そして足が絡まってこけてしまった静音。

包丁を振り回す良子の顔はもう人間じゃなくてやまんばだった。

鬼にしか見えない良子の表情。

良子の包丁が静音の胸に当たりそうになったとき、それを防ぐために手を出したので

右手に包丁の先が当たり血だらけになった。

「ちよっと、良子————！」

何をしているの？」

ちようど運よく、良子の母、静音のおばあさんが良子を訪ねて来ていた。

おばあさんは必死に良子を止めた。

おばあさんは良子を力づくで止めたので、静音は死なずに済んだ。

もしおばあさんがあの時家に来なかったら、静音は母親によって殺されたのだ。神様が静音の命を助けてくれたのだ。

母親は恋愛と失恋の繰り返しで精神的に病んでいたみたいだ・
恋愛中毒症みたいになって。

母親は精神科のある病院に預けられた。

静音はその後、おばあさんと住んでいたが、やがておばあさんも死んでしまい、児童福祉施設に行くことになったのだ。

静音は、実の母親から発せられた残酷な言葉の数々も。

実の母親に本当に殺されそうになったことも。

すべて鮮明に覚えている。

静音の右手は未だにその時の傷がある。

その後の人生も深い深い心と体の傷になりずっと残った。

「この傷がその時の傷ね。

そう、そんなことがあったの。

辛かったわね。

辛かったわね。」

杏子は静音を抱きしめて泣き出した。

「私は毎晩、働いているお母さんが可哀想だと思って、小学校１年生の時から料理を作っていたの。

だから料理は得意なはずなのに。

悔しいな、調理実習だって大活躍したはずなのに。

あれからどんなに頑張って包丁を握ろうとしてもあの殺された時の恐怖を思い出して、体の震えが止まらなくなって、包丁もうまく握れないの。

震えを止めることができなくて、包丁を握ることもできなくて。」

そう言って静音は頭を掻き毟った。

「怖い、包丁が怖いのに。

助けて！

助けて！

おばさん！」

「私も一生あなたのそばにいてあげたいけど、順番からすると私はあなたより先に死
んじやうだろうし。

お料理だつてできなくてはいけないし。

おばさんと頑張つて練習しようか。

皮を剥くのが一番高度だと思ふのでいきなり皮むきはやめて、乱切りあたりからスタ
ートしましょうよ。

ほらっ！

こつちに来て！」

静音と杏子はキッチンに並んだ。

「ほら、人参の皮は私が剥くから。

ほら、剥けた。

そしてこんな風に無造作に切る。

これが乱切りよ。

さあ、やってみて。」

静音は恐る恐る、包丁を持った。

でも、また全身が震える。

「怖い！

怖い！

おばさん！」

「いきなり調理は無理か。

まずは包丁を持つところから始めましょうか。

体の力を抜いて、包丁を持つて。

怖くない、怖くないよ。」

静音は包丁を持った。

でも体が震えてくる。

「あつ、やっぱりだめ。

お母さんの声が聞えてくるの。

あんたなんか産まなきゃ良かった、望まれて生まれてきてないって。

やまんばみたいに恐ろしいお母さんから追いかけて、言われるシーンが頭の中に
蘇つて。

包丁を持つたびに、どうして私なんて生まれてきんだろう、生まれてこなかったら良かったって思ってしまった。」

「そうだったの。」

包丁を持つたびにそんなこと。」

杏子は静音を抱きしめた。

「おばさんと一緒に、包丁を持とう。」

とにかく一緒に持とう。」

静音に包丁を持たせた。

静音の体が震えだした。

その後ろからそっと抱きしめる杏子。

杏子もそっと静音の手の上から包丁を握りしめた。

「静音はね、私に会うために生まれてきたのよ。」

私にも小さい頃愛する娘がいたの。

でも静音と同じで小学校 1 年生から料理をさせてしまったの。

あの子の優しさに負けてね。

静音と一緒に優しい子だった。

働いているお母さんが可哀想だって家事を進んでやってくてね。

そう、静音がお母さんに言ってみたみたいに。

静音はいい子よ。

私は静音を本当の我が子のように可愛いと思っているわ。

だから生まれて来なきゃ良かったなんて悲しいこと言わないで。

私は今こうやって静音と一緒に住んでどんなに幸せか。

静音の本当のお母さんはもう死んでしまったの。

おばさんがその代りよ。

私を本当のお母さんだと思ってるね。

どんな我儘だって許してあげる。

だから私に思いつき甘えてね。」

杏子がそう言うのと、包丁を持って震えていた静音の体がぴたっと止まった。

「と、止まった！」

あんなに震えていた全身が止まった。

静音、離れてもいい？」

「う、うん。」

静音だけで包丁を持ってみた。

「ふ、震えない。」

包丁を持っても全身が震えない。」

「人参の乱切りをしてみて？」

「う、うん。」

おばさん。」

人参の乱切りをすると。

やっぱり全身が震えだす。

切るという動作がやっぱりどうしても怖いのだ。

「おばさんと一緒に最初は切ろうか。」

静音は全身震えながらも包丁を持つ。

その背後から杏子がそつと、包丁を持つ静音の両手に自分の両手を添えた。

「止まった。」

おばさんの手が上にあると落ち着くみたい。」

「最初はどの方法でもいい。」

とにかく一緒に切ろう。

こうやって人参を回しながら切っていくのよ。」

杏子の頭には小学校の万梨亜が浮かんだ。

そう言えば昔、万梨亜にこうやって野菜の切り方を教えていたなあと思い出す。

静音と杏子はその後、毎日こうやって野菜を切ることにした。

輪切り、いちよう切り、短冊切りさまざまな切り方をしていった。

二人で切っていたら全然震えない体も、少しでも杏子が手を離すと全身震えだす。

どうやら、杏子のが信頼できるようになってきたので杏子が一緒に切ってくれる

と体は震えないで済むみたいだった。

そんなある日、杏子が風邪をひいた。

熱が39度も出た。

料理の練習ができない。

それどころか、今日の料理もない。

杏子はお手伝いの三木さんと呼ばうかと思ったが名案を思い付いた。

「ねえ、静音、今日の料理、あなたが作ってくれない？」

私、味噌煮込みうどんが食べたいわ。

この間練習したでしょ？

できるわよね。」

「そんな、おばさん、私また全身が震えて…」

「うーん、熱で苦しい…」

静音の作った味噌煮込みうどんが食べたいわ。」

静音は熱で魘されている杏子を見ると、何とか自分が杏子の役に立ちたいと思った。

「静音。」

私は静音を愛しています。

生まれてこなければ良かったなんて頼むから言わないで。

私は今、あなたを必要としています。

これからもずっとあなたを必要とするでしょう。

産みのお母さんに殺されかけた怖い思い出も。

やっとお母さんができたのにそのお母さんが、自分の実の娘を思い出してばかりだった辛い思い出も。

やっとお父さんができたのにそのお父さんに恋してしまい、家庭を壊してしまった苦しい思い出も。

全部私が受け止めてあげる。

それを知った上であなたを愛します。

だから私の娘になって。

頼むから、私の娘になって。

何があってもあなたから離れないから。

一生宝物としてあなたを大切に育てるから。」

熱に魘されながら、杏子はそう言った。

「お母さん！」

お母さん！

しっかりして、死なないで！

お母さん、私を置いてどこへも行かないでよ！」

静音は杏子の手を握り、子供のように泣きじやくった。

「お母さん！」

お母さん！」

「静音、お願いだから強く生きて！」

あなたが生まれて来てくれて良かったって世界中の誰より私が思っているから。だからこれからはあなたは一人じゃないの。

私がずっとあなたのそばにいるからね。」

「お母さん！」

お母さん！」

私、強くなる！」

静音は決心し、包丁を握りしめた。

まず里芋を剥き始めた。

小学校の時はちゃんと友達の誰よりうまく芋が剥けた静音。

昔を思い出し、綺麗に皮を剥いた。

でも最後の芋を剥いている時、包丁の滑りが良すぎて手を切ってしまった。

「あつつ。」

手を切った時、お母さんから向けられた包丁から身を守るために手を出したことを思い出してしまった。

また全身が震えだしてしまった。

でも、ここからが今までの静音ではなかった。

杏子が熱に魘されていたことを思い出し、勇気を振り絞った。

お母さんのために、お母さんのために、美味しい味噌煮込みうどんを作るんだ、そう思ったら自然と震えた止まった。

里芋を輪切りにした。

そして人参の皮も剥きいちょう切りに。

大根も剥きいちょう切りにした。

鶏肉も食べやすい大きさに切った。

そして鶏肉を炒めた。

水、しょうゆ、みりん、酒、味噌、砂糖、めんつゆを入れて沸騰させ、そこに野菜と鶏肉や野菜を入れて後は煮込むだけ。

作っていくうちに、昔母のために作っていた時の記憶が蘇る。

どんな小学校１年生の時の料理の勘が戻っていく。

不思議なことに包丁を持っていると、杏子お母さんの手のぬくもりを感じる。

杏子お母さんがそばで元気づけてくれていたような気持ちになってくる。

ずっと静音に料理を教えてくれていたあの優しさが静音の心の中の氷を溶かしてくれているみだいたった。

今静音が包丁を持つと、あのやまればみたい包丁を持って追いかけたお母さんの記憶じゃなくて、優しく背後から抱きしめながら料理を覚えてくれた杏子お母さんの記憶の方が勝ってしまう。

包丁を持つと自分が生まれて来たらいけなかったのだと思って苦しんでいた静音。でも今は違う。

包丁を持つと自分が生まれて来てくれて良かったと言ってくれる母親の愛を感じ、優しい気持ちになった。

「お母さん、できたよ。」

静音は杏子を少しだけ起こし、ふうふうどんと息をかけて、杏子に味噌煮込みうどんを食べさせた。

「美味しい！」

ごめんね、静音に辛い思いさせてまで作らせて。

でもこれで完全に病気が治ったね。

自分が生まれてこなきゃ良かったと思ひ込む病氣。

それが静音を包丁恐怖症にさせていたのね。

静音はもう大丈夫じゃない。

この味噌煮込みうどん、お母さんよりうまいよ。

今度からいつもお母さんが風邪ひいたらこの美味しいうどん作ってもらうことにするよ！

そう言って、杏子は静音の頭を撫でた。

「お母さん。」

静音はそう言って、杏子を抱きしめた。

「早くよくなつて！」

死なないでよう。

私が今一番怖いのは包丁でも産みのお母さんの思い出じゃない。

杏子お母さんが死んじゃうことよ。

お母さんが死んじゃうどうしようって思ったら作れたの。

そして作っている間中ずっと、お母さんの優しい匂いやぬくもりを思い出して、優しい気持ちになって作ることができたの。

静音の包丁恐怖症治ったのよ。

お母さんの愛のおかげだから。

だから早く治って！」

杏子の愛が静音に届いたのだろう。

静音はそれから料理を作っても包丁が怖くなくなった。

包丁だけじゃない。

静音はずっと孤独だった。

実の母親に産まなきゃよかった、望まれて生まれて来たのじゃなかったと言われ殺されかけた。

やっと母親ができたのにその母親は手のかかった実の娘と比べて、静音は手がかからず優秀なので、結局児童福祉施設に返した。

そしてやっとできた父親に恋してしまい、結局、自分の手で家庭を壊してしまった。

静音はずっと自分なんて誰にも必要とされないのだ、自分なんて生まれてきたらだめだったのだと思い生きてきた。

誰にも自分の苦しみを打ち明けることもなく。

でもやっと静音が何重にもロックをかけた心の鍵を開けてくれる人が現れたのだ。

まるで本当の母親みたいな深い愛で静音を包み込んでくれたのだ。

静音は毎晩、杏子と一緒にダブルベッドで眠った。

今まで真冬の中凍えながらさまよっていた静音の心に杏子はうらかな春の日差しを与えた。

静音は真夜中目が覚めるといつもそこには抱きしめている杏子のぬくもりがあった。やっと静音にも本当の家族ができたのだ。

明日伊万里家の籍に入れようという日に静音はこんなことを言い出した。

「お母さん、私静音という名前を改名したいの。」

「どうしたの？」

この名前は静音のご両親が付けたんじゃないの？」

「だから変えたいの。」

私のお母さんの手を煩わさない静かで夜泣きしない子になって欲しいという願いが込められているの。

このままじゃ私、静音って呼ばれるたびに、いつまでたっても生みの親のことを思い出してしまう。

静音ってもう呼ばれたくないの。

それに杏子お母さんが私に名前を付けて欲しい。

これからの人生はお母さんが付けてくれた名前で生きていきたい。

だから、お願い、私に名前を付けて。」

「わかったわ。」

明日までに静音の新しい名前を考えておきます。」

杏子は考えた。

できるだけ華やかで可愛い名前にしようとした。

そして考え付いたのは。

「静音、今日からあなたの名前は梨々花よ。」

人々が梨々花を見ると、花を見ているように優しい気持ちになれるようにと願いを込めました。

響きも可愛いでしょ？

今日からあなたは梨々花よ。」

「お母さん！」

こんな素敵な名前、すごく嬉しい。

梨々花なんて、なんて可愛い名前なの？

ありがとうございます。」

梨々花はすぐこの名前を気に入った。

そして戸籍上も梨々花は養女となり伊万里梨々花として籍に入った。

梨々花は友達がいなかった。

幼い頃からずっと。

母親に殺されかけてからだ。

実の母親に殺されかけて。

実の母親に産まなきゃ良かったなんて言われて。

あれ以来、梨々花は自分なんて生まれてこなかったら良かったのだと思い込んでいた。実の母親にまで必要とされてないのだから赤の他人に必要とされるわけがないと思っていた。

児童福祉施設には自分と境遇の似ている女の子がいっぱいて、中には梨々花を愛そうとしてくれる女の子もいた。

でもそれでもどうしても梨々花は心の扉を開けようとしなかった。

誰も信じることができないのだ。

友達を愛した分だけ、もし裏切られた時、ショックがとてつもなく大きくなるので。

梨々花はそれだけあんな母親でも心から愛していたのだ。

だから友達も母親みたいにもし自分を嫌いになつたらと考えてしまう。

それにこんなに暗くて重い自分なんて誰も愛してくれないと諦めていた。

杏子はそのような梨々花を知っていた。

担任の先生と懇談会があつた時にこんなことを言われた。

「伊万里さんは、学級委員長で、成績もクラスで一番で、

それはそれは優秀なお子さんです。

でも伊万里さんは友達を作ろうとしないんです。

いつもひとりぼっちで。

心に扉があり鍵をかけて誰も入ってこさせない感じがしますね。

これは問題ですね。

これから社会人になったら通用しませんよね。」

杏子はいいいことを思いついた。

杏子にはマンションから徒歩 10 分の場所に、大親友が住んでいた。

その大親友は、杏子と一緒に 19 歳の時に子供を産んでいた。

麻紀乃（まきの）と言った。

万梨亜が保育園に行っていた時、知り合った。

共に他の保育園児より若い母親同士、意気投合して仲良くなった。

それから互いに育児について教え合い助け合って生きていた。

その麻紀乃には梨々花と同じ年の江梨香という娘がいた。

梨々花と江梨香を会わせようと思った。

学校も一緒なので、仲良くなったなら梨々花の高校生活も楽しくなるだろうと思って。そして梨々花と江梨香を友達にする作戦を決行した。

「梨々花、今日は私の親友の麻紀乃を紹介するからね。

お母さんと一緒に麻紀乃の家に行くわよ。」

「お母さんの、親友？」

大丈夫かな、私、気に入られるかしら？

こんな育ちの悪い私なんて。」

「またそんなこと言って！」

梨々花はしっかりとっていて常識もあって育ちの悪い子なんかじゃないわよ。誰より勉強もできるからもっと自信を持ちなさい。

梨々花は私にとって自慢の娘なのだから。

麻紀乃にも江梨香ちゃんというあなたと同じ年の娘がいるのよ。

お母さんが麻紀乃と話している間、部屋で江梨香ちゃんと話してなさい！」

「ええええ！」

そんなのは困る。

私、そういうのすごく苦手！」

「その苦手を克服しないとダメなの。

江梨香ちゃんはすごくいい子だし、すぐに友達になれると思うわよ。」

「私、友達なんていないのに。」

「とにかく、早く準備しなさい！」

梨々花は渋々麻紀乃と江梨香の家に行くことにした。

麻紀乃の家は一軒家だった。

新築されたばかりの家なのでまだ木の匂いがした。

「あらあ、今日は梨々花ちゃんも一緒なのね。

よく来てくれたわね。

初めまして、梨々花ちゃん。

私はお母さんの友達の志摩麻紀乃です。」

「初めまして、梨々花です。

お邪魔いたします。」

「礼儀正しい、いい子ね。

さあさあ、上がって！」

リビングに通された。

みんなで黒いセンスのいいソファに座ってしばらく杏子と麻紀乃は近況報告をし合う。

「ちよっと！」

江梨香いらっしやい！

今日は江梨香と同じ年の女の子が来ているわ。

一緒に部屋で話してなさい！」

江梨香は部屋から出て来てリビングに来た。

背が170センチくらいありすらりとしていた。

顔も彫りが深く美人だった。

「初めまして、伊万里梨々花です。」

「初めまして、志摩江梨香です。」

私は梨々花ちゃんのこと知っていたよ。

隣のクラスで頭がよくてスポーツ万能で、スーパー高校生だもん。

梨々花ちゃんはずごく有名だったよ。」

「私が有名？」

「知らなかったの？」

梨々花ちゃんは美人で賢くてスポーツ万能で女子がみんな憧れていたのよ。」

「私、嬉しいな。」

梨々花ちゃんとずっと友達になりたかったのよ。

私の友達になってくれる。」

人を疑うことのない真つすぐな目で江梨香が見つめるので恥ずかしくなり目を反らす

梨々花。

梨々花こそ育ちが良くて人を疑うことがなくて、心の底から優しい子なんだろう

なと思った。

でも心の底にドロドロとしたものがある重くて暗い自分なんてこんな花のように美し

い子には合わないと思ってしまう。

「あんなたち！」

江梨香の部屋に行ってなさい！

お母さんたち話すと長いから。」

麻紀乃が江梨香に言った。

「私の部屋に来る？」

梨々花ちゃんと部屋で話したい。

一緒に行こう！」

江梨香はためらうことなく梨々花の手を握り、部屋に案内した。

女の子とこんな風に手を繋いだこともなかったのでとまどう梨々花。

「わぁ、漫画の本ばかり。

それにアイドルのポスターがいっぱい。」

梨々花の部屋は少女漫画の本がいっぱい収納されていた。

そして部屋に人気アイドルグループのポスターがいっぱい貼られていた。

ベッドには可愛いぬいぐるみがいっぱい飾ってある。

いかにも普通の女子高生の部屋といった感じだった。

「私はずっと梨々花ちゃんのこと知っていたよ。

梨々花ちゃんは？」

「私も知らなかった。

ごめん。」

「なんだか信じられないな、あのアイドルの梨々花ちゃんが私の部屋にいるなんて。

お母さんに感謝だわ。

友達に行ったらみんな羨ましがるよ。

梨々花ちゃんって本当、不思議な人。

全然自分が人気者だって知らないんだから！」

「私、人気者かな？」

「人気者よ。

球技大会バレーで大活躍だったでしょ？」

あれ、クラスの友達と観に行ったのよ。

すごくかっこ良くスパイクなんて決めてさ。

なんてかっこいいのって、みんなで言っていて。

バスケだってバドミントンだってうまいのよね！

梨々花ちゃんにできないものなんてないでしょ？」

「私、江梨香ちゃんと思うような、憧れられるような人間じゃないよ。」

「梨々花ちゃん。」

もう一度言うわ。

私と友達になってくれない？

ずっと友達になりたかったのよ。」

穢れをしない真つすぐな瞳で江梨香が言う。

梨々花はそれが眩しくて目を反らして、言った。

「ごめん。」

私、友達は作らない主義なの。」

「そう言うと思っていた。」

あんなに人気者なのにクラスでいつも一人ぼっちで。

友達を一人も作らないで。

それも知っていたわよ。

ずっと梨々花ちゃんを見ていたから。

だからこそ、言っているの。

私と友達になって。」

江梨香はこれで梨々花と友達になれると思った。

しかし、梨々花はこんなことを言ってしまう。

「あなたなんか私に何がわかるの！」

人を疑うことも知らないあなたなんかに！

おせっかい！」

人生の中で、友達になってくれなんて言われたことがなかったので驚いたせいもあり、
ついひどいことを言ってしまった。

それにやっぱりを疑うことなく愛することのできる江梨香が眩しくて自分という存在が恥ずかしくなる。

「ねえ、今日から梨々花ちゃんと私は友達ね！」

梨々花ちゃんは賢いからついなんでも難しく考えすぎるのよ。

もつと心を軽くして。

私には何でも悩みを打ち明けてくれてもいいから。

私が梨々花ちゃんをもつと軽くしてあげる。

梨々花ちゃんがしよいこんでいる荷物を軽くしてあげる。」

「いいって言っているでしょ！」

私のことなんて放っておいて！

私の心の中に土足で入ってこないでよ！

あなたみたいに何不自由なく育っている人大嫌い！

私はあなたなんか大嫌いよ！」

そう言っ、梨々花は部屋から飛び出してしまった。

本当に優しい心を持っている江梨香に引け目を感じてみじめになってしまっ。

こんなひどいことを言ってしまった。

これは全然本心じゃなかった。

できることなら江梨香と友達になりたかった。

でも江梨香と友達になったらきつとこの重い荷物を江梨香に背負わせてしまうだろう。

自分といることで江梨香に迷惑がかかったら。

そして江梨香がそんな暗くて重い自分を見捨てる時がきたら。

そうしたらもう二度と立ち直れない気がした。

「お母さん、私、もう帰る！」

「帰るって、江梨香ちゃんは、どうしたの？」

「帰る！」

ここにいたくない！」

梨々花は驚く杏子を残し、一人で帰って行っ。

梨々花には変な癖があった。

頭の中で親友を作っていたのだ。

茜という梨々花と同じ年の女の子。

天然パーマで女の子らしい可愛い女の子。

小学校 1 年生時、お母さんに殺されかけた日の次の日から頭の中でできた親友。

私は生まれてきたらだめだった、望まれずに生まれて来。

死んだ方がいいのだ。

そう思っ、おばあちゃんの部屋の中でずっと苦しんでいた。

誰か、助けて！

誰か、救っ！

誰か、私を抱きしめて！

誰か、私を好きだと言って！

誰か、私を必要だと言って！

ずっとそう思って、苦しんでいた。

誰かに助けて欲しくてSOSを出した。

すると、目の前に茶色い髪の天然パーマの可愛い女の子がいた。

「静音、こんにちは。」

「あなたは誰？」

「静音、今日から私が梨々花の友達。

茜って呼んで。

ずっと静音と一緒にいてあげる。

私には何でも話してくれていいから。」

「なんでも？」

どんな辛いことも聴いてくれるの？」

「茜は静音の友達なもの。

何でも話してくれてもいいよ。」

「茜、私、お母さんに必要とされてないの。

お母さん、私がいらないの。

産まなきゃ良かったって言うの。

殺そうとしたの。」

そう言うと、茜は静音を抱きしめた。

「これから辛いことがあったらなんでも私に言うのよ。

そしたらこんな風に抱きしめてあげる。

静音は私と会うために生まれてきたの。

静音は私と友達になるために生まれてきたの。

だからこれからもずっとそばにいるわ。

お母さんのこと考えて頭が変になりそうになった時に、私を呼んで。

いつでもどこにいても私が静音に会いに行つてあげる。」

「茜、私の友達になってくれるの？」

「静音は私の友達よ。」

これからずっとそばにいるわ。」

梨々花はそれから、母良子に殺されかけた時のことを思い出し、辛くなった時に現れる茜と話した。

茜は梨々花が辛いときいつも励ましてくれた。

「静音、辛くなったらいつでも私を呼んで。」

いつでもどんなときでも私はあなたの元に駆けつけるわ。」

中学の修学旅行の時、さすがに友達がいないのが応えた。

友達と自由に行動してもいい時間帯、梨々花は一人ぼっちで行動しなければならなかったから。

「静音、どうしたの？」

私がいるじゃない。

私と一緒に行動しようよ。

せっかく京都の清水寺に来たし、一緒に歩きましょう！」

梨々花の中学の時の修学旅行は京都と奈良だった。

友達と自由に行動して良かったのは清水寺だった。

清水寺に向かうまでの町は、京みやげがいっぱい売られていた。

「わあ、可愛い万華鏡。」

私、これが欲しい。」

「茜、万華鏡が欲しいの？」

買ってあげるわ。」

そう言って、梨々花は美しい今日ちりめんできた万華鏡を茜のために買った。

「ありがとう、静音。」

これ私の一緒にの宝物にするわ。」

店員さんが驚いた顔で梨々花を見る。

でもそれに全然気づかず、梨々花は茜と話を続ける。

「私はこの手鏡にするわ。」

「それ、私が今度買ってあげる。」

梨々花は茜から手鏡をプレゼントしてもらった。

その時店員さんは恐怖におののいた顔をしていた。

この会話を全部、一人二役して、梨々花が話していた。

「茜、ありがとう、この手鏡宝物にするね。」

梨々花は茜がこの世界に存在すると信じている。

自分で一人二役演じているなんて気がついていなかった。

「行きましょ、茜。」

私、茜と京都に來られて楽しいわ。

京都って可愛い町だね。」

「うん、私も静音とこんな可愛い町に來られて幸せ。

京都、すごく気に入ったわ。

将来また、二人で旅行しましょよ。」

「そうしましょ！」

大人になったら京都に一人旅しましょね。」

周りの人たちがびつくりして梨々花を見ている。

でも梨々花だけはそんな人の目も全然気が付かず、ひたすら一人芝居を続けた。

学校では休み時間に秘密の隠れ家である、元の古い校舎の建物で茜と会っていた。

そこなら気兼ねなく茜と出会えた。

誰にも気づかれずに済んだのである。

高校になったら、普段は誰も入って來ない人里離れた場所にある、校庭で茜と会っていた。

中学、高校と茜と梨々花が会っている時は、誰にも気が付かれずに済んでいた。

そして高校の修学旅行の日が來た。

行先は大阪と神戸だった。

大阪で相撲見物、ユニバーサルスタジオ体験。

神戸の異人館見物、中華料理の飲食といったコース。

ユニバーサルスタジオは自由に友達と遊んでいい時間帯だった。

梨々花はハリーポッターが大好きだった。

本で読み、映画を観たりしていた。

このハリーポッターゾーンはずっと行きたかった憧れの場所だった。

「茜、ハリーポッターゾーンに行きましょよ。」

「ええ、私もずっと行きたかったの。」

行きましょ、静音。」

「うわぁ、本当に映画の中にいるみたい。」

「茜、すごいね、ハリー・ポッターの映画の中だぁ。」

そこは本当にハリー・ポッターの映画の中にいるかのように見事に再現されていた。憧れのユニバーサルスタジオのハリー・ポッターゾーンを大好きな茜と一緒に楽しめる幸せを噛みしめた。

梨々花は茜と手を繋いでハリー・ポッターゾーンに行った。

「茜、バタービール飲みましょうよ。」

「うん、私もずっとバタービールを飲みたかったの。」

バタービールを飲む梨々花と茜。

そしてお菓子の店の前に行った。

「ゲロ味のキャンディーも買いたいわ。」

「鼻くそ味も面白そうじゃない？」

魔法の用品が売られている店にも行った。

「わぁ、魔法の杖の店だぁ。」

「茜、魔法のマントもあるわ。」

「白いふくろうも可愛いね。」

「学校の制服もあるね。」

「ハリー・ポッター・アンド・ザ・フォービドゥン・ジャーニー乗りましょうね。」

「茜、すごいっばいお客さんが並んでいるね。」

時間内に回れるかしら。

でもこれだけは絶対に乗っておきたいしね。」

「1時間40分待ちだって。」

ハリー・ポッターとスパイダーマン、ジュラシックパークで時間切れになりそうだね。

ここでそんなに待たないといけないんだね。」

「あら、私は平気よ。」

茜とずっと話していたらしいのだから。

茜となら何時間でも待てそう。」

「そうよね。」

私も静音となら何時間でも待てるわ。」

梨々花は幸せそうに茜と話していた。

これ以上ないくらい、幸せだった。

でもこれを目撃していたクラスメイトがいたなんて思ってもいなかった。

ユニバーサルスタジオではしゃいだせいで、その日は床に就くとすぐに眠ることができた。

でもクラスメイトのこそそ話で起きてしまうのだった。

「ねえねえ、伊万里さん。」

気持ち悪かったわね。

なにあれ、一人で二役して話してなかった？」

『茜、茜、楽しいね。』

茜といたところで本当に楽しいわ。』なんて一人ではしゃいでいたわね。」

「茜って友達のいない伊万里さんが妄想で作り上げた友達のこと？」

「ハリーポッターゾーンに入った瞬間からずっとまるでその茜って人と遊んでいるかのように話し出したのよ。」

怖かったわ。」

「それに待ち時間結局2時間くらいになったけど、延々とその伊万里さんの一人芝居が続いたのよ。」

周りの人もぎょつとした目で見ていたわね。

私、同じ制服を着ているし恥ずかしかったわよ。」

「伊万里さんって最近、苗字変わったでしょ？」

噂によると前の家で何かあったみたいよ。

可笑しいでしょ？」

苗字も名前も一氣に変わるなんて。」

「有名な脚本家の家の子どもになっただけらしいわね。」

「脚本家の子どもだからなんか劇の練習でもしているとか。」

「確かに演劇としてはいい演技だったわね。」

「一人二役なんてよくやるわね。」

「だから伊万里さん誰とも仲良くしないし友達だっていないのね。」

「私は元から伊万里さんとは友達になりたいなんて思ったことなかったわ。」

なんかあの人、陰気臭いしね。」

「気持ち悪くて見てられなかったわ。」

「うん、うん、一人芝居すごく気持ち悪かった。」

「新しいお母さんともうまくいってないのじゃないの？」

「お母さんとの人間関係がうまくいなくて、ああやってストレス解消しているんじゃない？」

梨々花は全部聞いていた。

そして気が付いたら、噂話をしていた女の子を叩いていた。

「伊万里さん！」

伊万里さん！

やめて！」

中には優しい子がいて、梨々花を止めようとしていた。

でも振り払って、悪口を言っていた女の子の一人の頬をぶってしまった。

お母さんのことを悪く言われたのが一番悔しかったのだ。

「伊万里さん！」

やめて！」

「何をやっているの！」

見回りに来ていた先生が入って来た。

「あなたたち！」

廊下に出なさい！」

一晩中正座してなさい！」

結局連帯責任でその部屋にいた15人全員が正座することとなった。

「伊万里さんのせいだから。」

「伊万里さんさえないなかったらいい旅行だったのに。」

「ああ、明日ハードスケジュールなのに徹夜なんて。」

「伊万里さんのせいで散々な修学旅行になったわ。」

「伊万里さん、茜ちゃんを呼んだらいいのに。」

茜ちゃんと一晩中話したら？」

意地悪な女の子が梨々花を馬鹿にしたような目で見て言う。

「そうよ、茜ちゃんと私たちも知り合いになりたいわ。」

伊万里さん、茜ちゃんを呼びなさいよ。」

「ほら！」

早く茜ちゃんを呼んで。」

「茜ちゃんを呼びなさいってば！」

梨々花はこんな辛いときいつも茜を呼んでいた。

でもこんな時に茜を呼ぶことなんてできない。

梨々花のたったひとつの心のオアシスが奪われてしまったのだ。

「さつきはよくもぶつてくれたわね。」

茜をさつきと呼びなさいよ！

茜はあなたの唯一の親友なんでしょ！」

「茜はここにいろわ！」

みんなが振り返ると、江梨香が立っていた。

「4組の江梨香じゃない？」

なんであなたがそこに？」

さつきの騒ぎで隣の部屋の女の子もみんな起きたのよ。

さすがにあそこまで派手に騒ぐと起きるわよ。

そして私も一緒に正座させてもらいます、梨々花の横でね。」

「あなたは関係ないでしょ？」

寝ていたらいいじゃない！」

「親友の梨々花が一晩中正座させられているのに黙って眠るわけにはいかないですよ？」

「ちよつと待つてよ。」

あなたたちいつから親友に？」

「私たちのお母さん同士が大親友なの。」

この間、梨々花が私の家に遊びに来てね。

それ以来ずっと親友。」

「こんな気持ち悪い、陰気臭い人と江梨香が友達なわけ？」

「梨々花は気持ち悪くなんかないよ！」

私の親友を悪く言ったら私がぶつわよ！」

「江梨香やめなよ。」

こんな人と友達になるの。

江梨香はいい奴だから友達がいっぱいいるのに。

何もこんな人とわざわざ友達にならなくても。」

「うるさい！」

黙れ！

さあ、梨々花、一緒に正座しようね。」

「志摩さん。」

「江梨香よ。」

呼びつけて呼んで。

私も梨々花って呼びつけて呼ぶしね。」

「どうして、ここへ来てくれたの？」

ここからは梨々花と江梨香の二人だけの世界になった。

二人でこそそと話し出す。

「実は梨々花が茜って人と会話しているの、ずっと聞いていたの。

私はすぐ後ろに並んでいて。

梨々花、その茜って人と会話している声がすごく大きくて。

後ろのみんながびっくりして聞いていて。

悪口をみんなで言い出してね。

そしてまたこの梨々花の部屋のメンバー、意地悪な子が多いのよ。

その意地悪な子たちが梨々花の悪口言っていてね。

絶対に今夜悪口を部屋で言うと思ってね。

あんな意地悪な人たちと部屋が一緒に大丈夫かなってずっと気になっていて。

そしたら案の定この部屋がすごくもめていて。

居ても立つてもいられなくてここに来たわけ。」

「私のために？」

一晩中正座なのよ。

いいの？」

「言ったじゃない、私たちは親友でしょ？」

「でも私には茜がいるし。」

「茜ちゃんって人はこの世に存在しないの。

今梨々花のそばにいるのはこの私よ。

私をもっとじっと見て！」

「いやよ！」

茜じゃないと。

私は茜さえいれば、他は誰もいらない！」

「目を覚まして！」

茜なんて人いないんだから！」

声が途端に大きくなったのでみんながびつくりした。

「とにかく明日の三宮の中華街の散策、自由行動だし、私と行動しない？
違うクラスの者同士でも行動できるのよ。」

次の日、三宮の中華街を梨々花と江梨香で歩いた。

「うわぁ、美味しそう、

エビのから揚げの串食いたい！」

梨々花は何か欲しいものない？」

そう言つて、江梨香は梨々花の腕に腕を絡めてくる。

「嬉しいな。」

憧れの梨々花とこうして一緒に中華街を歩いて。

あつ、お土産物屋さんだ。

二人でお母さんへのお土産買わない？

お揃いのにしようよ、お母さんたち喜ぶよきつと。

この中華風ジュエリーケース綺麗だね。

中華風ミラーも綺麗だけど。

どっちがいいかな。

梨々花ミラーとジュエリーケースどっちがいい？」

すっかり天真爛漫な江梨香のペースだ。

江梨香のくったくのない笑顔に救われる梨々花。

「ジュエリーケースの方がいいかも。」

お母さん、いっぱいジュエリー持っているし。」

「じゃあ、ジュエリーケースに決まりね。」

「私ブルーのにする。」

梨々花は何色にする？」

「お母さん、ピンクが好きだから、ピンクにする。」

「決まりね！」

後、今日の記念に二人で何か買わない？」

その言葉にはっとなる梨々花。

まるで茜が言う言葉みたいだった。

それを茜じゃなくて現実の友達江梨香が言うのだ。

梨々花は何だか夢の中にいるみたいな気持ちになった。

「ふ、ふたりでお互いのお土産を買わない？」

これは茜としたことがあった。

「いいじゃん！」

そうしよう、お互いを選んでプレゼントしよう。

素敵じゃない！」

「中華まんじゅうのマスコットの大きな携帯ストラップ可愛いね。」

「これいいね。」

私は、桃の肉まんのがいい。」

「私はピンクの点心のがいい。」

「じゃあ二人でお互いにお土産を買おう。」

そして二人で携帯ストラップのお土産を交換した。

そして早速二人のスマホに付けた。

「これは親友の証。」

私たちがこれから親友になるって儀式だよ！」

「待って、茜はどうしたらいいの？」

梨々花は茜が妄想で作られた友達だと知っていた。

でもどこかで本当にいて欲しいという願いが強くなり、次第に妄想じゃないと思ひ込

むようになっていた。

現実に戻れば友達がいなくて寂しいひとりぼっちの世界。

その現実に戻るのが怖くて寂しくて茜に依存する毎日だった。

「茜ちゃんにはさよならしないとね。」

今日から茜ちゃんはいなくなるの。」

「私、茜にちゃんとさよならしてくる。」

目の前に天然パーマの可愛い茜が立っていた。

「静音！」

静音！

どうして私から去って行くの！

静音はこれからもずっと私の親友でしょ？

そんな私を捨ててこれから生きて行くの？」

「茜、私には現実の世界で友達ができたのよ！

だから茜とはさよならしないといけないの。

ごめんね、茜。」

「そんな、私を裏切るなんて。

いつも一生一緒にいようねなんて言っていたのに。

いつだってあなたが辛いとき助けてあげたのに。

静音！

思い直して！」

「それに私もう静音じゃないの！

これからは伊万里梨々花として生きて行くの！

さよなら、茜！」

梨々花は涙がぼろぼろ出てきた。

「そんな、去って行かないで！

静音、考え直して！

静音！

静音！」

茜がぼんやりかすみ出した。

「茜！

さよなら！

さよなら！

今までありがとう！

茜のこと一生忘れないから！」

茜が…

消えていった。

「梨々花、しっかりして！

茜ちゃん去って行った？」

「うわああああああん。」

江梨香。」

梨々花は江梨香の胸で思いつきり泣いた。

「梨々花、梨々花。」

これからは何があっても私がずっと梨々花のそばにいるからね。

私は梨々花を初めて見た時からずっと友達になりたかったのよ。

でも友達を作らないことも知っていたし、心に闇があることも知っていたわ。

だからいつか私にその心の扉をあけさせてもらえないだろうかと思っていたの。

私、みんなから天真爛漫だとか、何の悩みもないだろうって言われていて。

だからこそ、心に闇のある人に惹かれるきらいがあってね。

でも梨々花ほど惹き込まれた女の子はいなかったの。

そして私たち違い過ぎて仲良くなれるのじゃないかって思っていたの。

ずっとずっと友達になりたかったの。

でも神様はいつも私たちを同じクラスにしてくれなくて。

でもいいの。

これから休み時間のたびに梨々花に会いにくし。

私、友達は梨々花だけで十分よ。」

「江梨香！」

ありがとう、私、なんてお礼を言えいいのかわからないくらいにあなたに感謝している。

本当にこれからこんな私の友達になってくれるの？」

「当たり前じゃない！」

梨々花と私は友達どころか親友よ！」

「江梨香、私一生江梨香のこと大事にする。」

「なんだか恋人宣言みたいね。」

「本当だね。」

そう言って、梨々花と江梨香は笑い合った。

こうして梨々花は、小さい頃からの友達茜は消えて、江梨香という現実の世界の本当の親友ができた。

「江梨香！」

これはこれは学級委員同士で仲良くしているのですか？」

「江梨香、最近クラスにいないしつまらない！」

隣のクラスの江梨香の友達が梨々花のクラスまで来て、ふくれっ面で言う。

あれから江梨香は休み時間の度に隣のクラスの梨々花の元に遊びに来るようになった。

江梨香も隣のクラスで学級委員をしている。

クラスのリーダー的な存在だ。

江梨香は梨々花と違い勉強は普通、スポーツなんて全然できない。

でも責任感が強く正義感も強い江梨香はみんなから愛されていた。

クラスをまとめる統率力があるのだ。

江梨香は人気者で友達もいっぱいいた。

しかし、梨々花とだけ仲良くなりたくて、こうして毎日梨々花の元に来ていた。

あれから梨々花は江梨香に自分のすべてを吐き出した。

今まで辛かった思い出全部を。

江梨香はそうすることで梨々花をわかれようとしていた。

そして梨々花の悲しみ全部を受け止めようとしてくれた。

ある日、そんな江梨香から思いがけない頼みごとをされることになった。

「梨々花、すぐく申し訳ないけど、私の入っている演劇部に入ってくれない？」

部員が少なくて劇にならなくて困っているのよ。

なぜ全学年合わせても4人しかいなくて。

これじゃ、文化祭で劇ができないわ。

頼む！

梨々花！」

「私は部活動なんてほとんどしたことなくて。」

「昔、先生に恋していた時にその先生の顧問のバドミントン部に入ったことがあっただけだったよね。」

「私、その時も先生にべったりで友達とかいなかったの。」

「じゃあ、今は違うじゃない！」

私がいるからね！

私という強い見方がいるから、大丈夫よ。

それにもしかしたら部員の子とすごく仲が良くなることもあるし。

新しい友達ができるかも知れないよ。

ねえ、演劇部に入ってよ。」

「私、みんなとうまくやっていけるかしら？」

「みんないい子ばかりだよ。」

自分の殻に閉じこもってばかりだといけないよ！」

「私、演劇なんてできそうもないし。」

「ごめん。」

これ、梨々花を傷つけるかも知れないけど。

怒らないで聴いてね。

私、梨々花がユニバーサルスタジオジャパンで、ハリーポッターのゾーンにいる時の

一人芝居全部聴いていたの。

ごめん。

これ、気持ち悪いとか、興味本位とかじゃないからね。

ただただ感動してしまっただけ。

あれが演技だとしたらすごい才能だと思ってしまうて。

すごかったのよ。

全く二人別の人格が存在している。

本当に違う人格の二人がごく自然に会話していたのよ。

私も演劇部に入ってから大会で、他の高校の演劇部の子のすごい演技を観たこともあったのよ。

だけど全然レベルが違う。

みんな一生懸命お芝居しているって感じがするだけで。

梨々花の演技は違ったの。

すごく自然で、演技だったこと忘れるくらいで。」

「あれは、演技なんかじゃないわ。

茜は本当に実在したのよ！」

「ごめんごめん、梨々花。

思い出させてしまっただけ。

私が言いたいのは梨々花には並外れた演技力があるってことよ。

今までの人生で色んなことを経験し過ぎたために、色んな人になれるようになってしまったのよ。

人の痛みが心からわかるから。

今までの辛い経験が無意味なものじゃなかったのよ。

それを芸の肥やしにできるわ、きっと。

もしかしたら梨々花は天才女優になるために辛い経験を神様がさせたのかも知れないわ。

梨々花、ねえ。

演劇部に入ろう！

どのみち梨々花は部活動には入らないといけないわ。

これからの人生を考えたら。」

「私がそんな才能あるなんてわからないけど、演劇部に入った方がいいって言うの？」

「最初からいきなり演技に抵抗があるのなら、大道具の仕事から入ってもいいし。

美術だとか脚本だとか、ナレーションとか。

演劇部には色んな役割の人が必要なの。

まず、見物だけでもしてみない？」

強引な江梨香に連れられて、梨々花は演劇部の練習場に行った。

みんなジョギングを終えたみたいで、腹筋を鍛えていた。

「みんな、これが私の言っていた、私の親友伊万里梨々花よ。」

「わあ、あのスーパ―高校生の？」

「学年トップの成績なのよね。」

「勉強とスポーツだけじゃなくて美術もすごいよね。

絵画の展覧会で金賞取ったし。」

「ピアノもうまいのよね。

いつも合唱コンクールの時ピアノ伴奏担当だもんね。」

「こんなすごい人が演劇部に本当に入ってくれるの？」

「演劇経験のない梨々花に演技をいきなりしてもらうのは恥ずかしいと思うし、当分は美術をやってもらおうと思ってる。」

ねえ、梨々花、美術からやってくれるよね。」

「絵画を描くのは好きだしいいわ。」

梨々花は自分のことをみんながそんな風に思っているなんて知らないので真っ赤になつて言った。

「じゃあ、梨々花。」

東南アジアの野菜や果物の市場の風景を描いてくれない？」

「東南アジアの市場？」

わあ、行ったことないしわかんないや。」

「図書館で調べてくれてもいいのよ。」

梨々花は図書館に行き、タイについて載っている本を探し開いた。

すると、ちょうど市場の写真がいっぱい載っていた。

梨々花はイメージを膨らませた。

そして演劇部の部室に行き、置いてあった絵の具でタイの市場の絵を描いた。

バナナ、マンゴー、パイヤ、トマト、みかん。

美しい花、木彫り、民族衣装。

色とりどりの美しい市場の風景を描いた。

梨々花が描いていると、一人、二人と、それにびっくりした演劇部員が次々と集まつて来た。

「やっぱり、伊万里さんってすごいわ。」

「ひょっとしてすごい戦力がうちの部員になってくれた？」

「伊万里さんみたいな人が来て、一気に私たちの演劇もグレードアップしそうだね。」

梨々花はこんな風に人から必要とされたことなどなかったので嬉しくなった。

梨々花はその後、海を描いたり、下町を描いたり、演劇部のみんながびっくりするような絵画を描いた。

梨々花の描いた絵を演劇部のみんなは本当に喜んでくれて梨々花は演劇部に行くのがすごく楽しくなってきた。

そしてそうなる学校生活も楽しいものとなっていくた。

そばにはいつも江梨香がいてくれるし、友達がいるのといないのではこうも違うものかと思つた。

そして梨々花の描く背景のおかげで演劇部は質が高くなり、小さな演劇の大会で特別賞を受賞した。

「どう、梨々花。

自信はついた？」

その日の帰り道で江梨香が聴いた。

「明日から、新しいお芝居の計画を立てないといけないのよ。文化祭に向けてね。

脚本は私が書く予定していてね。

私、小説や脚本を書くのが趣味なの。

あなたのお母さんみたいな脚本家になりたくてね。

それですごく脚本、考えついちゃった。

主演は梨々花よ。」

江梨香の考えた脚本はこんな話だった。

エミリーという女の子がいた。

エミリーは小さい頃両親を亡くす。

それで引き取られた家の義理のお母さんとお父さん、その娘ドロシーにいじめられて育つ。

そして部屋は屋根裏の汚い部屋。

エミリーは強い子だから、気丈にも強く生きて行こうとするの。

エミリーは心の中に家族を作るようになる。

ピアノの先生をしているお母さん。

小学校の先生をしているお父さん。

勉強が嫌いなお兄さん、ジョージ。

やんちゃでおてんばな妹、リリー。

エミリーが屋根裏部屋に帰ってくると、温かくて美味しいシチューを作ってくれるお母さんがいて。

お父さんはテーブルの椅子に座り新聞を読んでいて、今日学校であった面白い話を聴かせてくれる。

勉強が嫌いなジョージはお母さんに勉強をしろと叱られる。

おてんばなリリーはお父さんにおしとやかにしろと叱られる。

そしてお母さんが優しい音色でピアノを奏でる。

この瞬間がすごく幸せで。

その家庭は、すごく楽しくて明るい家庭で。

エミリーにとってはこの屋根裏部屋だけは誰にも知られたくない秘密の基地。でもある日、ドロシーに見つかってしまう。

屋根裏の部屋までドロシーに取り上げられてしまうのだ。

そして、ドロシーにより、牛と豚のいる飼育小屋に追いやられてしまう。

ある日、牛と豚を世話していると、高熱が出て、倒れてしまう。

すると通りがかりの、小学校の先生をしている親切な男の人がそれを見つける。

そしてその親切な先生が自分の家に連れて帰って看病することになった。

エミリーが目を覚ました時、誰かの柔らかな温かい手が頬を撫でていた。

美しい女の人が心配そうにのぞきこんでいた。

その女の人はあったかい美味しいシチューを持ってきて、エミリーに食べさせた。

それはあのエミリーが妄想で作り上げたお母さんにそっくりだった。

さつきエミリーを助けてくれた先生が、エミリーに大丈夫かと聞いた。

そして話をしていてその男の人が小学校の先生をしていると知りびっくりする。

これもエミリーが作り上げた妄想の上でのお父さんにそっくりだった。

そしてジョージが本当に学校から帰って来た。

宿題もせずに遊びに行こうとしたのでお母さんに叱られる。

それからリリーも帰って来た。

リリーは家から帰ったらすぐに木に登ったので今度はお父さんに叱られる。

やがてお母さんは優しい音色でピアノを弾き出す。

エミリーが作り上げた理想の家族がここにいるのだ。

でもエミリーは、元の厳しい現実の世界に戻らなければならない。

それを思うと涙がポロポロ出てきた。

何を泣いているのかと先生が聞いた。

そして、さつき、エミリーの家族にエミリーを預けようとしたとき、その子はいらな

いと言われたと言った。

だからこの家で先生が引き取ることにしたと言った。

エミリーはエミリーの描いた理想の家族の一員になることができた。

「夢の中の家族」という題名だそう。

「この屋根裏部屋の、5人家族のやり取り、これを梨々花一人5役でやってもらおう

と思つてね。」

「私が一人で5役？」

「人格が5人。」

梨々花ならできる。」

「私、できるかしら。」

この話、すごく好きだわ。

私にそんな力がもしあるのならやりたい、この役。」

「私はドロシーの役をします。」

いじめ役は演技のうまい子がするの。」

「おっ！」

言つたな！」

梨々花は江梨香の頭をぽんと叩いた。

「配役を発表します。」

ナレーション 三木さん

義理のお父さん 藤井君

義理のお母さん 江口さん

ピアノの先生のお母さん 私

今は4人しかいないから取りあえず、ここまでしか配役が決められないわ。

明日からスカウトに繰り出すし、梨々花付き合つてね。」

江梨香のスカウトのお蔭でなんとか先生をしているお父さん、ジョージ、リリーの役もなんとか決まつた。

梨々花は美術も兼ねていたので屋根裏や、牛豚の飼育場、先生の家などの絵を描いた。

そしていよいよ、手作りの小道具や衣装もできて、演技の練習に入った。

練習風景はこんな感じ。

「今日は大きな野良犬が教室に入って来て大変だったよ。」

お腹をすかしていたみたいだったので、みんながお弁当を出し合つてあげたのだよ。」

「まあ、あなた、あなたのクラスの生徒たちはいいい子たちばかりね。」

「みんな心の優しい子たちばかりだよ。」

ただ授業中も勉強そつちのけで犬の世話をしていた子もいてそれはどうかと思つたがね。」

「ただいま！」

お母さん！

トムの家に遊びに行ってくる！」

「こらっ！」

ジョージ！

宿題をちゃんとやってから出かけなさい！」

「ただいま！」

お父さん！

私も遊びに行ってくる！」

「こら！」

リリー！

また木登りなんてして！

女の子なのにスカートをまくりあげて！

もっとおしとやかにしなさい！

降りて来なさい！」

「全く、ジョージは全然勉強しないから。

あなたに似たら勉強好きになるはずなのに。」

「全く、リリーはピアノの練習をせずに木登りしたり、川で遊んだり。

お前に似たらおしとやかにピアノを弾くはずなのに。」

梨々花の一人5役の演技があまりにうまいので、みんなびっくりしてしまった。

梨々花も段々茜といった時のことを思い出し、演技に力が入る。

エミリーは梨々花そのものだった。

完全に感情移入できるのだ。

それに自分自身、これまでの人生で、もらわれた家の両親に気に入られようと自分じやない自分を演じてきたので自然な演技ができるようになっていた。

梨々花の歩んできた人生全部を出し惜しみなく出して演技をした。

「私、こんなにうまい演技の人、見たことない。」

「梨々花って天才なんじゃない？」

「演技だってこと忘れるぐらいにすごい。」

「なんかエミリーがそこにいるのよ。」

演劇部のみんなが絶賛していた。

演技をしていて、次第に梨々花は演劇部のみんなも愛するようになった。

次第に三木さん、藤井君、江口さんとも仲が良くなり、休み時間になると、演劇部のみんなが集まることになった。

さて、いよいよ、本番の文化祭の日になった。

梨々花の見事な一人5役は観客みんなの目が釘付けになった。

お父さん、お母さん、エミリー、ジョージ、リリーそれぞれ声色を変えて見事に別の人格を一人で演じきっている。

まるで本当にお父さん、お母さん、ジョージ、リリーと話しているみたいだった。

梨々花は思い出した。

母親良子に殺されかけて、あなたなんて産むんじゃなかった、望まれて生まれてこなかったと言われてショックを受けた時に現れた茜という少女。

あの茜といった幸せだったひと時を思い出し、自分の全部を出して演技をした。

そして今、妄想で作り上げた親友茜じゃなくて、現実の世界でできた親友江梨香が、そこに立っていた。

「大丈夫、大丈夫？」

熱がまだあるみたいね。

心配しないで。

まだここで寝ていていいのよ。」

そう言って江梨香の演じる優しいお母さんが甘い手で梨々花の額を触った。

「シチューを食べて元気になって。

ここにずっといていいのよ。」

シチューを食べる梨々花。

このシチューはリアリティを出すために本当に今日の朝江梨香が調理室で作ったものだった。

本当に江梨香の得意料理はシチューだった。

そのシチューを食べた時。

江梨香の愛、優しさ、柔らかさ、温かさを感じ取ることができ、本当に美味しくくて梨々花は涙が止まらなくなった。

あの修学旅行の時に正座させられた時、助けに来てくれた時のことも思い出し涙が止

まらくなった。

観客みんなもそれを観て、泣いていた。

江梨香も泣き出してしまった。

「今まで辛かったよね。」

よく一人で頑張ったわ。

これからは一人じゃないの。

ここですつと暮らしていいのよ。」

ついアドリブで江梨香はストーリーを少し変えてしまった。

戸惑うお父さん役。

でも江梨香に合わせてこう言った。

「あんな意地悪なやつがいる家にもうお前は住まなくていいんだよ。

今日からお前は俺の娘だ。」

「エミリー、お前は俺の妹だ。」

「エミリーねえちゃん。」

ねえちゃんは今から私のお姉ちゃんよ。

リリーと木に登って遊ぼうね。」

「こうしてエミリー、リリー、ジョージ、お父さん、お母さんは家族になり、

一緒に暮らせるようになりました。」

見事にみんながストーリーを少し変えてアドリブで演じきった。

終った瞬間、ものすごい音の割れんばかりの拍手が巻き起こった。

梨々花はますます演劇部のみんなと仲良くなることができた。

でもこの体験が梨々花の人生を大きく変えることになるのだった。

梨々花は杏子という母親、江梨香という友達ができた。

包丁恐怖症や妄想の中の友達に逃げ込んでしまう心の病は治っていった。

しかし唯一治らない病気があった。

「里中先生！」

この間宿題のノートに挟んでおいた手紙読んでくださったのでしょうか？」

「伊万里、何度でも言ってるだろう？」

俺はお前のことは生徒としか見れないんだ。

それに私は結婚もしているし。」

「わかっています。」

でも先生のが好きです。」

「同じ年くらいの男子生徒が身の回りにいっぱいいるだろ。」

「同じ年の男の子にはなんの魅力も感じません。」

私は年が上の男性しか惹かれません。」

「とにかく、俺はお前とは先生と生徒としてしか関係は築けないから。」

梨々花の生物の教師里中先生に恋をした梨々花が先生にしつこくつきまとっていた。

それを偶然江梨香が知ってしまう。

二人のやり取りを聞いてしまったのだ。

「ねえ、梨々花は最近、元気よく、学校に行けている？」

麻紀乃の家に遊びに来ていた杏子はどんなに元気になって梨々花がやっぱり心配だった。

それで江梨香に梨々花が普通の子みたいに元気に学校へ行っているか心配して聴いた。

「おばさん。」

梨々花は演劇部に没頭して今すごく生き生きと輝いています。

すっかり社交性ができてクラスの友達もできたみたいだし。

でも一番仲がいいのはやっぱり私ですが。

友人関係では言うことないんですがただ……

「ただ？」

何か梨々花はまだ心配なことがあるの？」

「男性のことです。」

梨々花、歳がうんと上の男性が好きみたいです。

この間も生物の里中先生に言い寄っていて。

里中先生は15年上で結婚もされているのに。」

「そんな年上の結婚している先生に言い寄っているの？」

やっぱりその病気がまだ治ってないみたいね。」

「以前、中学の時の担任の先生がお父さんになってくれたけどそのお父さんに恋してしまっただけで言っていましたね。」

こればかりは好みがありますしね。」

私も梨々花には同年代の男の子に恋をして欲しいのですがね。

なんとか同年代の男の子に興味を持ってくれないかしら。」

「私も梨々花に同年代の男の子に興味を持ってくれるようにし向けるわ。」

そんなある日、演劇部の部室で、女の子ばかりで話していた。

三木先輩がアイドルや俳優の載っている雑誌を持って来たので、みんなでそれをめくって見ていた。

そこに、星崎勇人（はやと）という芸能界一の美男子と言われる男が載っていた。

三木先輩がはしゃいだ。

「きゃあ、勇人だあ。」

この角度かっこいいよね。」

江口先輩も一緒にはしゃいで言った。

「勇人はどの角度もかっこいいよ。」

こんなにかっこいい男いるのだよね。

我々と同学年かあ。

藤井とえらい違い。」

「俺と勇人を比べるなよ。」

俺は顔では勇人に負けているけど演技力じゃこいつに勝つしね。」

「実際に出会ったら緊張して何も話せないだろうね。」

江梨香は面食いじゃないし、藤井みたいなのがいいのよね？」

江梨香は何故か顔を真っ赤にして怒った。

「そんな言い方藤井先輩に失礼じゃないですか？」

それに私は自分では面食いだと思っています。」

「あつ、なんかその言い方、藤井に対しての愛の告白みたい。」

三木先輩がからかう。

「ねっ？」

なんだか藤井先輩の顔が好きですって言っているみたい。」

江口先輩も江梨香をからかった。

「もう、やめてくださいよ。」

顔が真っ赤な江梨香。

「梨々花はどうなの？」

星崎勇人みたいな人好き？」

「ほら、かっこいいでしょ？」

梨々花はじつとA4サイズの星崎勇人の写真を見つめた。
すると顔が真っ赤になったのだ。

「わぁ、梨々花、顔が真っ赤だ！」

江梨香が見る限りでは、梨々花は星崎勇人の顔を梨々花が好きみたいだった。

そう言えば里崎先生も先生の中で一番の美男子だし、梨々花は面食いみたいだった。
「うん。」

すごい美男子だと思う。

この人好み。」

やっぱり、星崎勇人は梨々花の好みみたいだった。

星崎勇人は梨々花や江梨香より1年上の高校三年生18歳だった。
アイドルでも俳優でもいい、梨々花に同年代の男に興味を持たせるいい機会だと思った。

江梨香は早速星崎勇人について色々調べた。

そしてその情報を梨々花に流そうとした。

「星崎勇人は現在高校3年生で18歳。」

11月1日生まれで蠍座のB型。

2月28日生まれでAB型の梨々花とは相性が合うわ。

出身は福岡県福岡市。

兄弟は妹と弟がいるの。

デビューは正義の味方「サファイアマン」で主役。

その後、NHKの朝の連続テレビ小説でヒロインの初恋の人を演じて大人気となり、
今やドラマやCMで引っ張りだこ。

CMの本数は今の若手俳優で最高。

ドラマも2クールに1回は主演をしている大人気俳優。

若手俳優一の美男子と言われているの。

お化け屋敷が大の苦手。

好きな食べ物、がめ煮。

嫌いな食べ物、グリーンピース。

好きな女性のタイプは勉強のできる人。

これ、梨々花じゃない！

梨々花と勇人が同じクラスだったら恋が芽生えていたかもね。

噂によると、82円切手を入れて、ファンレター書いたら、返事をくれるみたいだよ。梨々花の写真を入れて送ったら？」

「えー！

私なんてすごいブスだって思われるだけだし。

それに送ってくる子いっぱいいると思うし。」

「そんなことないよ。

梨々花は自分が思っている以上に美人だし華やかだよ。

梨々花の演技見たら、勇人びっくりすると思うよ。」

「えー！

こんなにかっこいい人に、私の演技なんて見てもらうの？

絶対に嫌よ！

わあ、考えただけで恥ずかしい！」

梨々花が同じ年ぐらいの男の子のことでこんなにはにかむのは珍しい。

江梨香の作戦は成功していたみたいだった。

その調子で毎日江梨香は梨々花に勇人のことでわかったことがあったら教えた。

ある日、梨々花の定期入れが落ちた。

それを江梨香が拾った。

すると、定期入れに勇人のブロマイドが入っていた。

江梨香の作戦は大成功みたいだった。

このことを杏子に話すと杏子は名案を思い付いた。

「もうすぐ、梨々花の誕生日でしょ？

その日に家に勇人君に来てもらって、二人っきりの誕生日パーティーをしてもらうのよ。

私、昨年の秋に、勇人君のドラマの脚本を書いたことあったのよ。

その時に演技指導をしたことがあって。

一緒に仕事をしているのよ。

だから、このサプライズに多分、協力してくれると思うわ。」

「わあ、憧れの俳優さんと二人っきりの誕生日パーティーだなんてなんて素敵！

おばさん、魔法使いだね。」

「魔法使い？」

「そうじゃない！」

まるでシンデレラに出てくる魔法使いみたい！

王子様とデートさせてくれるなんて。」

「私に、もしもそんな魔法が使えるのならあの子の願いは何でも叶えてあげたいの。いつもお姫様になりたいのに、ずっとなれなかった可哀想なあの子のためにね。

私しか使えない魔法を使つてあの子を幸せにしたいの。」

そして梨々花の誕生日、2月28日がやつてきた。

その日は

杏子はわざとその日は仕事があるとそっけなく家を出て行った。

敢えて梨々花に誕生プレゼントも渡さないで。

そして江梨香も梨々花に誕生日プレゼントも渡さなかった。

おまけに江梨香も用事があると言つて家に来なかった。

せつかく家族も友達もできたのに寂しい誕生日となった梨々花。

そして、梨々花の部屋に戻ると、梨々花はびっくりしてしまった。

『梨々花、お誕生日おめでとう！』という看板が貼つてあった。

可愛い色紙で作られた輪の飾りも付いている。

そして机の上に大きくて可愛いプレゼントの箱が置かれていた。

メッセージがあった。

「梨々花、17歳のお誕生日おめでとう！」

私からの誕生日プレゼントです。

その服を着て、リビングで待っているといいことがありますよ。」

箱を開けると、すごく可愛いピンクのセーターと白いスカートが入っていた。

可愛いセーターは白い襟になっていて、襟に可愛い花の飾りのボタンがいっぱい付いている。

スカートは白地にピンクの花模様でこれもすごく可愛い。

杏子に言われたように、杏子からのプレゼントの可愛い服に着替え、リビングで待っていた。

すると玄関のチャイムが鳴った。

急いで玄関に出て、鍵を開けると、びっくりするような人が立っていた。

「あ、あなたは！」

「初めまして、星崎勇人です。」

梨々花さんですね。

お誕生日おめでとうございます。

今日はあなただけのために誕生日パーティをさせてもらうためにこちらへ来させていただきました。」

あつけにとられる梨々花。

「どうぞ。」

というのがやつとだ。

「失礼します。」

段々、これは杏子の誕生日サプライズだと言うことがわかってきた。

こんな誕生日プレゼントをくれるなんて。

杏子はまるで魔法使いみたいだと思った。

「お皿はどちらにありますか？」

チキンを持ってきました。

後、パスタも。

パンもサラダもスープもあります。」

梨々花は急いでお皿の用意をした。

すると手際よく勇人は、チキン、パスタ、サラダ、スープ、パンとお皿に入れた。

「誕生日ケーキも持ってきました。」

そう言って、誕生日ケーキを可愛い箱から取り出した。

『梨々花ちゃん、17歳のお誕生日おめでとうございます』

と書いたチョコレートの板が付いていた。

そして苺づくしの可愛い誕生日ケーキになっていた。

「この誕生日ケーキは俺からのプレゼントです。」

俺がこのメッセージを考えた。」

ちよつと照れながら勇人が言った。

あの星崎勇人が自分に照れるなんて。

そして自分のためにケーキをプレゼントだなんて。

ますます、ドキドキする梨々花。

「私のためにそこまで。」

本当になんてお礼を言ったらいいのか？」

「さあさあ、いいからいいから。」

ろうそくに火をつけて、お祝いしようよ。」

梨々花は17本のろうそくを立てた。

そして吹き消した。

「誕生日おめでとう！」

梨々花ちゃん。」

勇人が眩しい笑顔で梨々花に言う。

本当になんて美男子なのだろう。

こんなに美しい男の子初めて見たように思う。

梨々花が憧れて恋した年上の先生たちも美男子ばかりだったがこんなに美しくはなかった。

本当にすごい美男子なのだ。

その若手俳優一の美男子が梨々花のためだけに誕生日を祝ってくれると言うのだ。

まだ未だに信じられなかった。

最近江梨香が異様に梨々花に勇人を薦めるので段々、梨々花も勇人が好きになっていった。

でもまさか、自分のためだけに今日誕生日パーティをしてくれるだなんて夢にも思わなかった。

「今日は、もう一つ、梨々花ちゃんにバースデイプレゼントがあるんだ。」

これ受け取って。」

「えっ！」

私にプレゼントですか？

そこまでしていただいていいのですか？」

「さあ、開けて開けて！」

梨々花は渡された長細い箱を受け取り、包装紙をはがした。

そしてパールの長細い箱を空けた。

「可愛い！」

思わず声をあげてしまった。

細長い箱の中身は。

ウサギ、ハート、花の飾りの付いた、可愛いブレスレットだった。

「こんな可愛いもの。」

私、すごく嬉しい。

私、こんなに素敵な誕生日初めて…」

そう言って、梨々花は感極まって泣き出してしまった。

「ほらほら！」

泣かないで。

梨々花ちゃん、せっかく可愛いから。

泣いたら台無しだよ。

ほら、ブレスレット付けてみて。」

梨々花は泣きながらブレスレットを付けた。

「わあ、今日の服装にもすごく合っているよ。」

すごく似合っていて可愛いよ、梨々花ちゃん。」

憧れの勇人から似合うだとか可愛いだとか言われて照れる梨々花。

「私、これ一生大切にします。」

ありがとうございます。

勇人さん。」

「気に入ってくれましたか？」

「すごく気に入りました。」

「じゃあ、食事に行きましょうか？」

そうして勇人と向かい合って食事した。

食事も高級料理だったみたいですすごく美味しかった。

ケーキも甘くて香ばしくて美味しいケーキだった。

その間、勇人は、撮影現場の裏話を色々聴かせてくれた。

「俺、ジェットコースターとかは大好きなんだけど、お化け屋敷だけは苦手だね、心霊とかだめだ。」

でも一度撮影でお化け屋敷に入るシーンがあつて。
平常心を保つのが大変だったよ。」

梨々花は勇人の話に大笑いして聴いていた。

勇人は美男子だし話してみてもこんなに面白い人だと思ってなかった。

もつと話し辛い人だとばかり決めつけていた。

ずっと話していて、梨々花と勇人は同年代ということもあり、すっかり打ち解けて仲良くなった。

そして近くで見るとすごい美しさ。

ますます梨々花は勇人に惹かれていく。

父親になってくれた先生ともまた全然違う勇人への思い。

梨々花が好きになる人はいつも先生で、奥さんがいて。

いつも梨々花が恋をするたびに罪がつきまとった。

でも勇人への恋心は全然違う。

すごく健全な恋心なのだ。

勇人のことを思うと清々しい気持ちになる。

今まで先生のことを思うと、心の奥底にドロドロとしたヘドロが流れていた。

そして失恋するたびそのドロドロがたまっていた。

梨々花はもう二度と戻れないくらいに心がドロドロで汚くなっていくような気がしていた。

でも勇人を思うたび、その心の奥底のヘドロが綺麗に掃除されていく。

「梨々花ちゃん。

今日は楽しかったよ。

俺も楽しませてもらえた。

梨々花ちゃんって美人だから、とっつきにくい女の子なのかなって第一印象で思ったけど。

すごく話しやすいね。

誤解して悪かったね。」

「勇人さんこそ、美男子だし、きっとこの人はとっつきにくい男の人だと決めつけていましたよ。

でも面白い人だって今日、知りました。」

二人で顔を見合わせて大笑いした。

「梨々花ちゃん、また会えればいいんだけど、俺も忙しくって。

また機会があればその時も今日みたいに話してね。」

「勇人さん、今日は私なんかのためにこんなサプライズありがとうございます。」

「俺は、夢を売る商売しているし、こういったパーティーはお手の物だよ。」

俺で良ければ毎年来るよ。」

「毎年、来てくださるのですか？」

「梨々花ちゃん俺を嫌いにならない限りはね。」

「そんな、勇人さんを嫌いになったりしません。」

梨々花はちよつとがっかりした、

夢を売る商売なのでこういったパーティーはお手の物という言葉。

梨々花が脚本家、伊万里杏子の娘だったからサプライズパーティーに来てくれたのだ。

そんな縁がなければ自分なんかには見られなかった夢。

でも来年も来てくれるという言葉ですごく救われた。

梨々花はその時思った。

来年の誕生日まで勇人に会えないと。

でも違っていたのだ。

梨々花と勇人は不思議な縁で繋がっていく。

ある日梨々花が演劇部の練習を終えて帰ろうとした時のことだった。

見知らぬ 40 代くらいの男性が梨々花に声をかけてきた。

「君が噂の天才女子高生か。」

YouTubeで君の演技がアップロードされていて。

この学校の誰かが投稿したみたいだよ。

それをこちら側で見せてもらって、その演技力にびっくりしてしまって。

私は芸能プロダクションの者です。

ルミ芸能企画というプロダクションのスカウト担当の塚本です。

今から時間があれば色々お話させていただきたいのですが。

お時間よろしいでしょうか？」

梨々花は塚本と一緒にカフェに行った。

「演劇部のあなたの演技を見せてもらいました。

すごい迫力にただただびっくりして。

下手な女優より表現力があるよ。

ただちよつと大げさになりすぎる癖があるのでそれを直さないといけないけど。

今度、脚本家、伊万里杏子先生の作品『新源氏物語』の主人公の幼馴染の女の子の役を今募集しています。

是非、梨々花さんにもそのオーディションに参加いただいたく思い、今日は来させていただきました。

梨々花さんのお母さんの作品ですよ。

もちろん審査員にはお母さんである伊万里先生もいらっしゃいます。

でも公正なオーディションをさせていただきます。

あなたの実力ならその座を射止めることも可能だと思います。

いかがですか？

一度お家に帰りお母さんと相談してくださいでも結構です。」

梨々花は今まで日影を歩いてきた自分がドラマだなんてそんな大舞台に立てるかも知れないので自分でびっくりしていた。

「梨々花、話があるわ。

今日、ルミ芸能企画の塚本君と会っていたでしょ？

そのことで私からも話があるわ。」

梨々花と杏子は今後の梨々花の人生について話をすることにした。

「梨々花の演技はルミだけじゃなくて今色んなプロダクションの間でも話題になっているの。

私も学園祭で梨々花の演技を観たけどやっぱりすごかった。

声量、表現力、動作どれを取ってもすごい素質があるわ。

でも敢えてそれを言わなかったのは芸能界のことを私が深く知っているから。

芸能界は甘くないわよ。

私はそれを知っているから極力、梨々花を芸能人にさせたくなかったの。

梨々花はせっかく友達もできて、明るくなって、学校へ行くのも楽しくてしょうがなくなっているのに。

芸能界の荒波に飲み込まれてまた元の梨々花に戻ってしまったら、今度こそ梨々花は立ち直れなくなるかも知れないと思ってね。

梨々花はどうなの？

テレビの世界のドラマでも演じてみたい？」

「私も急なことでびっくりしているの。」

私みたいな人間があんな華々しい場所に行けるかも知れないなんて。

本音を言えば、ドラマにチャレンジしてみたいわ。

今演技をするのが楽しくて仕方がないの。

より多くの人に私の演技を観て欲しいという欲が芽生えて。」

「じゃあ、ドラマのオーディションを受けたいと言うのね。」

梨々花がどうしてもドラマに出たいのなら私は反対はしないわ。

でも覚悟しておいて。

すざましい世界だってことだけは肝に銘じておいて。

そしてどんな小さな悩みでも私に打ち明けてくれることだけは約束して。

私はあなたを一生全力で守るしね。」

「わかったわ、お母さん。」

ありがとう。

私はこのドラマはお母さんの脚本だから出たいのもあるの。

私、お母さんの書く脚本大好きだし。

今から、その『新源氏物語』読んでみるね。」

梨々花がオーディションを受ける「新源氏物語」は杏子が持っていたので読み始める。

こんなストーリーだった。

大会社の社長の息子、大谷茂人（しげひと）はわずか1歳で生母の房江を亡くす。

茂人は母親の愛を知らずに10歳となる。

茂人は10歳の時に、父親が茂人とわずか10年しか離れていない20歳の美里と結婚する。

美里は生母にそっくりと言われている。

母親の愛を知らない茂人は美里を本当の母親のように慕うようになる。

茂人と美里はまるで姉と弟のように仲良く遊ぶようになる。

茂人は成長すると同時にやがて一人の女性として美里を愛するようになる。

しかし茂人には父の友達の社長の令嬢の由香子という許嫁がいた。

しかしプライドが高く、きつい性格の由香子を茂人はどうしても好きになれない。

由香子といっても柔らかい心を持った美里のことを考えてしまう。

やがて茂人は父親の会社の将来のこともあるので、由香子の家に住まなければならない。
くなる。

由香子と夜を過ごしても美里のことばかり考えてしまう。

ある日、由香子とあまり打ち解けられないので、息が詰まってしまい、茂人は一人夜の街に繰り出す。

高級ナイトクラブで遊んでいたら、瑠眞（るま）という10年年上の美人のホステスと出会う。

10年年上ということは美里と同年なので瑠眞に惹かれる茂人。

瑠眞と一晚過ごしてしまう。

やがて茂人は妖艶な瑠眞に惹き込まれていく。

瑠眞はSEXも経験豊富なのではまり込んでいく。

最初は茂人がはまり込んでいったがやがてそれ以上に瑠眞が若くて美しい茂人にはまり込んでいく。

情念があり美人で妖艶な瑠眞が自分に夢中になるので茂人はこの恋が面白くてたまらなくなる。

高級クラブには父親や由香子の父の会社の人が来ていたのでやがて茂人が浮気していることが父親の耳に入る。

茂人と由香子の通う学校はお嬢様、おぼっちゃんの学校だ。

同窓生も父親や由香子の父親の会社の役員の娘や息子ばかりだ。

瞬く間に茂人が高級クラブのホステス瑠眞にはまり込んでいることが噂になる。

由香子は友達に冷やかされて、恥ずかしさとショックで発狂してしまう。

さすがに由香子に悪いと思って由香子を思いやる茂人。

でもまずまず由香子は殻に閉じこもってしまい、二人の間の溝が深くなる。

由香子といると息が詰まりそうなので、高級クラブに逃げる茂人。

そこに由香子が現れ、瑠眞と大喧嘩をしてしまう。

瑠眞も由香子に対して嫉妬をし、茂人を追い詰める。

瑠眞といても由香子といても息が詰まる茂人は、また街を歩く。

今度はさびれたスナックへ行った。

そこには天使のような美しい歌声のホステスがいた。

その歌声を聴いていると瑠眞のことも由香子のことも忘れてしまう。

その歌声を聴いていると遠い世界に連れて行ってくれるのだ。

その女性は瑞恵（みずえ）と言った。

瑞恵の声に惹き込まれ、気がついたら、瑞恵と同じベッドで眠っていた。

枕もとで瑞恵が美しい歌を歌ってくれていた。

瑞恵は膝枕をしてくれた。

あの美しい歌を歌いながら。

次第に瑞恵のところばかり来ることになる茂人。

でも瑞恵は誰にでも優しく、他の男とベッドを共にすることもしばしば。

瑞恵の柔らかな優しさは美里とすごく似ていた。

歳は茂人より8年年上。

瑠真や由香子は気位が高く休まることがなかった。

でも瑞恵は柔らかくて優しく温かくて。

瑞恵といると、美里といるみたいで心が安らぐ。

瑞恵は茂人にとってかけがえのない存在となった。

でも瑞恵は他の客と心中をしてしまう。

失意の茂人は実家に帰った。

美里にすぐ会いたくなった。

ちやうど父親がいなかった。

茂人は美里に強引に体の関係をせまる。

そして美里は茂人の子どもを身ごもってしまう。

茂人は梅という使用人を雇っていた。

その梅には絵美（えみ）という娘がいた。

茂人とは幼馴染だった。

絵美は茂人の理解者だった。

でもあまりに平凡過ぎる絵美に女としての魅力を感じなかった。

絵美は小さな頃から茂人に恋していた。

絵美の片思いだ。

でも茂人は唯一絵美という時だけ心が安らいだ。

同い年の女の子より純情可憐な絵美。

瑞恵を亡くしてからやけになり、とっかえひっかえ色々な女の人と付き合う茂人。

このままでは茂人はだめになると思った絵美は茂人に年相応の恋愛をさせようとする。自分の愛で、茂人を普通の男の子にしようと頑張るという話だ。

梨々花はその絵美の役のオーディションを受けるのだ。

絵美は一番大事な役だ。

社長令嬢のお嬢様、何もかも兼ね備えた母親、高級クラブやスナックのホステスの女性。

そんなすごい人たちとまだ高校生なのに恋をした男、茂人。

それをバージンで普通の女子高生の絵美が、百戦錬磨の茂人に挑むのだから。

梨々花はこの話がすごく好きになった。

絵美にも感情移入ができる。

梨々花は絵美のセリフを毎晩練習した。

やがてオーディションの日がやってきた。

絵美の役だけでも五百人の女の子がオーディションにやって来た。

どの子もスタイルが良くて可愛い女の子ばかり。

まず、面接があった。

面接はこんな会話がなされた。

「26番伊万里梨々花です。」

「座ってください。」

突然質問しますが、あなたは今まで何人の男性とお付き合いされましたか？」

「私はまだ誰とも付き合ったことはありません。」

「高校2年生ですよね？」

まだ誰とも付き合ったことがないですか？」

「本当ですか？」

「ありません。」

「では初恋はいつでしたか？」

そしてどういった男性でしたか？」

「中学校1年生でした。」

相手は担任の先生でした。」

「ほう、純情ですね、伊万里さんは。」

面接官が何かを考えながら笑った。

「もし彼ができたらどんなデートをしたいですか？」

今度は母親である杏子が梨々花に質問をした。

普段会話をしている杏子とこんな形で会話するのは変な感じがした。

「映画とかカラオケだと相手のことがわからないので、嫌です。

私は恋をすると相手のことをもっと知りたくなるので。

だから公園のベンチでデートとかがいいですね。

好きな人と公園のベンチでたわいのない話をするのが夢です。」

「ぶっ。

公園。」

杏子はケラケラと笑い転げた。

他の面接官も大笑いだ。

「では、面接はそこで終わりです。」

笑いをこらえるように面接の代表の男性が言った。

その後は、「新源氏物語」のワンシーンを演じるというオーディションがあった。

そのシーンは杏子から渡された脚本にないシーンだった。

絵美が茂人から自分の弟秦（しん）は実は自分の息子だということを聞かされるシーン。

「実は俺の弟秦は俺の弟じゃない。

俺の息子だ！

俺はこんな汚れた人間だ！

俺の心の中にも体の中にもドロドロとした性欲が湧いてきて。

抑えたくても抑えたくてもどうしようなくて。

お母さんと恋愛したくて恋愛したくて。

あの美しい顔も、体も全部俺のものにしたくて。

それを抑えようとすると、他の女と手当たり次第やりたくなる。

心も体も他の恋を求めようとする！」

「茂人！

目を覚まして！

あなたこんなことをしていたら、茂人の心も体もボロボロになっちゃう。

二度と普通の恋ができなくなっちゃう！

お願い！

私を見て！

私小さい頃からずっと茂人だけを好きだったの！

だから私と付き合って！

私が教えてあげる！

茂人に本当の恋を教えてあげる！」

「無理だ！

お前みたいなバージン、俺は何の魅力も感じない。

俺にお似合いなのは百戦錬磨の女だけだ！

俺はSEXつてものが前提じゃないと恋ができない。

俺は13歳からSEXを知っていて。

13歳から許嫁の由香子と一緒に部屋で眠らされて。

それに10年も年上的高级ホステスに女を教えられて。

だから、SEX抜き恋愛なんて俺にはできないよ！」

「私と一緒に付き合おう！

二人で公園へ行こうよ。

二人でおしゃべりしたり、バドミントンしたり。

青空の下でデートしよう。

茂人に足りないのは青空よ。

青空の下で正々堂々と付き合うこと。

それがどんなに楽しいことなのか知らないのよ。

だからお願い、私と付き合って。

私と付き合ってよ！

茂人！」

憧れの勇人が自分の誕生日パーティをしてくれて。

あれからずっと梨花花は勇人に恋していた。

それがあったから梨花花の中では、茂人が勇人になっていた。

これがもし勇人だったら。

私はなんとかして勇人を立ち直らせるだろう。

そう思って迫真の演技をした。

梨々花の演技が終わったら。

すごく長い間があった。

審査員もあまりの梨々花の演技にびっくりしているように思った。

審査結果は審査員満場一致で梨々花に決まった。

公園でデート。

みんなが笑ったのはだからだった。

絵美のセリフの中でもし茂人が彼氏になったらどんなデートをしたいかというセリフがあった。

公園でデートしたいと絵美も言っていたのだ。

これは偶然だった。

あまりの偶然に審査員みんなが大笑いしたのだった。

杏子も自分の娘じゃなくても、梨々花を選んでいたと思った。

杏子も五百人の中から絵美を見つけたのだ。

絵美はこんな身近にいた。

更にこの後の配役発表で奇跡は起こる。

配役が発表になった。

由香子の役はみくにという個性派閥女優。

梨々花と同じ年だ。

瑠真役はグラビアアイドルでセクシー派女優の廣崎レイナ。

そして茂人の役は星崎勇人になった。

監督は江口明監督となった。

江口監督は梨々花に言った。

「梨々花、友達役の須藤裕子と仲良くなっておくように。

友達と無邪気に笑うシーンも絵美の天真爛漫なところを表現する上で大事だから。しばらく裕子と一緒に行動するように。」

梨々花は化粧室で偶然裕子と隣の場所になった。

早速こちらから裕子に話しかけてみた。

「須藤さん、初めまして。

伊万里梨々花です。

須藤さんはよくテレビで見えています。

私はドラマのことまだ何も知りませんから、どうぞ色々教えて…」

「ちよっと待つてよ！」

梨々花がそこまで話したら裕子が遮った。

「私、絵美の役のオーディション受けたのよね。
でも落ちたの。」

だから機嫌悪いの。

なのに私があなたに色々教えるなんてしたくない。

私に話しかけないでくれる？

どうせ親のこねで絵美の役を獲得したのでしょ？」

梨々花はあつけにとられた。

こんな女優と仲良くしないといけないのか。

「それと、主演の勇人だけど、私たち、付き合っているからね。

勇人のイメージってものがあるのよ。

私クラスじゃないと勇人のイメージが悪くなるしね。

お互いの事務所が付き合うことを認めているの。

勇人の事務所も私だから許しているの。

だからあなたなんか入る余地ないしね。

これだけは言っておくわ。」

須藤裕子はテレビでは優しそうで可愛くて。

こんな女の子だなんて思ってもいなかった。

梨々花は気を取り直して、みんなが演技の練習をしている部屋に行った。

張り切り過ぎて早く来すぎたみたいだった。

まだ誰もいないみたいだった。

またあんまり早くいると誰かに怒られたら困ると思い、化粧室に戻ろうとした。
すると、誰かが入って来た。

梨々花は咄嗟に机の下に隠れた。

「勇人、今度はいつ会えるの？」

「今夜会いたい。」

毎晩でも会いたいよ。」

廣崎レイナと勇人だった。

そして二人は情熱的にキスをし、抱きしめ合った。

「勇人は可愛いわね。」

こんなこと裕子ちゃんに知れたらあの子びっくりするわね。」

「裕子なんて、本当に付き合っているわけじゃない。」

俺のイメージ戦略とかわけのわからないことを言っ、事務所が勝手にくつつけているだけで。

俺が心から好きなのはレイナさんだけだ。」

「可愛いこと言ってくれるわね。」

今晚、来てもいいわよ。」

「毎晩だって会いたいよ。」

裕子といても全然気が晴れない。」

そしてまた二人は熱いキスと抱擁をする。

梨々花は頭が混乱した。

だから頭で整理した。

裕子と勇人は偽の恋人同士。

勇人が本当に好きなのはレイナさんで、レイナさんと勇人が本当に付き合っている。

「私裕子ちゃんより、絵美役になった梨々花って子の方が気になる。」

私と違って若くて、可愛くて。

梨々花ちゃんに勇人を取られたらなってその方が気になる。」

「あんな純情過ぎる女の子、俺は何の魅力も感じないな。」

あまりにはつきり自分のことを否定されたので、梨々花は思わず机に頭をぶつけてしまった。

「梨々花ちゃん。」

机の下に隠れていたことをレイナと勇人に見つかってしまった。

このセリフ。

「新源氏物語」と全く同じセリフだった。

「失礼します。」

梨々花は自分がしたことが恥ずかしくなり立ち去って行った。

「驚いたでしょ？」

芸能界はこんなところよ。」

女の子の声がした。

後ろを振り向くとみくにが立っていた。

「あなた、すごい演技するわね。」

YouTubeで見せていただいたわ。

やっと私にも同年代のライバルができてやり甲斐を感じているの。

この由香子の役にかけているの。

これで世間に認められたい。

私は主演女優賞より助演女優賞を将来取りたいと思っているの。

名脇役女優を目指しているの。

だから共演するハンサム俳優なんて全然目じゃなくて。

純粹に演技をすることにだけ生き甲斐を感じていて。

だから安心して演技に集中してくれていいわ。

裕子も勇人もレイナさんも、勝手にやってって感じ。

でも勇人とレイナさんの複雑な関係。

あなたは演じやすいじゃない。

本音をぶつけばいいしね。」

「私は別に、勇人さんのことなんて。」

「隠さなくてもわかるわ。」

私はそういうとこ鋭いしね。

あなたわかりやす過ぎるから注意した方がいいわ。

女優なのだから普段から演技しないと。」

「芸能界ってすごいところですね。」

「友達ができにくいところではあるわね。」

私は純粹に演技を愛している女優さんなら友達になりたいけど。

みんなハンサム狂いの馬鹿ばかりで。

ちよっとハンサムとお近づきになれると思うとそいつに媚びばかり売って。

本当、演技が好きといえ、つまらない世界に入っちゃったな。」

「私、さっきのことだけでびっくりしてしまっただけでショック受けてしまっただけ。」

こんなじゃこれから先大丈夫かなって思いました。」

「私の友達になってくれない？」

あなたは少なくとも普通の感性の人間みたいだね。

意外にこの仕事している人で普通の感性を持っている人、少ないのよ。

みんな芸能人、芸能人していて。

あ、私、須藤裕子には嫌われているしね。

私もあの子一番大嫌い。

以前も一緒に共演して、あの子の我儘に、スタッフも出演女優、俳優全員振り回されて、散々だったの。

私も思い描いた作品が作れなくてすごいジレンマだったし。

あの子はすごい芸術作品作ろうという考えはないのかね。

その点あなたは早くから来て、張り切っているみたいだし。

裕子みたいに男に媚びるための化粧で早く来ているわけじゃなさそうだしね。

この作品がいい作品になるかどうかはあなたと私次第なの。

由香子と絵美の対決なのよ。

由香子の役作りは皮肉にも裕子からヒントを得ているけど。」

由香子の役作りが裕子？

梨々花は何だかおかしくなって笑ってしまった。

由香子という役が演技に真面目なみくにとかけ離れていて、実際は裕子に似ているから。

「可笑しいでしょ？

私も笑えてきて。

由香子の演技に行き詰まったら裕子をお手本にしようと思うの。」

そう言ってみくにも大笑いした。

梨々花とみくには二人とも笑いが止まらなくなった。

そこにちようと裕子を通った。

「あなたたち、何を笑っているの？」

裕子は二人の会話を聞いていなかったみたいだった。

それが可笑しくてまた梨々花とみくには大笑いした。

こうして梨々花はみくにと仲良くなった。

江口監督は梨々花に勇人とも共演するのだから二人きりで話をするようにと言われた。よく二人で話し合うようにと急に狭い部屋で勇人と二人つきりにさせられた。

「梨々花ちゃん、久しぶり。」

ずっと俺、梨々花ちゃんのこと考えていた。

俺、どれだけ会いたかったか！」

嘘ばかり。

レイナさんに一番会いたい癖に。

梨々花は不機嫌になってぶすつとした顔をした。

「おや？」

俺、何か梨々花ちゃんを怒らせることをしたかな？」

「レイナさんにそういう台詞を言われたらどうですか？」

「あれ？」

梨々花ちゃんにも知られていたのか？

俺もうまくやらないとな。」

そう言っつてふざける勇人。

「梨々花ちゃん、まだ誰とも付き合ったことないんだって。

これはいけないね。

彼氏つくれないと。

演技に幅が出ないよ。

ひよつとしてまだバージン？」

梨々花は咄嗟に勇人の頬をぶつてしまった。

「痛いっ。」

凶星か。

それじゃあ、たいした演技できないよ。

やっぱり演技にSEXは必要だよ。

その調子だとキスもまだか。」

梨々花がまた頬をぶとうとしたら勇人は梨々花の両手を掴み、強引にキスをした。

「ちよつと、な、何をするの？」

「ひよつとして初めてだった？」

「は、初めてよ。」

キ、キスなんて私、したことなくて。

私、初めてだったのに。

こんなファーストキス：」

梨々花は号泣してしまった。

「梨々花は俺が好きだっただろ？

じゃあ、好きな相手とファーストキスなんて良かったじゃないか。中々、好きな男とファーストキスなんてできないぞ。」

「あなたみたいなプレイボーイ、大嫌いです！」

梨々花はそう言って部屋を飛び出した。

梨々花の誕生日のサプライズの時、優しい王子様だった勇人。

あれは王子様を演じていたのだ。

梨々花がどんな王子様を演じたら喜ぶか役者の勘でわかっていたのだ。

それなのに、あれが素の勇人だと思い込んでいた。

梨々花は本当の勇人を知って、勇人が大嫌いになってしまった。

いよいよドラマの撮影が始まった。

先に撮影に入るのは勇人とのシーンばかり。

こんなシーンがあった。

「うぜえよ！」

俺のことなんて放っておけよ！

お前もちよっとは色っぽくしてろよ！

だからお前はいつまでたっても彼氏ができないのさ。」

これは勇人の演じる茂人のセリフだ。

まるで梨々花本人のことを言われているみたいで、梨々花は泣き出してしまった。

この間、勇人に唇を奪われ、ひどいことを言われたことを思い出してしまって。

「カット、カット！」

そこ泣くシーンじゃないだろ？

絵美は強い女性だ！

多分登場人物で一番ひどい言葉を茂人から言われる役だ。

最初は絵美を唯一、女としてしか見ないからな。

だからどんな暴言を吐かれても言い返すぐらいの強さがないとだめだ！

もっと強くなれ、梨々花！」

梨々花は強くなろうと頑張って演技した。

でもだめだ。

自分の思い描いていた勇人が全然別のタイプの人間だとわかり、そのショックから立ち直れない。

「ああ、気の強い絵美がそんな弱気な表情じゃ。

今日は、梨々花はもう帰っていい。

頭を冷やして、明日出直してこい！

勇人ももう帰れ！」

梨々花が泣きながら帰り支度をして家に帰ろうとしたら、肩を叩かれた。

振り向くと勇人がいた。

「焼肉でも食べに行かない？」

無邪気な笑顔で勇人が言った。

梨々花はやけっぱちになっていたので勇人と焼肉を食べに行くことにした。

それは梨々花のような普通の市民には縁遠い高級焼肉店だった。

店に入るとみんな勇人に挨拶をする。

「俺、ここの常連さ。」

今までさまざまな女優さんとここでデートしたものだ。」

そう言って勇人はウィンクした。

勇人はカルビを慣れた手つきで焼きながら話だした。

「焼肉って不思議だよな。

どんな女優さんでも素になるし。

まっ俺が女優さんを裸にするのが得意なのかも知れないけど。

心も体もね。」

「言っておきますが、私はあなたなんて大嫌いですからね。」

「みんな最初はそう言うよ。

その台詞今まで何度言われたことか。

でも最後にはみんな本当の俺も好きになるね。」

「私、恋愛に対しても慣れた人大嫌い！」

「梨々花は今までどんな男に恋したことがあるの？」

梨々花なんて突然呼びつけにされて顔が真っ赤になった。

「わ、私は中学校の担任の先生とか。

今まで好きになった人、10年くらい年上ばかり。」

「それ何故だと思う？」

自分で考えたことなかった？」

「何故って、大人の男の人って落ち着いているし。」

「恋愛から逃げているよ、梨々花。」

自分ができるだけ傷つけられたくないから、同年代との恋愛を避けているんだ。」

「傷つけられたくないから？」

私が恋愛から逃げている？」

凶星だった。

「梨々花はよっぽど思春期に辛いことがあったな。」

いや、そのずっと前からか。

とにかく、人一倍もうこれ以上傷つけられたくないと思っっているはずだ。」

これも凶星だった。

この勇人という男、ただのプレイボーイじゃない。

ただものじゃないとわかってきた。

「梨々花のあのサプライズバースディパーティの時から俺はわかっていた。」

俺が演じたのは江梨香より10年くらい年上の男だった。

あのご馳走はお母さんがお金を払ってくれたけど実際に料理を選んだのは俺だ。

バースディケーキのデザインも俺。

そしてもちろんウサギのブレスレットを選んだのも俺。

梨々花ちゃんが男慣れしていないこともわかっていたので先に先にエスコートもした。

梨々花ちゃんが困らないように先回りして。

この子は、本当に誰とも付き合ったことなく、恋愛対象も大人の男だになってすぐにわかったよ。

俺が得意なタイプの女の子だったよ。」

「そんな、あのバースディパーティが演技だったなんて。」

梨々花はまた泣きそうになった。

「強くなって梨々花！」

梨々花が演じるのはそんなことで泣いたりしない強い女だ。
恋愛経験豊富で恋愛巧者の茂人が唯一頭の上がない女だ。

男という動物の汚さ、もつと知らなきゃ。」

「男という男がみんなあなたみたいな態度取らないわよ！」

「梨々花は何もわかってないね。」

男がみんな俺ぐらいのルックスだったら、みんな俺みたいな行動を取るよ。
突然キスをする。

わざと傷つけるようなことを言う。

俺は立場上そこまでは敢えてしないけどSEXだってするだろう。

みんな自分の容姿に自信がないから俺みたいな態度取らないだけで。

梨々花は段々と腹が立ってきた。

「よくそんな思い上がったこと言えるわね！」

ちよつと自分の容姿がいいからって！

あなたが自分が思っているほどハンサムでもないわよ！

私が好きになった先生の方がよっぽどハンサムだったわよ！」

「俺ぐらいのクラス、そういないよ。」

こんなハンサムとキスできたこと感謝しろよ！

梨々花も今まで誰ともキスできずに欲求不満だったろ！」

梨々花は思わずコップの水を勇人の頭からかけた。

焼肉屋の店員さんは面白そうにこちらを見ていた。

「なんだよ！」

本当のことじゃないかよ。

世の中の女どもはハンサムとだけキスしたいんだろ！」

「あなたなんて少しもハンサムじゃない。」

心が汚いからハンサムに見えない！」

「俺、初体験は中学１年の時さ。」

「そんな話聴きたくない！」

「俺は共演相手には俺をわかってもらうために何でも話す主義だ。
黙って聴け！」

「奇しくもこの小説の茂人と同じだ。」

このドラマの男の審査の時には、自分の初体験の年齢とどんなシチュエーションだったかを聴かれるよ。

それがあまりにも俺と一緒にびっくりした。

俺、梨花の逆で母親の愛情に飢えてずっと生きて来たんだ。

話が長くなるが聴いてくれ。

俺のおやじとおふくろは俺が幼稚園の年長組の時に別れている。

子どもにとって最もおふくろにいて欲しい時に、おふくろは俺から去って行った。

俺がおふくろに連れられてデパートに行ったときだった。

デパートの遊技場でアンパンマンの電車に乗っている時に、おふくろは俺から去って行った。

いつも俺、デパートでアンパンマン電車に乗りたがっていて。

そして電車から母親が見えると手を振って。

それが至福の時だった。

でもあの時おふくろは手を振って去って行った。

一目もはばからず泣いていたおふくろ。

あれが俺の見たおふくろの最後の姿だった。

急いで電車を降りておふくろのいた場所に行ったけどおふくろはいなくて。

代りに親父がいた。

親父は俺を抱きしめて泣きながら言った。

『もうお母さんは戻って来ない。

すまん、勇者。』

未だに俺は覚えている。

泣きながら手を振ったおふくろの最後の姿を。

それ以来俺はおふくろに会っていない。

それ以来俺はおふくろの愛に飢えて、年上ばかり好きになった。

おふくろと同じ年の女と付き合ったこともある。

そして俺が一番好きになった女は。

誰だと思う？」

「レイナさん？」

「レイナには悪いけど、全然違う。

その相手はおやじの再婚相手だ。

すなわち俺のおふくろ」

「ちよつと！」

こんな話、私にしてもいいの？」

「共演した女はほとんど知っているよ。」

俺が小学校5年生の時、23歳の美しい女性が家に来た。

12年しか離れていない女性だった。

品があり教養もあり、おまけにすごい美人だった。

俺、一目惚れしてしまつて。

初恋の女性だった。

彼女を見ただけで心臓がおかしくなりそうで。

こんな気持ちになつたことがなくて。

それが恋だと気づくのに時間がかかつた。

俺が母親の愛に飢えていることもちゃんとわかつてくれたので、俺にとっても優しくしてくれた。

毎晩、俺を抱きしめて眠ってくれた。

おふくろが去つて行つてから不眠に苦しめられた俺のために、毎晩頭を優しく撫でてくれたおかげで不眠が治つた。

幼い頃は一緒の布団で眠つていて俺が求めるのは母性だけだったけど。

俺はやがて中学生になり、段々、性というものを意識し始めた。

すると俺の胸に当たる、彼女の胸の膨らみを意識してしまつて。

俺はこれではまずいと思い、別々に眠ることにした。

でも一人で眠つていても、思い出すのは、彼女の体の柔らかさ、温もり、いい香り。

余計に前より不眠になつてしまつた。

そしてそんな邪念を打ち消したくなつた。

ある夜、眠れなくて夜を徘徊していたら、あるスナックの女性に誘われて、SEXをした。

そんなことでもしないと母親への恋心も性欲もかき消せなくて。

その女性とそうなつたわけは、母親と同一年だったから。

彼女なら母親を忘れさせてくれると思つて。

そこから俺のねじれた女性遍歴が始まつた。

こんな男だよ、俺は。

普通の高校生の恋愛が未だにできない。

梨花とは所詮、住む世界が違う。

ごめんな。

梨花花のことバージンだとか馬鹿にして。

俺、正直お前が羨ましくて。

汚いこと何も知らないお前が。」

「違う！

私も汚いことしたことあるの。

不倫：

私も父親の愛を知らずに育っていたの。

今までの人生でお父さんがいたのは中学2年と3年の2年間だけ。

私が中学校1年生の時に担任だった先生なの。

先生、私の相談に乗ってくれて親身になって接してくれた。

その内、先生に父性が芽生えて、私のこと養女にしてくれたの。

でも実は私その先生に恋していた。

私の初恋だったの。

一つ屋根の下で暮らし始めて先生の全裸を見て、その気持ちに気が付いてしまったの。

そして先生とキスしてしまった。

先生が男性として好きだって告白までしてしまったの。

あんなに優しく母として接してくれた先生の奥さんを裏切ってしまった。」

「そうだったのか？

俺たちすごく似ているな。

罪を背負った者同士か。

なんか俺、仕事がやりやすくなった。

俺、はつきり言っつて、男の汚さなんて何もわかつちやいないお嬢さんだって、お前が腹立たしくていじめていた。」

「私もあなたはどうぞどんな恋でも叶うハンサムさんだから恋が叶わなくて悩む人の気持ちなんてわかつちやいないと思って嫌ってた。」

「ぷっ！」

「ふふ」

二人で顔を見合わせて大笑いした。

店長が何も聞いていないふりをして水をつぎにくる。

「梨々花、強くなつて欲しい。」

役者の世界には俺みたいこんな汚れた男、いっぱいいるぞ。」

「勇人は汚れてなんていない！」

勇人は今でもお母さんが大好きで、それって本物の恋だし愛だよ！」

一瞬勇人の顔が小学生の男の子みたいになった。

こんなあどけない表情の勇人を初めて見た気がした。

芸能界きつてのモテ男だと言われる勇人には実はこんなピュアな部分もあったのだ。

そして勇人にそんな顔をさせるのはどんな美人女優さんでも無理でお母さんだけなんだとわかった。

その日を境に、梨々花は勇人と親しくなった。

演技で喧嘩するのも普段喧嘩するのと同じようにできるようになった。

勇人とは撮影の時以外も話す機会が増えたので演技も自然に会話できるようになった。お互いの恋愛遍歴を話すことにより勇人が身近に感じられるようになった。

でもその一方で面白くないのは裕子だった。

そんなある日事件が起こった。

「ちよつと！」

私のブレスレット盗んだわね！」

梨々花は最近勇人のことが男友達として好きになり、勇人からのプレゼントのウサギのブレスレットをプライベートでは付けていた。

「これ、私のよ！」

返して！」

「これは私が勇人からもらったものよ。」

「嘘。」

勇人が私以外にブレスレットなんて渡す女なんていないわよ！

最近私のブレスレットが無くなつて：

そしたらこんなところにあつて！」

「これは俺が梨々花にプレゼントしたものだよ！」

あんまり二人の喧嘩がひどいので勇人が間に入った。

「嘘よ！」

そんなはず。

裕子、このブレスレット大事にしている、宝物で。

そんな：

うわあああああ……」

そう言つて、裕子は梨々花の手からウサギのブレスレットを引きちぎった。

「ちよ、何をするの？」

私もこれ、大事にしている。」

「もう、今日、帰る！」

裕子、この人たちと仕事したくない！」

裕子はそう言つて帰ってしまった。

裕子は気に入らないことがあるとすぐ遅刻したり早退したり休んだりする。

ルックスも可愛くて演技もそこそこのまいのだがあまりに我儘なので最近、主演や主演の相手役ができなくなっていた。

オーディションでも落ちてばかりだった。

江口監督が言つた。

「梨々花、後は裕子を頼む。」

梨々花はあまり気が進まないが友達役をする裕子だし、後を付いて行くことにした。

「裕子ちゃん。」

一緒に美味しいパンケーキでも食べに行かない？

裕子ちゃんが好きそうな店だよ。」

そう梨々花が後ろから叫んでもふんと前を向く裕子。

そして街中に裕子が歩いて行くのでそれに付いて行く梨々花。

むしゃくしゃして何をしでかすかわからないのでビクビクして付いて行った。

そしてやがて裕子はゲームセンターに入って行った。

すると、近くを通った女子高生が裕子を見つけて噂話をする。

「あれ？」

あれって須藤裕子じゃないの？」

「本当だ、可愛い！」

「でも知ってる？」

須藤裕子今CMの本数減っているよね？」

「なんか今落ち目らしいね。」

「かなり我儘だからみたいよ。」

無断欠勤したり早退したり遅刻したり。

新人の癖に態度でかいらしいよ。」

「それに次に始まるドラマで主演でも主演の相手役でもなくて、主演の相手役の友達役だつて。」

「それって笑う。」

ほとんど登場しないし、台詞もあまりないじゃない？」

裕子は泣きそうな顔になっている。

みんなが裕子をあざ笑っている。

梨々花はある場面を思い出していた。

高校の修学旅行だ。

現実の世界では友達がいなくて。

茜という自分が頭の中でこしらえた友達と一緒に遊んで。

それが見つかって同じ部屋の子にいじめられて。

梨々花はいてもたってもいられなくなってしまった。

「ちよつと、あんたたち！」

役者ってどんなに大変か知っているの？

朝 3 時に起きて夜中の 2 時くらいまで仕事をすることもあるのよ！

家に帰ってから自分の時間もなくて台詞を覚えて。

台詞を覚えるのがどんなに大変かわかる？

自分の台詞だけじゃなくてみんなの台詞を覚えなといけないの。

それがどんなに大変なことかわかっているの？

そしてそれがあなたたちにできるの？」

梨々花が怒って言ったので女子高生たちは去って行った。

「お礼なんて言わないからね。」

「裕子ちゃん、せっかくだから、プリクラ撮らない？」

私、プリクラなんて撮ったことなかったのよ。」

「嘘でしょ？」

あなた友達いないの？」

「芸能界以外で一人だけいるの。」

本当に親友だなんて思える女の子が。」

「ふーん、親友がいていいわね。」

「でも唯一の親友が今の若者にしては大の写真嫌いで。」

だからプリクラって憧れていたけど一度も撮ったことなくて。」

「私なんて、こんなにいっぱい撮ったことあるよ。」

裕子は鞆の中からカラフルなシールでデコレーションされている一冊のノートを取り出した。

するとすごい数のプリクラが貼られていた。

「すごいじゃん。」

裕子ちゃんって友達こんなにいっぱいいるのね。」

「プリクラ友達はいるけど本当の友達なんて一人もいない。」

女の子って男の子を取った取らないですぐ揉めるし苦手。」

仕事場の裕子はいつも高飛車で怖い顔をしていた。

でもその時の裕子はただの寂しがり屋の女子高生に見えた。

「じゃあ、私と友達になろうか？」

芸能界入って間もないし、私も友達あまりいないし。

私と友達になつてよ！

裕子ちゃん！」

「げっ、なんで恋敵と友達にならないといけないのよ。」

私と勇人は同棲しているのよ。」

「そんなこと全然気にしてないよ。」

第一恋敵なんかじゃないわ。

私は勇人のこと友達としか見てないもの。

勇人もそうよ。」

「私まだ怒っている。」

勇人はてっきり私だけにブレスレットを買ったと思っていた。

すごく大事にしていたのに、宝物だったのに。

おまけにどこを探してもなくて。」

「じゃあ、友情の印に、このブレスレットあげる。

誰かさんが引きちぎったからちよつとこの結び目が壊れているけど。」

裕子は絶句した。

「いいの？」

こんな大切なものをもらって。

あなたも勇人が好きなんじゃないの？」

「もちろん大好きよ。

でも恋じゃないの。

なんか戦友って感じ。

笑っちゃうけど。

さあ、友情の証。」

そう言ってブレスレットを裕子の腕に付けた。

この可愛いブレスレットは裕子の方が似合うような気がした。

「あ、ありがとう。」

裕子は真っ赤になって言う。

「それより、プリクラ撮ろうよ。

撮り方どうするのよ？」

「あなた何にも知らないわね。

まず背景を選ぶの、そしてライトを当てて、色白に見えるように細工して……」

いかにも最近の女子高生って感じで手際よくプリクラを操作する裕子。

江梨香は現代的な女の子なのでこういうの大嫌いだったので、なんだか裕子が申請ンだった。

そしてレースのハートの可愛い背景に可愛く映る裕子と不細工に映る梨々花のツーショットのプリクラが完成した。

そして次の日、ドラマのこんなシーンが大成功した。

裕子の役は真樹という友達の役だ。

それは長年恋してきた茂人と初めてデートすることになった絵美が友達の真樹に服屋さんに付いて行ってもらって服を選ぶシーンだ。

「うーん。

あんたは色気がなさすぎるからなあ。

こういう肩がずれ落ちるような服もいいかも。」

「恥ずかしい！」

いかにも男に媚びるファッションじゃない。

そんなファッション虫唾が走るわ。」

「これだから絵美はもてないし、茂人にも女扱いしてもらえないのよ。」

「そっかなあ。」

私、そんなに色気ないか。」

「いつも私服はチェックのシャツにジーンズだもんね。

これじゃあ、性的な感情は芽生えないわよ。

だから、こーんな胸の開いた服とか。」

「やっぱりだめだ。」

私はセクシーを全開にするの苦手。」

「私、絵美には幸せになって欲しいのよ。」

裕子が突然アドリブでそんな台詞を言った。

そんな台詞なかったので梨々花は戸惑った。

「絵美って色気なくて、男みたいで、本当どうしようもない女だけど。

でも絵美ならみんなのアイドル茂人を取られてもいいかなって思うの。」

そう言いながら裕子は悪戯っぽく梨々花に笑いかけた。

勇人とのシーンも、裕子とのシーンも普段みたいに自然に演技ができるようになった。

でもどうしても演技派女優であるみくにとのシーンで壁にぶち当たった。

みくにの演技がすごすぎるのだ。

みくにが演じる、茂人との許嫁由香子は本来のみくにとは正反対のタイプ。

みくには見た目も中身も古風だ。

でも由香子は現代っ子そのもの。

由香子はまるで裕子みたいな性格だ。

でもみくには現代っ子由香子を完璧に演じた。

江口監督は梨々花に言った。

「みくにの目を見ろ。」

本来のみくにの目じゃないだろ。

話し方を聴け。

まるで裕子みたいな話し方だろ？

お前は今回の役は純真無垢な絵美の役だからうまく演じられている。

演技をしなくてもそのまま演じればいいから。

ただもうちょっと色気を無くさないといけないけど。

そのままではだめだ。

今のままでは演技の幅が狭くなる。

みくにの演技から女優とはどういうものなのか学べ。」

みくにの演技が毎回すごいので、梨々花は思わずみくににコツを聴いてみた。

「コツ？

私は想像してみるの。

由香子がどんな雑誌が好きで、どんな本や漫画が好きなのか。

後、ファッションや好きな食べ物やなんかもね。

そして由香子の好きな雑誌や本や漫画を読んで。

由香子の好きそうな服や食べ物を買って帰るの。

家で由香子の好きなような服を着て、由香子の好きそうな食べ物を食べて。

そうやって掴んでいくの。

頭の中を由香子の思想に変えていく。」

「じゃあ、目つきや話し方は何故あんなに由香子になりきれなの？」

「ゲームセンターとかに行つて、由香子のモデルを探し、目の表情や話し方を見てくるの。」

それを鏡の前で毎日練習する。」

「すごい、みくに。」

だから完全にみくにと違った現代っ子由香子になれるのか。

参考になったわ。

みくに、ありがとう。」

みくにはその後も、初めて演技をする梨々花に色々教えてくれた。

しかし、梨々花が何度やってもNGを出すシーンがあった。

瑠真役のレイナとの絡みだ。

江口監督はいつも怒る。

「梨々花！

ここは茂人と別れてくれない瑠真にくっつかかるシーンだ。
色気のない男みたいな絵美が唯一女の部分を見せてしまうシーンだ。

お前の演技には健気な部分が足りない。

何とかして愛の力で茂人を救おうとするシーンだ。

このドラマで一番大事な部分だ。

この部分がダメなら、このドラマはこけるだろう。

お前とレイナの距離が遠すぎる感じがするな。

よし、今日からお前、レイナと一緒に暮らせ。

場所は、こちらが提供する。」

「えっ。

そんな急に言われても。

私、心の準備が…」

「このドラマを大ヒットさせるためにはお前とレイナの距離も近くないな。

とにかく今日からレイナと暮らせ。

レイナのことをよく理解しろ。」

この監督はお互いのことをよく理解させるところから演技をスタートさせたいみたいだった。

でも監督のその作戦は勇人も裕子も大成功した。

梨々花はその日からレイナと一緒に住むことになった。

レイナは現在一番売れているグラビアアイドルで。歳は梨々花より10年上の26歳。

スレンダーなのに胸が大きくて腰は細い。

化粧も派手でいつもきつい香水の香りがする。

大人っぽくて色っぽい女性だ。

何もかも梨々花とは正反対だった。

撮影が終わったら梨々花とレイナは監督が用意したマンションに一緒に行った。

結構豪華なマンションだった。

ここでこれから撮影が終わるまでレイナと住むことになった。

「ごめん。

梨々花。

私最初から言っておくけど、すっごいだらしなの。

洗濯も掃除も料理もゴミ出しも大嫌いで。

全部、梨々花がやってくれない？」

そう言ってレイナは、化粧も落とさず、服も外出着のままベッドにもぐりこんだ。

「おやすみ、梨々花。」

「ちよつと！」

おやすみって！

食事はいいのですか？

お風呂もいいのですか？」

「あつ、私、家に帰るといったん眠らないと何もする気が起こらないのよ。

いったん寝て、夜中の２時くらいに起きて、そこからメイク落とししたり、長風呂に入ったり。

それから、カップラーメン食べて、眠ります。

ということでお休みなさい。」

荒れた生活しているんだ。

そんなこんなで梨々花とレイナの生活が始まった。

まず梨々花は洗濯することにした。

まず驚いたのがレイナの下着。

赤、紫、金、黒と派手な物ばかり。

服も肩がずり落ちるものや胸元が開いたものばかり。

スカートも膝より短い超ミニスカート。

レイナは言った通り、家事は一切しない。

一応、レイナと梨々花は違う部屋が与えられていた。

でもレイナがどうしても掃除して欲しいと言うので掃除もすることにした。

レイナの部屋は。

「臭っ。」

入った瞬間、鼻が臭さでつんとなった。

夜中に食べたカップラーメンのカップや、昨夜梨々花の作った料理の皿、コーヒーやビールの缶がそのまま放置されていた。

梨々花は綺麗好きなのでそれらを全部片づけ、掃除した。

それだけならまだしも、こんな出来事があった。

ある日梨花花がお風呂から出てくると、洗面所に居たとある人物と遭遇した。

「きゃーーーーー！」

なんであなたがそこにいるのよ！」

それはなんと勇人だった。

もちろん、梨花花は全裸だった。

勇人は梨花花の全裸を見て目が泳いだ。

「見たわね！」

あーーーーんどうしよう、お嫁に行けない！」

「とにかく服を着たら？」

梨花花は素早くバスローブを着た。

「なんであなたがここにいるの？」

「そりゃ、今からレイナと楽しい時間を過ごすから、その準備に風呂に入ろうと思つてさ。」

「楽しい時間ですって？」

今レイナは私と住んでいるのよ。

よくそんな家に来られたものね。」

「レイナと俺は愛し合っているの。」

レイナとは半同棲だよ。

お互いの家を行き来する仲。」

「あなたには裕子がいるじゃないの！」

「あれは事務所が勝手に作り上げた彼女だよ。」

二人が同棲するマンションも存在するのも確か。

でも実質あの場所は単なる裕子と俺の茶飲み場だよ。

俺はあいつには指一本触れたことないよ。

裕子も俺の気持ちにレイナにあること、それをちゃんとわかっている。

芸能界って恐ろしいところだろ？」

勇人はそう言って少し寂しく笑った。

「さあさあ、今から楽しい準備をしたいから、出てって出てって！」

「あんたが出て行きなさいよ！」

ここは私の家なんだから！」

梨々花はこのまま勇人と話しているとまた喧嘩してしまいそうなので、リビングにこうとした。

すると素っ裸のレイナが風呂に入っていく。

二人でお風呂に入るみたいだった。

そのまま二人は2時間くらい一緒に風呂に入っていた。

梨々花は一日の家事をこなし、ベッドで寝ようとした。

でも隣の部屋からレイナと勇人のじゃれあっている声が聞えてきて眠れなかった。

そのまま、その後毎日レイナの元に勇人が訪れた。

まるで3人で同棲しているみたいだった。

梨々花はそれまではだらないレイナに対して嫌悪感は抱いていなかった。

でも勇人が来るようになってから家事を一切しないレイナに対して嫌悪感を抱くようになっていた。

そんなある日、家に帰ったら勇人だけがいた。

「今日はレイナさん、どうしたの？」

「ああ、さつき、喧嘩しちゃって。

レイナは自分の住んでいたマンションに帰ったよ。

今日はここで過ごしたくないって。

お前の顔も俺の顔も見たくない、ひとりでいさせてっさ。」

「だったら、あなたも自分のマンションに帰りなよ。

ここに来る意味がないでしょ？」

「そうだけどさ。

なんか、無性にお前の料理食べたくて。

このところ毎晩お前の美味しい料理食べているしさ。

外食したくない気分だよ。」

「わかったわよ！

料理作るから。

食べたら帰ってね！

何が食べたい？」

勇人はびっくりした顔をした。

「何よ、びっくりした顔をして。」

「俺みたいなやつかい者の好きな物作ってくれるんだって思ってた。なんか感動しちゃって。」

「いいから、何を食べたいの！」

私も疲れているんだから早くして！」

「俺、オムレツが食べたい！」

「お子ちゃまじゃない！」

「そうだよ。」

俺はガキだよ！」

何だかむっつりした顔の勇人。

梨々花は手早くオムレツを作った。

もやし、人参、キャベツ、ベーコンを痛めて、玉子でそれを器用に包んだ。

「美味しい！」

梨々花は料理上手だね。」

「私お母さんが家事をしない人だったからね。」

小学校１年生ぐらいから家事をしていたかな。」

「小学校１年生に家事をやらせるぐらいだらない母親か。」

まるでレイナみたいだな。

あいつひどいよな。

梨々花だって同じくらい疲れているのに家事をしないで好き勝手やってさ。」

いきなりレイナの悪口を言うのでびっくりする梨々花。

「私は家事が大好きだしいいのよ。」

「じゃあ、このジャケットのボタンの付け直しもしてくれる？」

それは勇人の外出着だった。

「いいわよ。」

付けてあげる。

貸して。」

梨々花が器用にボタンを付けているとじっと見つめる勇人。

「どうしたの？」

「なんだか梨々花と俺の義理のお母さん似ているなって思ってた。」

「レイナさんみたいな人なんですよ？」

私と似てるわけじゃない。」

「俺の義理のおふくろもそうやってよく俺の服のボタン付けてくれていたんだ。家事は何でも器用にこなす人だし。」

レイナはダメだ。

ボタン付けてって言ってもいつも嫌がって。

ボタン付けどころか料理作って欲しいって言っても何も作ってくれない。」

「でも好きでしょ？」

レイナさんのこと。

毎日ここに来ているじゃない！」

「レイナとのSEXは楽しいよ。」

「ばっかっ、そんなこと聴いてないよ。」

「レイナという楽しいのはSEXの時だけだ。」

「だからそんな話聴きたくない！」

「お願いがもう一つある。」

抱きしめてくれないか。」

そう言って勇人は、素早く自分の頭を梨々花の胸にうずめた。

「ちよつと！」

これってレイナさんに知れたら大変じゃ！」

「甘えさせてくれるだけでいい。」

このままいさせて、このまま。

それから頭を撫でてくれないか？」

梨々花は自分の胸に甘える勇人が可愛く思えてしまつて。

思わず髪を優しく撫でた。

「俺が小学校 6 年の頃かな。」

俺、小学校の頃学校でよく泣かされて帰ってきて。

そしたらお母さんがよくこうやって頭を撫でてくれたな。

それがすごく気持ちよくて、そのままよく眠ったよ。

梨々花やつぱり似ている。

お母さんと同じいい香りがする。

柔らかくて優しく。

頼む、しばらくこのままいてくれ。」

梨々花は勇人がすごく愛しく思えて、優しく包み込むように勇人を抱きしめた。そして優しく髪を撫でた。

「お前、全然自分で気が付いていないけど、すごく母性があるんだ。

馬鹿な俺はお前と一緒に暮らして初めてそれに気がついた。

お前なんて恋愛経験全然ないし、母性なんて全然ないと思っていた。

母性ってもんは恋愛経験豊富な女がなれの果てに習得するものだとはかり思っていた。でも全然違っていた。

恋愛経験豊富でも母性が全然備わっていない女がいることを。

それに俺は年上の女の方が母性があると思ひ込んでいた。

母性のある女は年齢なんて関係ない。

お前は恐らく小学生くらいから母性があつたんだ。

お母さんを守りたいって母性。

梨々花はお母さんのお母さんになろうとしていた。」

「お母さんのお母さん？」

思い当たる節があつた。

あの頃、家事や育児を放棄しているお母さんを守りたくて。

必死になってお母さんを助けようとしていた。

あれはお母さんを守ろうとしていたのだ。

「梨々花、俺、この家に来てから梨々花のいいところばかりわかってしまつて。

梨々花はこんなやつかい者の俺の身の回りの世話までしてくれたよ。

アイロンかけてくれたり、俺のために料理作ってくれたり。

だから段々、梨々花に俺惹かれていった。

レイナには悪いけど、俺、梨々花と付き合いたい。」

次の日、梨々花は撮影に行つても、意識してしまい勇人と目を合わせられなかった。消そうとしても消そうとしてもタベ自分の胸の中にいた勇人のむくもりが消せない。

梨々花は完全に勇人に恋していた。

母性本能と恋が入り交つた感情が芽生えてしまった。

梨々花は考えさせて欲しいと言つた。

そしてその日の撮影後梨々花と勇人は公園で会うことになった。

梨々花は突然のことで頭の中がごっちゃになっていたのでとにかく勇人ともっと話を
して頭の中を整理しようと思った。

このドラマのシーンと同じ、公園のベンチに今、梨々花と勇人は座っている。

「俺、明るい場所で女と会うの苦手だ。

中学校 1 年生の時、初めて付き合った女の人が、自分よりうんと年上で。

デートはいつもベッドの中だったから。

きちんと青空の下で恋したことなかったよ。

俺にとって付き合うイコールSEXだったし。」

「そんなの体によくないよ。

ちゃんと青空の下で恋しないと。」

「俺、今もここで戸惑っている。

どうしたら梨々花を楽しませてあげられるか思いつかない。」

「私なら、好きな人として隣同士でいるだけで胸がきゅんとなって目が合うとも
つときゅんとなって。」

「胸がきゅん…」

勇人はまるで小学生みたいな目で梨々花を見つめた。

もうあの恋愛に意地悪な勇人ではなくなっていた。

そこにいたのは初恋に戸惑う小学校 5 年生の勇人だった。

「俺、昨日梨々花が作ってくれたオムレツの味が忘れられなくてずっと一晩中眠れな
かった。

あれが恋の味だったのかな。

あの味を思い出すときゅんとなって。

そして今ここにいる梨々花と目が合うともつときゅんとなって。

こんな気持ちになったのおふくろ以外初めてだ。」

梨々花はどうしてこんなことをしたのだろう。

気が付けば自分から勇人に口づけをしていた。

「梨々花…」

いいのか？

俺で…」

「そう、みたいね。

何だか、勇人が小学生みたいに見えて可愛くて。

こんな行動してしまつて。

うわぁ、どうしよう…」

梨々花は自分のした行為が恥ずかしくなり真っ赤になった。

「可愛い！」

梨々花！

可愛いよ！」

勇人は優しく梨々花を抱きしめた。

「きゅんとなつて、胸が苦しい。」

「私も、胸がきゅんとなつて。」

「俺と付き合つてくれますか？」

「はい…」

こうして梨々花と勇人は付き合うことになった。

問題なのはレイナだった。

撮影終了までの2週間、まだレイナと暮らさないといけないのだ。

レイナには勇人の口から別れを告げてもらった。

「ひどい！」

私がこんなに尽くしてきたのに！」

「お前が何を俺に尽くした！」

「お風呂で体を洗つてあげたじゃない！」

それにベッドの上で裸の胸に甘えさせてあげたし！」

「それは恋愛ごっこだ！」

家事をお前は一切しなかったじゃないか！」

「梨々花に惚れたつて正気？」

あんな恋愛経験少なそうな小娘、あなたが付き合えるわけがないでしょ？

どう考えたつて勇人と梨々花じゃ釣り合わないわよ。

今は新鮮だけどそのうちあの子じゃ物足りなくなるのがわかっているわ。

一度、お互いの考えたデートを試してみるといいわ。

それがわかるわ。」

勇人はレイナの言うことが気になり、そうすることにした。

勇人のデートはこんなプランだった。

フランス料理↓デパートで買い物↓豪華ホテルで宿泊

「フランス料理？」

そんなの私食べたことないや。

第一マナーを知らないし。」

「今、フランス料理のマナーの本とか出ているよ。

それで勉強してみたら？」

演技をする上でもフランス料理のマナーは必要になってくる時もあるし。」

梨々花はフランス料理のマナーを勉強し、デートに備えた。

「ちゃんとできているじゃないか！」

「本で勉強したの。」

豪華な料理が置かれているテーブルを挟んで二人で微笑み合った。

初めて食べるフランス料理は緊張したがすごく美味しかった。

次にデパートだ。

「あのウサギのブレスレット気に食わなかった？」

裕子にあげたらしいね。」

「ううん。」

私もすごく気に入っていたけど、裕子には負けちゃってね。

だから友情の証にあげたの。」

「じゃあ、仕切り直しってことで今度は指輪をあげるよ。」

「ゆ、指輪？」

「指輪しないの、梨々花は。」

「私、指輪なんて無縁の世界に生きていて。」

「ここのデパートの指輪、何を買ってくれてもいいよ。

値段は気にしないでいいから。」

「こんな高級な指輪ばかり。

どれを買ってもいいって言うの？」

「俺、好感度がいいしCM本数がすごいから、気にしないでいいよ。」

「なんか勇人感じ悪い。」

「おっ！」

言ったな！」

ふざけ合う梨々花と勇人。

「私、何を買ってもらったらいいかさっぱりわからない。

こんなこと初めてで。

小学校 1 年生の私に見せてあげたい。」

「梨々花は今まで苦労したからそれぐらいの幸せがあってもいいよ。」

「じゃあ、勇人が選んで。」

「任して！」

こういうのは得意だから。」

店員さんに話しかける様子を見ていたら、今まで何度も女の人にこうして指輪をプレゼントしていたということがすぐにわかる。

それを見て、本当に自分とは住む世界の違う人だなと思う。

勇人がすごく遠い人に思えた。

そして、次も緊張した。

今夜は豪華ホテルの個室で食事し、泊まることになっていたからだ。

泊まるってことはそういうこともあるのかな、そう思うと梨々花は顔が赤くなる。

「ここがスイートルーム？」

部屋が 5 つもある。

まるでマンションみたいだった。

すごい広さ。

これがホテルの客室の一つなのだ。

リビング、夜景を展望できる部屋、ベッドルーム、ジェットバスの入浴場、化粧室。

「わあ、こんな素敵な場所で宿泊できるんだあ。

嬉しい！」

私、こんな豪華な場所で眠れるの初めて！

ありがとう、勇人！」

「そんなに喜んでくれて、俺もこのスイートを取った甲斐があったよ。」

「でも高校生でこんなすごいホテルなんて、不相応だよね。」

「俺はいつも付き合ってきた女の子にこうしてきたよ。」

驚く梨々花。

やっぱり梨々花と勇人は住む世界が違い過ぎるのか。

そして更に驚きは続く。

「ルームサービスを持ってきました。」

ホテルの客室係りの人が持って来たのは。

「わぁ、お寿司！」

ルームサービスなんて高いので取ったこともなかった梨々花。

それも豪華なお寿司ばかりだった。

「好きなだけ食べていいし、おかわりもしていいよ。」

「おかわりも！」

そんな。

一体いくらするの。

今日のデート。」

「男だからこれくらいするの普通だよ。

節約したデートだと女の人に失礼に当たるしね。」

梨々花は遠慮してしまい、あまりお寿司を食べなかった。

やっぱり勇人の練ったプランのデートだと勇人と世界が違うことを思い知らされてしまふのだった。

そして、勇人に部屋のお風呂と一緒に入ろうと誘われたがさすがに断り、二人でダブルベッドで眠ることになった。

「お、お休みなさい、勇人。」

梨々花はどうしていいかわからない。

取りあえず、勇人と離れて眠ることにした。

「おい！」

まさか、同じベッドで何もせず眠るって言うんじゃないだろうな！」

「そのつもりだったけど。」

私たち付き合ってまだ日が浅いし。」

「日数の問題じゃないだろ・

俺が何のためにフランス料理をご馳走したり、指輪をプレゼントしたり、豪華ホテルでリッチな夜をプレゼントしたと思っているんだ。
すべてこのためだよ！」

「うそっ！」

ずっとそんなことを考えていたのね！

ひどいわ！」

「ひどいのはそっちだろ！」

いったいこのデートにいくらかかっていると思ってるんだ！」

「デートにお金かけたら何したっていいって言うの！」

だったら私はフランス料理も指輪も豪華ホテルもいらない！」

「なんだと！」

俺のデートが楽しくないって言うのか！」

「私、普通でいいのよ。」

「なんだよ、普通って！」

「公園でホットドッグ買って、ベンチで食べて。

バドミントンをして。」

「まるであのドラマの脚本と同じだな。

その何が楽しい？」

俺はSEXというものが前提じゃないとデートが楽しめない。」

「実際にしてみようよ。」

私が青空デートの楽しさを教えてあげる。」

そして今度は梨花花がプランを練ったデートをすることになる。

「わあ、いいお天気、晴れて良かったね。」

公園デート日和だね。」

「俺、あんまり公園好きじゃないけど。」

「取りあえず、ホットドッグ買ってくる。」

そしてホットドッグを食べる二人。

「美味しいね、勇人。」

「まずっ！」

お前ら庶民はこんなもん食べてうまいって言っているのか？」

気まずい雰囲気流れる二人。

「じゃあ、バドミントンしない？」

私バドミントン部だったんだ。

勇人は何かスポーツしていた？」

「俺はスポーツ嫌いだ。

運動音痴で。

スポーツなんて経験ないよ。」

「じゃあ、バドミントンを教えてあげる。」

梨々花はサーブの打ち方やレシーブの仕方を勇人に教えてあげた。

「さあ行くよ！」

梨々花は鋭いサーブを勇人に向けて打った。

「うわあああ、こんなの取れないよ。」

勇人は大きく空振りをした。

どれだけ梨々花がサーブをしても全然、打ち返せない勇人。

「くたびれたよ。」

ちよつと休憩しようよ、梨々花。」

「ええ？

もう？

ちよつと運動しただけじゃない！」

「俺にとつたら重労働だよ。」

もう公園はいいよ。

もつと楽なデートはないの？」

「じゃあ、ペットショップに行かない？

可愛い赤ちゃんのワンちゃんや猫ちゃんがいっぱいいて可愛いよ。」

そして公園の近くのペットショップに行った。

「わあ、可愛い。

犬の赤ちゃんがいっぱいだよ！」

そのペットショップには。

ミニチュアダックスフンド、パグ、チワワ、柴犬、トイプードルなどの可愛い赤ちゃんがいっぱいいた。

「抱かせていただいていいですか？」

あんまり犬の赤ちゃんが可愛いので思わずそう言ってしまう梨々花。

「おい、梨々花。」

お前犬を買うのか？」

「ううん。」

「買わないよ。」

「だったらまずいよ。」

「気にしない。」

いつもそうしているもん。」

梨々花は目くばせさせてそう言った。

梨々花は一番可愛いと思ったチワワの赤ちゃんを抱っこした。

「可愛い！」

こんな可愛い犬飼いたいな。」

梨々花はチワワの赤ちゃんをぎゅっと抱きしめる。

そしてチワワちゃんの赤ちゃんを店員さんに返し、今度はずらりと並ぶ犬の赤ちゃんの入っているケースを見て回る。

「どの子も可愛いでしょ。」

「どの犬が欲しいんだ。」

「チワワちゃんがやっぱり一番可愛いし、チワワちゃん。」

「すみません。」

店員さん、このチワワちゃん、ください。」

梨々花は驚く。

「ちよっ！」

店員さん、いいです！

見ているだけだから。」

梨々花はまずいと思い、勇人の手を引き店から出た。

「ちよっ！」

勝手な事しないでよ。」

「勝手な事だと！」

俺がせっかく買ってやるって言っているのに。」

「私は買うつもりないわよ。」

ただ見ているだけだから。」

「ただ見てるだけなんて。」

梨々花は買もしないのにあんなに抱っこして見たりしていたのか？

恥ずかしいと思わないのか？」

「どうせあの店に来る人は飼う気もないのに抱っこして見たりしているのよ。ペットショップってそういうところだよ。」

「俺はこんなに恥ずかしい思いをしたの初めてだよ。」

「なんか勇人、私といっても少しも楽しくなさそうだね。」

「うん、正直言って俺、すぐつまんない。」

公園のホットドッグはまずいし。

バドミントンも疲れるだけでつまらないし。

買いたくないのに動物見ても何も楽しくないし。

庶民ってこんなことが楽しいんだ？」

「何よ！」

庶民だなんて。

ちよつと勇人はお金持っていると思っていいい気になって！

お金をかけない幸せだってあるよ。」

「俺には今日のデートでそういうお金をかけない幸せなんて見いだせないよ！
幸せってお金で買うものだよ！

それに俺、やっぱり昼に青空の下で会うのって苦手。

夜の街に繰り出す方が幸せ。」

「わかったわよ。」

勝手にレイナさんと夜の街で遊べばいいじゃない！

もう勇人なんて知らない！」

「おう！」

そうするよ。

俺もお前みたいな色気ない奴とデートしたくない！

レイナみたいな色っぽい奴と夜にリッチなデートがしたい！」

梨々花は勇人と喧嘩してしまった。

その日レイナさんとの共同マンションに帰ると、勇人が来ていた。

「ちよつとあなたなんでそこにいるのよ！」

「悪いか！」

レイナに会いに来た。

お前に会いに来てない。」

梨々花は自分に会いに来たと思ったのがっかりした。

その後、勇人はまた前みたいにレイナと一緒にお風呂に入った。

2時間経っても出てこない。

二人の笑い声が風呂場から聞えてくる。

梨々花はベッドに入り布団を頭までかぶって聞えないようにした。

いよいよ梨々花がオーディションで演技をしたシーンの撮影の日になった。

梨々花は勇人の顔が見られなかった。

でも演技をしなければならぬ。

例え私生活でどんなことがあっても。

そして撮影が始まった。

勇人の台詞から始まった。

「実は俺の弟秦は俺の弟じゃない。

俺の息子だ！

俺はこんな汚れた人間だ！

俺の心の中にも体の中にもドロドロとした性欲が湧いてきて。

抑えたくても抑えたくてもどうしようなくて。

お母さん愛しくて愛しくて。

あの美しい顔も、体も全部俺のものにしたくて。

それを抑えようとすると、他の女と手当たり次第やりたくなる。

心も体も他の恋を求めようとする！」

「茂人！

目を覚まして！

あなたこんなことをしていたら、茂人の心も体もボロボロになっちゃう。

二度と普通の恋ができなくなっちゃう！

お願い！

私を見て！

私小さい頃からずっと茂人だけを好きだったの！

だから私と付き合って！

私が教えてあげる！

茂人に本当の恋を教えてあげる！」

「無理だ！

お前みたいなバージン、俺は何の魅力も感じない。

俺にお似合いなのは百戦錬磨の女だけだ！

俺はSEXつてものが前提じゃないと恋ができない。

俺は13歳からSEXを知っている。

13歳から許嫁の由香子と一緒に部屋で眠らされて。

それに10年も年上的高级ホステスに女を教えられて。

だから、SEX抜きの恋愛なんて俺にはできないよ！」

「私と一緒に付き合おう！

二人で公園へ行こうよ。

二人でおしゃべりしたり、バドミントンしたり。

青空の下でデートしよう。

茂人に足りないのは青空よ。

青空の下で正々堂々と付き合うこと。

それがどんなに楽しいことなのか知らないのよ。

だからお願い、私と付き合って。

私と付き合ってよ！

茂人！」

ここまではオーディションと一緒にだった。

梨々花はこの時も勇人が本当に大好きで。

レイナと勇人があの夜お風呂と一緒に入っている時もやっぱり勇人が好きで。

あの夜、梨々花の心は痛んでいた。

そのことがあってか、梨々花は心の底からこの演技をすることができた。

「カット！

梨々花、いいぞ！

まるで本物の会話みたいだった。

演技だってことを俺も忘れるぐらいだった。

勇人の演技も自然で良かった。

次のシーンもいくぞ。」

次のシーンも勇人の台詞だった。

台本通りのはずだったが。

「所詮、俺とお前じゃ住む世界が違う。

価値観が全然違う。

俺さあ、中学校 1 年生の頃から女とSEXすることに明け暮れていてさあ。

絵美がバドミントン部で青春を送っていた頃だ。

絵美の中学頃の思い出はバドミントンの思い出ばかりだと思う。

でも俺の中学、高校の頃の思い出は女とSEXした思い出しかないんだよ。

だから公園でバドミントンしてもお前が眩しいだけだろう。

純粋なお前とバドミントンをすることによって俺がいかに穢れた人間か思い知らされるだけだろう。

俺はお前と違って穢れている。

俺は絵美と付き合うならSEXしたいと思う。

絵美にはそれができるか？」

「私、無理。

高校生でバージンじゃなくなるなんて考えられない。

すごく危険な行為だし。」

勇人は台詞にない台詞ばかり言い出した。

梨々花は演技をしているということを忘れてしまう。

「そうだろ？」

俺はお前と付き合うならSEX抜きでは考えられない。

SEXを主にしたい。」

「でもやっぱり私、茂人と付き合いたい。

SEXはできないけど。

付き合おうよ！

ごく普通の高校生のカップルみたいにな。

二人、公園でバドミントンしたり、ペットショップを見たり、図書館に行って一緒に本を読んだり、映画観たり、遊園地に行ったり、海に行ったり。」

「できないんだよ、俺。

そんな時、どんな話したらいいか、どんな風にふるまったらいいか。」

「そんな時、かっこつけなくていいのよ。」

茂人はかっこよく見せようとか、かっこつけようとか考え過ぎよ。

かっこ悪くていいのよ。

どんな茂人でも私は大好き。

茂人がそんな自分をかっこ悪いと思っても、私は絶対に好きになる。」

そう言って、梨々花は思わず勇人を抱きしめてしまった。

「少しずつ、少しずつ取り戻して行こう。」

茂人が失ってしまった青春を。

私と公園でバドミントンしながら取り戻して行こう。

私が青春もバドミントンも教えてあげる。

私部活馬鹿で、バドミントンしかやってこなかったけど。

私にできるのはこれくらいだけ。

後、茂人と違って勉強も頑張ってきたから勉強を図書館で教えてあげる。

私色気も何もないし、こんな私じゃ物足りないけど。」

「眩しいよ。」

色気もあるよ、絵美。

俺、いつも遠くで、体育館でバドミントンしている絵美を見ていたよ。

そんな時、サーブしている絵美が色っぽくて眩しくて。

どんな色気をふりまいている女より色っぽかった。

全然色気を意識していないのに色っぽかった。

何から始めたら失った青春を取り戻せるのか俺はわからなかったけど。

まず、バドミントンと勉強から教えてもらっていいか。

俺、絵美とならもう一度青春をやり直せる気がする。」

そう言って、勇人は梨々花に口づけをした。

「カット！」

脚本よりずっといいじゃないか！

これ本番で使うよ！

アドリブでこんな演技できたら大したもんだ。

よし！

残すは、問題の絵美と瑠眞のシーンだ。

レイナ！

準備頼む！」

梨々花はびっくりしていた。

次のシーンの撮影のため、セット移動することになった。

そしてその準備中、梨々花の隣に勇人が来た。

「あの台詞、全部本音。

やっぱり俺、梨々花以外考えられない。

俺に、バドミントンと勉強を教えてください？

梨々花学年で勉強トップだって？

裕子が言っていたよ。

裕子にも勉強教えてやっているのか。

俺にも教えてくれよ。」

「わ、私の先生役、厳しいわよ！」

「覚悟しています。」

二人で大笑いした。

そして今までで一番NGを出してきた問題のレイナとのシーンになった。

梨々花の台詞から始まる。

「瑠眞さん。

お願い、茂人と別れてください！」

「別れる？

私と茂人の付き合いはそんなに簡単に別れられるものじゃないのよ。

茂人に女を教えてあげたのは私なの。

あの子は私なしでは暮らしていけないの。

私はあの子の体の一部になっているのよ。

経験のないあなたにはわからないけどね。

第一あなたは今、茂人と体の付き合いはできるの？」

レイナも台詞を変えてきた。

「できません！」

「あなた高校2年にもなって男とSEXできないって言うの？

私なんて中学 1 年の頃から処女じゃなかったわよ。

あきれたわ、あなたには。」

「茂人にはSEXじゃない方法で一つになりたいと思っています。」

「そんなの綺麗ごとよ。」

所詮男と女の付き合いなんてSEXしないとわかり合えないし一つになれないわ。あなたにはわからないことでしょうけどね。」

「馬鹿にしないでください！」

私はあなたより茂人との付き合いは長いです。

私は茂人が失った青春を茂人と一緒に取り戻すつもりです。」

「一体どうしたら、そんなことができるのよ。」

あなたに何ができるのよ。」

「私中学、高校とバドミントンばかりやってきました。

だからまずバドミントンを教えるつもりです。」

「バ、バドミントンですって？」

レイナは本当に可笑しかったみたいだ。

笑いが止まらなくなった。

「後、私、勉強も頑張ってきました。

だから市立図書館で茂人に勉強を教えることもできます。」

「勉強！」

あなたには笑ってしまうわ。

あのSEXしか知らない茂人にバドミントン、勉強！」

本当にレイナは可笑しいみたいで大笑いした。

「わかったわ、私の負けよ。」

あなたはどうかやら全く私と価値観が違う人間みたいね。

男と一緒にいるときスポーツや勉強するだなんて私には絶対にない発想ね。

負けたわ、あなたには。

茂人を普通の高校生にしてやって。

私だって、茂人の青春を奪って悪いことしたって思っていたから。」

レイナさんの瞳に少し涙が光った気がした。

この人はこの人なりに茂人を愛していたことがわかる。

このシーンも撮り直しにはならなかった。

レイナさんも江口監督に演技を褒められた。

こうして梨々花の女優デビュー作「新源氏物語」が完成した。

半年後、「新源氏物語」が放送された。

放送されてしばらく経ってから、杏子は梨々花に言った。

「この脚本、あまりに勇人君と茂人が似すぎているって思わなかった？」

「うん。」

偶然にしてはすごく似すぎているなって思っていたよ。」

「この『新源氏物語』は勇人君をモデルに作った脚本なのよ。

以前、私の作品に出てもらう時に、星崎勇人という人間を知ろうと一度じっくり二人で話をしたことがあるのよ。

そしてこの少年には幸せになって欲しいって思ったの。

そんな願いを込めて作った作品なの。」

「そうだったの。」

「そして書いていくうちに段々と絵美が梨々花になっていった。

梨々花の力だったら勇人を幸せにできるかも知れないと思っていたの。

でもあなたがまさかオーディションを受けるなんて思いもしなかったのよ。

それに結果的にあなたたちのアドリブの方が勝ってしまったって、私が考えた脚本以上の作品になっていった。

これはあなたたちがそれぞれにいい人間関係を築けたからだわ。

ありがとう、梨々花。」

「ありがとうを言いたいのは私の方よ、お母さん。

『新源氏物語』をお母さんが作ってくれたおかげで、裕子とも友達になれたし、勇人と付き合うこともできたし。

それにレイナさんだって一緒に生活したこともあって、お姉さんみたいになって。

今では男の扱い方をレイナさんに教えてもらったりしているから。」

梨々花はそう言って大笑いした。

梨々花は裕子、勇人、レイナのおかげで芸能人としてやっていけるようになった。

このドラマ『新源氏物語』は視聴率が平均的に35%前後で、大ヒットドラマとなった。

梨々花はこのドラマによってCM本数が3つになった。

梨々花の友達役の裕子も梨々花の演技のアドバイスにより演技がうまくなり、好印象となつて以前のようにCMの仕事が入るようになったので喜んでいた。

そんなある日、梨々花の家に思いがけない来客が来た。

チャイムが鳴つてドアを開けると見知らぬ婦人が立っていた。

「こんばんは。

こんな夜遅くごめんなさいね。

あら？

あなたは梨々花ちゃん？

梨々花ちゃんね。

いつも病院で杏子から聴いていたわ。

わあ、梨々花ちゃん、会いたかった！」

そう言つてその婦人は梨々花をぎゅっと抱きしめた。

突然のことに驚く梨々花。

「あ、あのどなたですか？」

「あつ、突然びつくりしたわね。

私は杏子の母、あなたのおばあちゃんの奈都です。」

「おばあちゃん？

確か病院で入院しているのじゃ？」

「それが現在の医学の力はすごくてね。

私の重い心臓病が現代医学の力で治つてね。

すごい手術に成功して。

なんと退院できることになったの。

それで真っ先にこちらに来たの。

元気になつてここに来て、梨々花をびっくりさせようと思つていたのよ。

杏子はどうしたの？」

「そうだったの！

私もおばあちゃんのこととはよくお母さんから聴いていて。

心臓病治るといいなつて思つていたの。

そしてお見舞いにいかないといけないなつて思つていて。

でも良かった！

おばあちゃん、心臓がよくなって！」

梨々花も奈都を抱きしめた。

「あつ、お母さんね。

お母さんは今、仕事の打ち合わせに行っているの。

今日は帰り夜の 8 時くらいになるみたいよ。」

「これでやっと 3 代揃うわね。

ずっとこの日を楽しみにしていたの。

ちょうど手術とあなたのドラマの収録が重なっていて。

杏子はそれに気づかれないようにしていたのよ。

杏子はあなたの人生でも最も大切な時だから余計な心配させたくなくて。

あなたには黙っていたの。

私もそうしたいと思っていたし。」

そう言えば杏子は時々撮影現場にいない時があった。

今思えば奈都の手術の時だったのだ。

「梨々花ちゃんのドラマ欠かさず見ているわ。

演技がとっても上手ね、梨々花ちゃん。

病院で同室の患者さんとも一緒に見ていたの。

みんな梨々花ちゃん、可愛いお孫さんだねって言うてくださって。

梨々花ちゃんは私の自慢の孫よ。

本当、可愛いね、梨々花ちゃん。

私は今、すごく幸せ。

これで娘や孫のために家事をしてあげることできるし。

梨々花ちゃんという可愛い孫ができたし。」

そう言って奈都は涙ぐんだ。

梨々花も泣いてしまった。

「明日、はとバスに乗らない？

私、東京にずっと住んでいるのはとバスって乗ったことなかったのよ。

テレビでよくはとバスツアーを映していてずっと行きたかったのよ。

梨々花ちゃん、こんな年寄りといやかな？」

「ううん！」

おばあちゃんとはとバスに乗りたい！」

次の日、梨々花と奈都ははとバス乗り場へ行った。

梨々花はピンクの花柄ワンピースを着ていた。

奈都がこの日のために作ってくれたのだ。

「梨々花、この服、流行おくれかね。」

「ううん！」

私、ピンクも好きな色だし、花柄もすごく好きよ。

素敵なピンクのワンピースありがとう、おばあちゃん。」

「喜んでくれて嬉しいよ。」

私はずっと孫に服をプレゼントしたかったのよ。

これから服でも鞆でもパジャマでもなんでも作ってあげるしね。」

「嬉しい！」

おばあちゃん、私にもまたミシン教えてね。」

「それにしてもすごい数のはとバスだね。」

「みんな行先もコースも違うのよ。」

でも、おばあちゃん、本当にこんなコースで良かったの？」

その日のはとバスのコースは。

東京タワー、東京ドームの前、しゃぶしゃぶ、そしてメインはニューハーフショーだった。

「おばあちゃん、ニューハーフショーなんて興味あったの？」

「今はテレビでもよくニューハーフの人が出ているでしょ？」

みんな楽しそうで。

こんな生き方もあるのだななんて思っていてね。

一度そういうニューハーフと呼ばれる人と話してみたくてね。

病院にいていると、非日常的なことをしたくなるものでね。

もし退院することになったら何か思い切ったことしたいとずっと思っていたわ。」

「そういうものかしらね。」

そしてバスに乗り、東京タワーへ行った。

「スカイツリーじゃなくて東京タワーで良かったの？」

「うん、東京タワーにずっと行きたかったの。
私はずっと心臓が弱くて。

あんまり高い所から下を見下ろすと衝撃が強いつも行けなかったの。
病院の先生も、今の私の心臓なら高いところから見下ろしていても大丈夫だろうと言
われていて。

東京タワー、憧れの場所だったわ。

スカイツリーと違って昔からあるしね。

それに私は東京タワーの形が好き。」

そして梨々花と奈都は東京タワーに登った。

頂上について、東京タワーから東京の街を見下ろした。

「わあ、まるで模型みたい。

面白い！

車がミニカーみたいで可愛いね。」

「おばあちゃん、元気だね。

私怖くて、下が見られない！」

「意気地なしだね、梨々花ちゃんは。

こんなにいい景色なのに。」

「こないだいい眺めがあるものだね。

おばあちゃんここにいて嬉しいわ。

長生きするとこないいいこともあるのね。」

「おばあちゃんがそんなに喜んでくれて嬉しい！

なんかおばあちゃん、女子高生みたいに元気だよ！」

そして東京ドームへ。

残念ながら東京ドームの中には入れなかった。

あくまでも入口までの案内だった。

「これが東京ドーム？」

私巨人が大好きだったからいつも病院で巨人を応援していたのよね。

東京ドームに來られて嬉しいわ。

今度來るときは観戦に來たいものだわ。

やっぱり大きいね。

よくものの例えで、東京ドーム3個分くらいとか言うでしょ？

いったいどれくらいかテレビで見ているだけではさっぱりわからなかったよ。

これで東京ドーム3個分がどれくらいかわかったよ。」

おばあちゃんは東京ドームも嬉しそうだった。

もうその頃には暗くなっていたので東京ドームの照明が綺麗で、それにもおばあちゃんは感動していた。

そしてしゃぶしゃぶを食べた。

おばあちゃんは一緒の鍋になった人とも楽しそうに話をしていた。

「おたくもお孫さんと一緒にはとバスですか？」

「そうです。」

私は九州から来ています。

普段離れて暮らしているので孫と一緒にとはとバスに乗ることができて感激していました。」

「私はね、ずっと長いこと入院していてね。

お蔭さまでやっと退院できましたね。

今日は念願の孫とはとバスですよ。」

「そうですか？」

まあ、可愛らしいお顔のお孫さんですね。」

「ええ、ええ、自慢の孫ですて。」

「おばあちゃん！

恥ずかしい！」

奈都は病院以外の人と食事をするのがなかったのでこれも幸せそうだった。

奈都はその婦人とすごく仲が良くなり、メールの交換をした。

病院に入院している人以外に友達もいなかったのだろう。

これもすごく幸せそうだった。

そして奈都が一番楽しみにしていたニューハーフの店への来店だった。

「いらつしゃい！」

まあ、つまらない、女の客ね。

今度来るときはかつこいい男の客を連れて来てよね。」

いきなりすごく太った体型の濃い化粧の人が出迎えてくれた。

この人はニューハーフではないみたいだ。

「私はおかまの、ナタリーちゃんよ。」

ニューハーフのみんなを紹介するから来て！」

ナタリーは案内役だったみたいだ。

「この金髪の女が、メリーよ。」

うちの店のナンバー3よ。

5年前にニューハーフになったの。

メリーは痩せた男がタイプよ。

誰かい人がいたら紹介してやって！」

「初めまして、メリーです。」

好きな芸能人は星崎勇人です。

勇人って可愛いと思わない？

勇人が店に来たら、頬っぺたぺロぺロしてあげたいわ。」

「ぶっ！」

梨々花は勇人がメリーにぺロぺロされることを想像したら笑いが止まらなくなった。

奈都ももちろん勇人のことを知っているので大笑いした。

「あんなたち！」

何が可笑しいのよ！

そう言えば、あなた『新源氏物語』の絵美に似ているわね。

ん？」

「よく言われます。」

梨々花の体中、じつと見るメリー。

梨々花は慌てて、目を反らした。

「そしてこの黒髪の美人がうちのナンバー2！」

清姫！

清姫は大失恋してから微笑みを無くしてしまったの。

うちに来てから一度も笑ったことないの。

優しくしてやってね。」

「清姫です。」

不愛想なニューハーフだった。

でも華やかな和服の清姫は美しかった。

「そして、当店人気ナンバー1のニューハーフを紹介します！
聖子です。」

「きゃあ、こんにちあ。

当店ナンバー1の聖子です！

きゃぴっ！」

またこのニューハーフはすぐきゃぴきゃぴしていた。

80年代アイドルみたいなフリフリの衣装を着ていた。

そして自己紹介が終わり、ニューハーフのショーが始まった。

まずメリーがSMの女王様みたいなかっこをして、鞭を叩きながら歌い出した。

メリーはセクシー路線だ。

網タイツにガーターベルト、胸元はすぐ開いて豊満な胸の谷間が見えた。

自分の体型に自信を持っているみたいだ。

そしてそのセクシーな容姿を最大限に生かしたダンスを披露した。

そして音楽が演歌になり、清姫が三味線を弾きながら歌い出した。

清姫の色気は日本人の女性特有の色気。

歌声にも艶があった。

そして次の曲は日本舞踊を妖艶に踊った。

流し目をして男の観客に媚びた。

まるで歌舞伎俳優みたいだった。

そして一切演目の間は笑わなかった。

それが清姫の売りみたいだった。

そしてトリが聖子の80年代アイドルメドレー。

みんなが絶対に知っているような80年代アイドルの曲をきゃぴきゃぴして歌う聖子。
女の子より可愛い表情、しぐさだった。

梨々花も懐かしの歌番組で80年代アイドルの曲はよく知っていたので一緒に歌った。
そしてショーが終わり、トークタイムになった。

4人のニューハーフ誰と話しても良かった。

奈都は迷わず、微笑みを忘れたニューハーフ清姫と話したかった。

「清姫さんはいつから自分は人と違うと気がついたの？」

「私の家は日本舞踊を教えている家で。

常に大勢の生徒さんが着物を着て来られていて。

いつの頃からか私は女性の着物の方が好きになって。

両親が男物の着物を着せても着せても、嫌がって。

女ものの着物じゃないと嫌だとだだをこねる子供でした。

いつか私を日本舞踊のおっしょさんにしようと思っていた両親でしたが。

私が同性しか愛せない男だとわかってからは見離してしまつて。

私も自分の生きることができる道を探し求めてやっと見つけたのがこのステージです。

両親は私のこの姿を見たらどんなに悲しむだろうと思っています。

まっとうな道を歩いて欲しかったのにね。」

「自分のことをそんな風に言うものじゃないわよ。

今のあなたは輝いていますよ！

世の中には人生に疲れた人がいっぱいいます。

そういう人があなたの妖艶な日本舞踊をここで観たらどんなに救われるか。

普通の日本舞踊じゃ得られない感動があなたの踊りにはありますよ。

あなたの日本舞踊にはどこか滑稽な笑いというものがベースにあり、そこから生まれ

る不思議な芸術があるの。

この場所でああなたの踊りを見たから得られる幸せがあるんですよ。

だから、この場所ですつと輝き続けてちょうだい。

私は今日の踊った3人であなたが一番良かったわ。」

「嬉しい！

そんなこと言われたの初めて！」

そう言つて、清姫が笑つた。

「え！

どうしたのよ、清姫！

笑つた顔なんて私初めて見たわ！」

おかまのナタリーがびっくりした。

「笑つてなんかないわ！」

笑つた自分を見られたのが恥ずかしいのか清姫はまたむつつり顔に変わった。

「失恋つてどうして？」

「私、父母の跡を継いでいた時期があつて。

日本舞踊を教えていて、その生徒さんを好きになったことがあつたんです。

その生徒さんに稽古中思いが溢れて抱きついてしまったの。

あまりに色っぽい表情だったから。

多分今までの人生で一番好きになつた相手です。

そしたら悪評が立つて、父母からは家を追い出されてしまつて。

恋も仕事も失つてしまいました。

それからもう恋なんてしないでおこうと思いました。」

「そうだったの。

辛かつたわね。

でも毎日こうして美しい舞踊をしていたら、ありのままのあなたを受け入れてくれる

素敵な男性が現れるわよ。

あなたは自分の舞踊に自信を持つといいわ。」

「本当にそんな人が現れますか！」

また清姫が笑つた。

「どうしちゃつたのよ。

微笑みを忘れたニューハーフのあなたが！

この子はそれが売りなのに余計なことしないでくれる！」

ナタリーが怒つた。

奈都は驚いたことにニューハーフの清姫とすぐ仲が良くなり帰りに清姫の名刺までもらつた。

最後に奈都と清姫で記念写真まで撮つた。

楽しかつたはとバスツアーも終わった。

「ああ、楽しかつた。

でもおばあちゃん、すごいわ。

東京タワーや東京ドームではしゃいで。

ニューハーフの人と仲良くなるわ。」

「はあ、私も楽しかつたわ。

私が病院にしたときしがつたこといっぱいできて幸せな一日だったわ。」

「おばあちゃん、ニューハーフの清姫からもらった名刺見せて！」

「はい！」

そう言つて奈都が渡した名刺は色とりどりで和風で綺麗な名刺だった。

そして裏を何気なくみたら。

なんとメールアドレスが書いてあった。

そしてこんなメッセージが書いてあった。

「良ければこれからお会いできませんか？」

「あら、私、今日一日で、九州の方とニューハーフの方の友達ができたのね。」

そう言つて大笑いした。

「おばあちゃんたら。

積極的なんだから！」

梨々花も大笑いした。

「今日は、おばあちゃんをはとバスツアーに連れて行つてくれてありがとう。

私は入院中ずっと梨々花ちゃんと東京見物に行けるのを楽しみにしていたのよ。

孫と東京見物がずっと夢でね。

私の夢を叶えてくれてありがとう。」

「おばあちゃん。

私こそ、おばあちゃんと出かけるの夢だったの。

私はずっとおばあちゃんがいなかったし。

実のお母さんが家を飛び出していなくなつてからおばあちゃんと暮らしていたけどすぐに死んじゃったし。」

「そんな辛いことがあったの。

梨々花ちゃん、これからは私があなのおばあちゃんだからね。

困ったことがあつたらなんでもおばあちゃんに言うんですよ。」

「ありがとう。

おばあちゃん、大好き！」

こうして奈都の夢も、梨々花の夢も一緒に叶つたのだ。

ドラマ「新源氏物語」は大ヒットとなり、その年で一番の視聴率になった。

それを祝つてテレビ局のパーティが催された。

主役はこのドラマで大ブレイクになった伊万里梨々花。

そしてこのドラマの脚本家の伊万里杏子だ。

当日梨々花は薄い紫のドレスを着た。

ノースリーブになっていて腰に大きなリボン、スカートの裾は四段になっている。それに白地に虹色のスパンコールの入っているストールを羽織った。

杏子は水色のワンピースを着た。

襟に小さな花がいつぱい付いていて綺麗だった。

この日は元気になった奈都も招待した。

梨々花はずっと奈都に対して悪いと思っていた。

奈都は梨々花のために、高いお金を出して、成人式に振袖を用意していのだ。

そして成人式の梨々花の振袖姿を見るのをずっと楽しみにしていたのだ。

しかし、梨々花は万梨亜の出産の時期と重なったので、成人式には結局出られなくて、振袖も無駄になったのだ。

振袖にも一度も袖を通すことがなかった。

そしてもう一つ親が喜ぶ晴れ姿は結婚式だ。

しかし、梨々花は未婚の母になってしまったので、奈都に結婚式の晴れ姿も見せてやることができなかった。

奈都の喜ぶ晴れ姿を成人式でも結婚式でも見せてやることができなかった杏子。

せめてこういった晴れがましいパーティで自分のドレスアップした姿を見せたいと思い、今日杏子は奈都を招待した。

「まあ、杏子。

なんて綺麗。」

「この日のためにこの水色のワンピースを買ったの。」

メイクは普段付き合いのあるメイクアップアーティストの人にメイクしてもらったのよ。

髪の設定も編み込みを頼んだの。」

「杏子、とっても綺麗よ。」

お母さん、鼻が高いわ。

私は、杏子の成人式の振袖姿も、結婚式のウェディングドレス姿も見られなかったから。

こんな綺麗な杏子が見られるなんて。

しかも仕事で大成功して。

こんなすごいパーティに呼んでもらえるなんて。

お母さん、こんな晴れがましい席に呼んでもらえるなんて、夢みたいよ。それに私にまでドレスをプレゼントしてもらって。

こんなおめかしたの生まれて初めてよ。」

杏子はこのパーティのために奈都に高級ドレスをプレゼントした。

光沢のある薄い茶色のワンピースだ。

「お母さん、今日は立食パーティよ。

ここにあるお料理全部食べ放題よ。

どんどん食べてね。」

「お母さん、こんなパーティ生まれて初めてよ。

何をどうしたらいいのか。」

「じゃあ、私が適当に見繕って取って来てあげる。」

そう言って杏子はサーモンや肉を取りに行って奈都に渡した。

「梨々花ちゃんも綺麗。」

こんな可愛い孫がいるなんておばあちゃん鼻が高いわ。」

「おばあちゃんも、すごく綺麗よ。」

このワンピースすごく似合っている。」

「おばあちゃん、こんな幸せなことってないわ。

梨々花ちゃんみたいな孫ができただけでも幸せなのに。

こんなパーティに呼ばれるなんて。

病院にいた頃はこんな日が来るなんて夢にも思ってたわ。」

「おばあちゃん、今日は楽しんで帰ってね。」

そして主催者の挨拶が始まった。

「このたびは我テレビ局のドラマ『新源氏物語』の大ヒット祝いのパーティに来ていただきありがとうございます。ただいまです。」

まずは今日の主役でもある伊万里杏子さんの挨拶からさせていただきます。

伊万里さん、どうぞ。」

「本日は『新源氏物語』大ヒット祝いのパーティにいらしていただきまして、誠にありがとうございます。」

このドラマは出演者みんなが幸せになって欲しくて書きました。

それはドラマの中でもそうですし、現実の世界でも幸せになって欲しくて。

このドラマのキーワードはいつだって『幸せ』でした。

主人公茂人は自分の幸せを求めて恋愛遍歴を繰り返します。

時には自分の幸せを追い求めるあまり好きになった女の人を不幸にします。

でもただ一人、友達という立場で、そんな茂人を見守っている女がいました。

それが絵美です。

絵美は魔法使いです。

絵美の魔法で茂人だけじゃなく茂人が好きになった女の人にも幸せにしていきます。

女の人たちは絵美と出会うことにより茂人を好きになり過ぎて変になっていたのに正常になっていきます。

絵美の魔法がこのドラマを根底から支えていたのです。

このドラマが成功したのは絵美の愛があったからです。

そんな絵美の強さ、絵美の純真さを巧みに演じてくれた絵美役の伊万里梨々花に皆さん、拍手をお願いします。

梨々花さん、こちらへ。」

「伊万里梨々花です。」

梨々花は深くお辞儀をした。

会場から割れんばかりの拍手が起きた。

「そしてそんな茂人を愛しすぎておかしくなった女の人を巧みに演じた、廣崎レイナさんとみくにさんも、来てください。」

「唐崎レイナです。」

「みくにです。」

「この二人の悪役のすごさがなかったら、ここまでいいドラマにはなりませんでした。そして悪い部分だけじゃなく絵美と関わるにより柔らかくなっていくさまをうまく表現してくれました。

この二人にも拍手をお願いします。」

一層すごい拍手になった。

「そして忘れてはならないのが主人公の茂人を演じた星崎勇人です。

女の人を一瞬にしてだめにしてしまいそうな、何とも言えない妖艶な色気、これを茂

人君が高校生ながら好演してくれました。

この茂人の色気がなかったらここまで視聴者を夢中にさせることができなかったと思います。

星崎勇人君もここに来てください。」

「星崎勇人です。」

今日一番の拍手が起きた。

杏子が人前に出て、挨拶をして。

梨々花も人前に出て、大きな拍手をもらって。

それを見ていた奈都は涙が止まらなくなった。

挨拶が終わってから、梨々花と杏子はずっと奈都のところへ行き、料理を取ってきたり世話をやいた。

そして須藤裕子、唐崎レイナ、みくにといい今をときめく女優さんたちを連れて来た。これにも奈都はすごく感激していた。

梨々花はこっそり、勇人のところへ行った。

「勇人君、礼服が似合っているね。」

そう言ったら勇人は梨々花をじっと見つめた。

髪もメイクもプロの人にしてもらって。

薄紫の可愛いドレスを着せてもらって。

梨々花は普段の何倍も美しく見えたので。

勇人は眩しくて目を反らしてしまう。

「梨々花ちゃんも可愛いよ。」

いつもよりずっと可愛い。」

「失礼ね、いつもは可愛くないみたいな言い方。」

「いつも可愛いけど、それ以上に可愛い。」

「ありがとう。」

梨々花は勇人に可愛いなんて言われて照れた。

「あの、お願いがあるの。」

今日、おばあちゃんが来ているの。

会ってくれないかな。」

「梨々花のおばあちゃん？」

「うん、血は繋がってないんだけど。」

でもいつも血が繋がっている以上に私を愛してくれる大好きなおばあちゃんなんだ。おばあちゃんに勇人を紹介したくて。」

「わかった、行くよ。」

梨々花は勇人を奈都に紹介した。

「おばあちゃん、私のドラマの相手役星崎勇人さん。」

そして私の彼氏なの。」

こっそり奈都に耳打ちした。

「か、彼氏！」

もちろん『新源氏物語』は見ていたし、星崎さんのことはよく知っていたけど。まさか付き合っていたなんて！」

「すごく私に優しくしてくれるのよ。」

「そうですか？」

いつも梨々花がお世話になりました。

こんな孫ですが、どうぞこれからも仲良くしてやってくださいね。」

そう言って勇人の手を握り、奈都はまた泣き出した。

「梨々花はこんなべっぴんさんの女優さんになって。」

彼氏ができて。

しかもこんなカッコいい星崎さん。

杏子も脚本家として成功して。

おばあちゃん、こんなに幸せでいいのかしら。

心臓が治っただけでもこんな幸せなことないと思っていたのに。」

奈都はずっと感激して泣いていた。

でもそんな幸せが長くは続かないこと、この時は誰も知らなかった。

梨々花はそれから売れっ子になり忙しい日々を送っていた。

ある日、梨々花がトーク番組の収録が終わり、テレビ局を出ようとしたら。

「困ります！」

ここは関係者以外は入れません！」

「私は伊万里梨々花の実の母なんだってば！」

「そんな嘘は通じません！

これ以上入らないでください！

ここから先は芸能関係者しか入れなくなっています！」

「お腹を痛めて産んだ娘に会うのに私が関係者じゃないなんて言うの！

私はあの子の立派な関係者です！」

梨々花は大騒ぎになっている方へ歩み寄った。

「静音！

静音！

お母さんよ！

覚えているだろ！

あんたの母さんだよ！」

数人のスタッフに抑えられている女性は、梨々花の産みの母良子だった。

あの包丁を振り回して自分を殺そうとした実の母親良子だった。

あの事件以来、姿をくらまして、行方不明になっていた。

それが今になってこうして現れたのだ。

「嘘を言うな！

梨々花は伊万里杏子先生の娘さんだ。

何が母親だ！」

「おい、こいつをつまみ出せ！」

「静音！

お母さんがこんなに困っているのに知らんぷりか！

お前はそんな薄情な子になってしまったのかい！」

梨々花は記憶が蘇った。

やまんばみたいになり、部屋中追いかけまわした母親を。

自分のことを産まなければ良かった、産むんじゃないかという母親を。

でも気がついたらこう言っていた。

「ごめんなさい。

その人を離してあげて！

私の母親です。」

周囲のスタッフはビックリしていた。

「ありがとう。」

あんたはやっぱり優しい子だね。

昔とちつとも変ってないね。

困っている人を見たら放っておけない性格だったもんね。

誰に似たのか学校の成績も素行も良かったし。

最もあんまりあんたが私にもだんなにも似ないで出来がいいのでだんなに本当に俺の子か疑われたけどね。」

「用件はなんですか？」

忙しいので帰りますよ。」

「10年ぶりくらいに会ったのに、なんて愛想のない。」

私はてつきり、私と会ったら涙を流して喜んでくれると思ったよ。」

「私にはもう家族がいます。」

伊万里杏子という脚本家。

そしてその母、私の祖父の奈都。」

「そんな冷たいこと言わないでよ。」

私はあんたとまた一緒に暮らそうと思って今日、ここに来たのにさ。」

「一緒に暮らすですって！」

私をあの時、置いて行った癖に。

私、あの後、ずっとあなたを待っていました。

でもいつまで待ってもあなたは結局戻って来なかった。」

「あんた、私があんなひどいことしたのに待ってくれていたのかい！」

私はてつきり私とはもう二度と会いたくないとばかり思っていた。」

梨々花は。

あの包丁で追い回されけがをした後も、やっぱり実の母親に戻って来て欲しくて。

ずっと泣いて待っていた。

お母さんが改心して戻って来てくれるのを。

そんな絶望の中救ってくれたのがあの妄想の友達茜だった。

「静音、今日ここに来たのは、もう一度お前と暮らしたいから。」

もう一度私にお前と暮らすチャンスをくれないかい？

あれから私は反省したのよ。

馬鹿なことしてしまったなってね。

あれから一日もお前のことを忘れたことなんてなかったよ。

お前が元気にしているかずっと案じていたよ。

ずっとお前と暮らしたいって思っていて。

お前がテレビドラマに出た時にすぐわかった。

お前が静音だって。

お前は顔が全然変わってなくて。

でも名前が伊万里梨々花になっていて。

おかしいと思つて探偵を雇つて調べた。

そしたらやっぱり静音だとわかつて。

伊万里杏子という脚本家に養女に行つていたこともわかつて。

戸籍だけの縁なんて所詮もういものだよ。

やっぱり自分の腹を痛めて産んだ娘の方が可愛いに決まっている。

杏子には本当の娘がいるだろ？

お前なんて所詮その娘の代りだよ。

娘の代りだと思つてお情けで育ててるいるだけだよ。」

「お母さんを悪く言わないで！」

「ほう、あっちの方をお母さん呼ばわりかい！

情けないね。

そんな薄情な女になつてしまつて。

お前だつて金持ちだからあの女の子どものふりをしているだけだろ？」

「私は杏子お母さんが一文無しだったとしても一緒に暮らしたいわ！」

「全く親不孝な娘だよ。

実の母の前で、義理の母をお母さん呼ばわりしてさ！」

「私はあなたと暮らす気なんてありません！」

「お母さん、最近、体の調子が悪くてね。

もう先が長くないかも知れないよ。

それでもあんな女の子もでいる気かい！」

「本当なの？

お母さん体がどこか悪いの？」

「もう医者には先は長くないと言われている。

だから死ぬ前にお前に会いに来た。

それなのになんてひどい仕打ちだ。

血も繋がっていない女のことをお母さんだなんて。」

「杏子お母さんに、今日から、お母さんの元で暮らすって言いわ。

病院の治療費とかどうしているの？

お金がかかるでしょ？」

「朝から深夜まで掛け持ちで働いていた頃があつてね。

その時のお金を使っている。」

「お母さん、そんなに苦勞していたの？

私、何も知らなくて。

ごめん、お母さん。

私だけ幸せになってしまっていて。

ちよつと待ってお母さん。

お金をおろしてくる。」

梨々花はそう言って、多額のお金をおろしてきた。

「これを使ってお母さん。

今CM契約もあるし、いっぱいお金があるの。

病院でいるお金あげるしね。

いつでも言って、お母さん。」

「これは受け取れないよ。

お前が一生懸命働いて稼いだお金を使うわけには。」

「水臭いこと言わないでよ。

私たち親子じゃない！

お母さんは何も心配しないで治療に専念して！

でもこんなに出歩いていでも大丈夫なの？

病氣ひどいでしょ？」

「お前に会いたい一心で、来ていたんだよ。

実はえらくてね。」

「家、どこ？」

送って行つてあげる。」

梨々花はタクシーチケットを事務所からもらっていたのでそれを使って良子の家まで送って行つた。

「お前はお母さん孝行だね。

こんな親孝行ないよ。」

「このタクシーチケットお母さんにあげる。

だから具合が悪くなつたらいつでも使つてね。

無くなつたらいつでもいつてね。

またあげるしね。」

「芸能人つてのは恵まれているね。

驚いたよ。」

「お母さん。

このお金は受け取つて。」

「これは受け取れないと言つているだろ？」

「芸能人つてのは桁違いに儲かる仕事なのよ。

だからこれくらいなんてことないの！」

「そうかい？」

じゃあ、お言葉に甘えようかね。」

良子が住んでいるのは結構いいマンションだった。

梨々花はもっとひどい暮らしを想像していた。

部屋はどうせ足の踏み場もないくらい散らかつていて汚いのだろうと思った。

でも部屋に入つてみたら。

「綺麗！」

きちんと片付いている。

それに立派なものがいっぱい置いている。」

部屋は綺麗に掃除されていて、ゴミひとつ落ちていない。

決して広い部屋ではないが大きなテレビ、システムキッチン、大きなソファ。

以前一緒に暮らしていた頃は着るものが床に散らばっていたが、きちんと衣類も片づ

けられているみだだった。

「お母さんは何をして暮らしているの？」

「私あれから反省したのよ。」

だから、ちゃんと生きないとなって思ってたね。

今はビルの清掃の仕事をしているの。

一日働けるのでそこそこの金は貰える。

いつかお金を貯めてお前と暮らしたいと思えば頑張れた。」

「お母さん、私が考えていた以上にちゃんと暮らしていたのね。良かった。」

「料理もきちんとできるようになろうと思ってたね。」

料理も覚えたよ。

ちよつと待っていて。

煮物をこしらえてあげるから。」

そう言って、良子は慣れた手つきで煮物を作り始めた。

昔暮らしていた頃はいつもカップラーメンばかりだった。

まともな料理は幼い梨花花が作っていた。

だから良子のちゃんとした料理を食べる時が来るなんて思いもしなかった。

「うわあ、美味しそう、それにいい匂い！」

「だろ？」

あれから反省して料理を勉強した。

料理教室にも通ってたね。」

そのお味は。

「すごく美味しい！」

味付けが最高！」

「だろ？」

私の得意料理だよ。」

「お母さん、掃除や洗濯もきちんとするようになったのね。」

「ああ、あの頃とは違うよ。」

いつかお前と暮らせる時にいいお母さんになっていられるように、料理も掃除も洗濯も頑張った。

あの頃の私とは別人になった。

だから一緒に暮らさないかい？」

「お母さん。」

私が知らない間に私のことを考えてくれていたのね。

こんなに変わっちゃって。」

梨々花は泣き出してしまった。

「お前はせっかく私が考えてつけた名前を捨ててまで生きていて。

お母さん、その時、どんな気持ちだったと思う？

あれほど惨めな思いをしたの初めてだったよ。」

「ごめんなさい。」

お母さん！

てつきり私、お母さんに捨てられたと思って生きてきたの。

お母さん、私と暮らせるようにこんなに頑張っているなんて思いもしなくて。」

「私はお前といつか暮らせる日だけを夢見て色んなこと頑張ったんだよ。

あんなにひどかった男癖もおっただんだ。

あれから誰とも付き合うこともなかった。

お前に悪いことしたとずっと反省していて。」

「お母さん！

ごめんなさい。

これからは私と一緒に暮らそう？

私頑張って働いて、お母さんを楽させてあげるから。

私のお金でお母さんの病気を治してあげるから。」

「静音！

やっと目が覚めたみたいだね。

そうとも、あんたの母親は私しかないから！」

梨々花は。

また良子と暮らすことを決心した。

その日家に帰って、杏子と奈都に、今日起きたことを話した。

梨々花の話を聴いて、杏子は怒った。

「そんなの嘘に決まっているじゃない！

梨々花騙されているのよ！

梨々花にあんなにひどいことをしておいて今更、一緒に暮らしたいだなんて！

あんなお母さんと二度と会ってはだめよ！」

奈都も怒って言った。

「そうだよ。」

梨々花ちゃんが有名人になったものだから、自分の娘にしなくなったのよ。そんな人の言うこと本気にしたらだめ！

あんな人と関わるのはやめなさい！

もう二度と会ったらだめ！」

「お母さんもおばあちゃんもひどい！

お母さんは料理も掃除も洗濯もきちんとしていた。

生まれ変わったのよ。

もうあの頃のひどいお母さんじゃないの！

お母さん私と暮らす日を夢見て暮らして来たのよ。

なのにそんな言い方ひどいじゃない！

私の本当のお母さんだからそんなひどいこと言わないで！

私の本当のお母さんなの。

私の本当の。」

そう言って梨々花は泣き出した。

「梨々花。」

本当は、自分の産んだ本当のお母さんと暮らしたいのね。」

「そうなの。」

お母さん、もうすぐ死んじゃうらしいの。

病気がひどくて。

だから本当のお母さんと暮らしたい。

ごめんなさい。

杏子お母さん、おばあちゃん。

二人とも大好きだけど、やっぱり私は本当のお母さんが放っておけないの。本当のお母さんと一緒に暮らしたい！」

「これは梨々花が決めることね。」

私たちは梨々花と血は繋がってないし、どうこう言う権利はないわ。」

「杏子！」

何を言うの！

私たちは血の繋がっている家族以上に梨々花を愛しているわ。

そんな10年も梨々花を放っておいた実の母親以上にね！」

「これは梨々花が決めること。

だから梨々花の判断に任しましょう。

梨々花、実のお母さんと暮らしたいのね。」

「うん。

やっぱり本当のお母さんのそばにいたい。」

「じゃあ、そうしなさい！

でもじっくりと考えて決めること。

そして一回決めたらそれをやり遂げること。

わかった？

梨々花。

それにもうあなたは梨々花じゃなくなるの。

静音に戻るのよ。

芸名は梨々花の方がいいと思うけど。」

「私も芸名は梨々花のままにしようと思っている。

でも戸籍は静音に戻ろうと思っている。」

こうして梨々花は静音に戻り、実の母親、良子と暮らすことになった。

「梨々花。

最後に抱きしめさせてね。」

杏子はずっと本当の娘だと思つて、毎晩、梨々花が寂しい思いをしないように、ダブルベッドで抱きしめて眠ってきた。

実の母親にやまhibaみたいに追いかけられ殺されそうになる夢を見ないようにと願いを込めて。

「もう梨々花をこんな風に抱きしめて眠れないのね。

これからは本当のお母さんに抱きしめられて眠ってね。

梨々花：

梨々花！」

杏子は梨々花を抱きしめて泣いた。

「梨々花ちゃん。

辛いことがあったらいつでもこの家に戻っておいで。

この先梨々花ちゃんに何があっても私はずっと梨々花ちゃんのおばあちゃんにいるからね。」

「お母さん、梨々花の家族は産みの母の良子さんだけですよ。

そんなこと言わないで。」

「私は残念ではないのよ。

こんなに優しく可愛い孫ができたのに。

神様はどうして私からこんな可愛い天使を奪ってしまうのだろうね。

せつかく杏子と梨々花ちゃんと私とで楽しく生活していたのに。

梨々花ちゃん！

悲しいことがあったら本当にいつでも私のところに来て！

あなたはやっぱり私の可愛い孫であることには変わりはないんだから！」

「おばあちゃん！

そんな優しいこと言わないでよ！」

梨々花と奈都は抱きしめ合って号泣した。

これだけ自分を愛してくれる家族と別れて暮らさないといけないのだ。

杏子の魔法でさまざまなものを手に入れることができた。

実の母親に追いかけられ殺されそうになる夢を見ないようにと毎晩ダブルベッドの上で抱きしめてくれたあのぬくもり。

包丁恐怖症になった梨々花。

その病気を愛で治してくれたもの杏子だった。

そして杏子の友達の娘、江梨香。

杏子がいなかったら江梨香と知り合うこともなかったし、友達になることもなかった。

茜という妄想の友達に取りつかれていた梨々花。

茜を梨々花の頭から消してくれたのが江梨香だった。

クラスメイトにいじめられているところを助けてくれて。

また江梨香が梨々花に演劇の素晴らしさを教えてくれた。

江梨香がいなかったらこうしてドラマに出演することもなかった。

こんな宝物の江梨香と出会わせてくれたもの杏子だった。

そしてそのドラマを通じて裕子やみくという友達ができた。

そして杏子の娘になって初めて迎える誕生日のサプライズパーティーに勇人を呼んでくれたもの杏子だった。

杏子があの時勇人を紹介してくれなかったら、こうして勇人と恋人になることもなかったと思う。

梨々花の年上の男の人ばかり愛してしまう悪い癖も勇人のおかげで治った。

そしておばあちゃん。

おばあちゃんも深い愛で梨々花を愛してくれた。

全部杏子の魔法だった。

杏子が魔法使いになって一人ぼっちだった梨々花を幸せにしてくれたのだ。

梨々花という可愛い名前を命名してくれたのも杏子だった。

でも今日からは梨々花じゃなく静音として生きて行かなければならないのだ。

「梨々花。」

これからはもう包丁恐怖症になったりしない？

ちゃんと包丁が握れる？」

「うん、握れる。」

「もうお母さんに追い回され殺されそうになる夢、見たりしない？」

「大丈夫。」

そのお母さんと暮らすもの。」

「もう学校の結婚している先生を好きになったりしない？」

「私には勇人がいるわ。」

勇人が私の悪い癖、治してくれたの。」

「もうこれからはお母さんとうまくいかなくなくても逃げる場所もないの。」

それで本当にいいのね。」

「もう私、前みたいに逃げたりしない。」

どんな困難だって乗り越えて見せる。」

「それともう、あなたは梨々花じゃないの。」

静音として一生生きていける？」

「私は今から静音よ。」

自覚を持って強く生きていくわ。」

「梨々花あ！」

梨々花！

ごめん。

最後にもう一度あなたの名前を呼ばせて！

そしてもう一度抱きしめさせて！」

そう言って泣きながら杏子は梨々花を抱きしめた。

そばでずっと奈都も泣いていた。

こうして梨々花は静音に戻って行った。

静音は良子と暮らすことになった。

しかし、こんなことが起きた。

ある日、静音が食費を銀行のキャッシュカードでおろそうとした時のことだった。マイナス 50 万円になっていたのだ。

何かの間違いじゃないかと何度も画面を見たが間違いがない。

静音は今まで働いて貯めたお金を全部同じ銀行に預けていた。

それが全部消えて、挙句の果てに 50 万もマイナスになっていたのだ。

通帳を預けていたのは良子だった。

良子が引き出したのに違いなかった。

静音がメールを送っても良子は全然返信を返さない。

急いでマンションに帰った。

するとマンションは。

もぬけの殻だった。

引越したのか何も残っていない。

しばらくすると良子からメールがあった。

引越したのでこちらに来て欲しいとあった。

住所はメールに載せられていた。

良子の言う通りに行ったマンションは、すごい高級マンションだった。しばらくすると、良子がマンションの玄関に来た。

「今日から、ここで住むからね。」

「何を言っているの、お母さん！」

そんな勝手に！

私とは何の相談も無しに！」

「あんたはお金があるから、それだけの場所に住まないといけないよ。

それにあんたのお金で親孝行して、いいマンションに住まわしてあげようなんて考えないの！」

「お母さん！

この仕事は明日どうなるかわからない仕事なのよ。

突然私の人気なくなることもあるし。

だから稼げるうちに稼いでお金を貯金しておかないと。

ちよつとお金が入ったからってこんな贅沢な暮らしできないのよ。」

「あんたは死にかけている母にちよつとでも贅沢な暮らしさせてあげようと思わないのかね。」

「それは…」

「決まりね。

もう引越しもしたんだから、ここに住むしかないよ。

それと、あんたに紹介したい人がいるの。

さあさ、部屋に入って。

静音は仕方なしに部屋に入った。

すると、部屋中、電化製品が新品に変わっていた。

どれも最新式の高そうなものばかり。

部屋のソファには見知らぬ派手な身なりの男が座っていた。

「紹介するよ。

今日からあんたのお父さんになる溝口健三さん。」

それは母より10年は若い男だった。

「き、聞いてない！

私はてつきり、お母さんと二人で暮らすとばかり思っていて。」

「籍は入れてないのよ。

もうすぐ一緒に暮らすのよね？

健ちゃん？」

「お母さん、私の籍はどうするの？」

まだ入れないの？」

「誰があんたをまた籍に入れるって言ったの！」

私はあんたとは籍は入れないよ！」

あんたが私の子どもになると、再婚が難しいしね。」

「なんですって！」

私をまた子供にしてくれないのね！」

「誰がそんなこと言ったの！」

あんたは私の子どもにならないの。

あんたはただの私の稼ぎ手よ。

ビルの清掃の仕事も辞めてきたよ。

今日から私はあんたが稼いだお金で贅沢させてもらうよ！」

嫌な予感のした静音は、ひよつとして、そう思っ

て。静音は急いで奥の部屋に入った。

そこは夫婦の寝室になっていた。

上等なダブルベッドがあった。

派手で高そうなベッドカバーがかけてあった。

ドレッサーは。

何着もの上等な服がいっぱいかかっていた。

鏡台の引き出しを開けたら、高級なアクセサリがいっぱい入っていた。

鏡台には高そうな化粧品や香水がズラリと並んでいた。

「これ、全部、今日買ったの？」

だから私の貯金マイナス 50 万になっていたのね！」

「あんたのものは私のものだよ。

どう使おうと私の勝手だよ。

しかしあんたはもつと金持ちだと思っていたよ。

これしきの買物でマイナスになるとはね。

あんたにはもつともつと稼いでもらうよ。」

「お金目当てで私に近づいたのね！」

ひどいわ！」

「何を人聞きの悪いことを言うの！」

実の母親に向かつて！

これから、私と健ちゃんはフランス料理を食べに行ってくるしね。

あんたは家でこれでも食べてなさい！」

そう言つて、良子はカップラーメンを静音に投げつけた。

次の日も、その次の日も、良子は高級品の買い物に出かけた。

そして相変わらず健三と食事に出かけた。

ある日、静音は怒つて言った。

「こんなに毎日外食していたら、私のお金だつて底をつきるわよ！

お母さん、料理上手に作れるようになったじゃないの！」

「ああ、あれは、年下の可愛い健ちゃんに嫌われたくないので必死に、料理を勉強したのよ。

私は男を手に入れるためなら掃除だつて洗濯だつて料理だつて努力するのよ。」

「なんですって！

私と暮らすために掃除や洗濯、料理を頑張つたつて言っていたじゃないの！」

「そんな、あんたなんかのために家事を頑張るわけじゃない！」

騙されるあんたが悪いのよ！」

その後も湯水のように静音の働いたお金を使う良子。

静音は幸い、好感度が高くなっていたのでCMの本数が増え、バラエティ番組やトーク番組の依頼がいっぱいあった。

しかし、そんな静音の人氣が一気に下がってしまう出来事が起きた。

ある日バラエティ番組の依頼があり、楽屋にいた時のこと。

「大変だ！

静音！

お前、この記事知っていたか！」

静音のマネージャーが血相変えて入って来た。

マネージャーが手にしていたのは週刊誌だった。

その週刊誌の表紙に書いてある文字を見て、静音は凍り付いてしまった。

「人氣女優伊万里梨々花、泥沼不倫の過去！」

恐る恐るその記事が載っているページを読んだ。

「人氣女優伊万里梨々花は伊万里杏子の養女だった。」

「伊万里梨々花は中学校の頃の担任の教師の養女になったが、その後、その教師と不倫関係になり、教師の妻に家を追い出された。」

「その他にも、伊万里梨々花は可愛げがなかったので、一度養女になるもまた児童養護施設に送り返される過去もある。」

「同居していた妹をいじめていた過去もある。」

静音にとって不利な記事ばかりだった。

第一、伊万里梨々花は、脚本家伊万里杏子の実の子どもだということになっていたのだ。

このことも世間をずっと騙していたことになるのだ。

しかしどうしてこんな内密にしていたことばかりが明るみになったのだ。

一つだけ心当たりがあるとしたらたったひとつだけ。

良子だ。

バラエティ番組は生放送だった。

生放送のある日にこんな大スクープが出てしまった。

急遽、静音は今日の収録に出なくていいことになった。

そして、家に帰ろうとしたら。

すごい数の報道陣。

「梨々花さん！」

その義理のお父さんとは今も連絡を取っているのですか？」

「あの週刊誌の記事は全部本当でしょ？」

「伊万里杏子さんはあの記事のこと全部知っておられますか？」

「今まで世間を騙していたのですか？」

「梨々花さんにいじめられていた妹さん、今はどうしておられるんですか？」

梨々花は目の前が真っ暗になった。

これで終わりだ。

もう仕事もなくなる。

静音もたったひとつのスキヤンダルでも、仕事を全部なくし、芸能界で生きられなくなったタレントを何人も見てきた。

こんなたくさんのスキヤンダルだ。

どれだけの梨々花のファンを傷つけることになるだろう。

その日から、静音の契約していたCMは全部なくなった。
バラエティ番組もトーク番組も一切声がかからなくなった。

次のクールから主演になる予定だったドラマも違う女優が主演になった。

「これ、お母さんね。」

お母さんが全部、ばらしたのね。」

「そうだよ。」

探偵を雇って、あんたのあれからを調べさせてもらったのだよ。

あんたも相当悪いことばかりやっているね。

父親になってもらった相手と不倫したり、養女になった家族の妹にいじめをしたり。」

「どうして！」

私、そのせいで仕事全部無くなったのよ！」

「だって週刊誌の記者の方から私に歩み寄って来てよ。」

本当のことを言ったら、お金をくれるって！」

「お金を目がくらんで、調べたこと全部話したのね！」

「お蔭様で当分、贅沢ができるよ。」

あんたに少ない給金で稼いでもらう以上にね。」

そう言って良子は高笑いをする。

静音の不幸はこれくらいでは済まなかった。

ある日家に居たらマネージャーから電話がかかってきた。

当分仕事がないと言われていたのに可笑しいなと思い、電話に出た。

「大変だ。」

最近、仕事が減っただろ？

あんなことがあったから給料が減ってしょうがないのに。

お前の実の母親が、給料をあげなきゃ訴訟を起こすと言ってきた。

そしてまずいことにこれがまた記事になった。

そして更にまずいことにお前の母親の過去も記事になった。

お前の母親相当男癖が悪いよな。

お前のこと邪魔だとか産まなきゃ良かったとか相手の男にも相当言っていたらしくて。

今までの男性遍歴が全部記事になったよ。」

「なんですって！」

お母さんのことまで記事になったの？」

静音はもう芸能界では二度と生きていけないと思った。

その上、よせばいいのに良子はワイドショー番組でゲスト出演して、話したりしている。

いかに静音が働いたか話している。

それなのに給料が減った、もつと給料を上げて欲しいと語る。

静音は買い物に行くのも億劫になってきた。

スーパーで買い物していると、見知らぬおばさんに声をかけられる。

「あらまあ、可哀想に。」

まだ高校生なのに家事を全部しているのね。

あのお母さんの子どもに生まれて可哀想ね。

お母さん、料理も作ってくれないのね。」

また違うおばあんにも、こんなことを言われる。

「子供は親を選べないしね。」

可哀想な子だよ。

邪魔だとか産まなきゃ良かったとか言われて育ったのね。

だからいじめをする子になってしまったのね。」

静音はどこも居場所が無くなった。

そんなある日あの病気が復活した。

静音が夜眠っていると、あの声が聞えてくる。

「静音、あんたはいらない子だよ。」

あんたなんか産まなきゃ良かった。

あんたがいるから私はあの人と付き合ってもらえないのよ！

お前なんて死ねばいい！」

やまんばになった良子は部屋中、逃げ惑う静音を追い回す。

「お前なんて死んでしまえ！」

「やめて！」

お母さん！

お母さーーーーーん！

怖い！

助けて！

助けて！

お母さん！」

その時静音の頭に浮かんだのは。

いつも悪夢を見ないように抱きしめて眠ってくれた杏子お母さんだった。

目が覚めた静音は。

気がついたらパジャマのままで素足のままで部屋を飛び出していた。

何キロ歩いただろう。

静音はいつしか梨々花に戻り、以前住んでいた杏子と奈都のいるマンションの前に立っていた。

その日は雨が降っていた。

すべてのことに疲れ果てた梨々花は玄関先でしゃがみこんでしまった。

梨々花は温かいベッドの上にいた。

そう、あの杏子と眠っていたダブルベッド。

もう二度とあのダブルベッドに眠ることなんてないと思っていた。

でもまた戻ってこられた。

温かく優しい手が梨々花の頬に触れる。

梨々花は風邪をひいたのか頭が痛かったが温かく優しい手に触れると頭の痛みが和らいだ。

目をうつすらと開けると杏子がいた。

杏子が心配そうにこつちを見ている。

「もう大丈夫よ。

やまんばはここにはいないわ。」

何度もそう言う杏子。

「ずっとここにいて。

梨々花。」

そんな言葉も聞こえてきた。

どれくらい眠ったのだろう。

そう言えば最近、寝つきが悪くて、ちゃんと眠った日が少なかった。

そしてすごく気分が良くなり目が開いた。

すると、杏子がぎゅっと梨々花の手を握りしめていた。

「梨々花、やっと気がついたのね！」

あなた、20キロぐらい離れているこの家までパジャマのまま素足のままで歩いてきたのよ。

足が傷だらけになっていたし、雨でパジャマはびしょびしょで。

ひどい風邪で熱も出ていたし。

玄関で倒れていたのよ。

丸二日ずっと眠り続けていたのよ。

「梨々花ちゃん。

こんなになつて。

もつと早くにあのひどい家から梨々花ちゃんを奪ってきたら良かった。」

「梨々花の過去のことを話したのもあの母親だってわかっていたし。

梨々花の給料を上げるように訴訟を起こそうとしたり、ワイドショー番組で好き勝手話したり、目に余っていたし、梨々花が来なくても、もうそろそろ私たちが梨々花を救いに行こうと思っていた矢先だったのよ。」

「お母さん、おばあちゃん、私、ここにいていいの？」

「私たちからそう梨々花に頼みたいくらいよ。

梨々花がいなかったらやっぱり家が寂しくてね。

寂しくて寂しくて、毎晩私たちが泣いていたの。

何度、梨々花を取り戻しに行こうと思ったことか。

でも気丈な梨々花のことだから耐えて、実のお母さんのそばにいたいと思って。そんなお母さんだから逆に放っておけなかったでしょう？」

「うん。

ひどいお母さんだけど、やっぱり私の実のお母さんだから。

でももう我慢の限界がきて。」

梨々花は杏子の胸に頭をうずめて泣き出した。

「よく耐えたよ。

でももう我慢しなくていいのよ、梨々花。

ワイドショーだってギャラが貰えるから出ているみたいだし。

娘を人間扱いしないあんな母親。」

「杏子お母さん、良子お母さんのことそんなにひどく言わないで。」

「あんたはこんなことになってもまだあのお母さんのことかばうのね。でも逆にそれが良くないわね。」

杏子と梨々花が話していると、ドンドンドンと玄関のドアを誰かが叩く音がした。

「梨々花さん！」

杏子さんの元に帰られていますね！」

「あのお騒がせお母さんの元へは戻られませんか？」

「当然、ここで暮らすおつもりですか？」

「あのお騒がせお母さんとは縁を切られますか？」

「やっぱりお母さんの男癖が原因ですか？」

「開けてください！」

これからの生活についてお話してください。」

ワイドショーの記者たちだ。

記者たちは朝昼晩とずっと居座った。

「仕方ないね。」

あんたは今渦中の人だからね。

このままでは私たちがおかしくなっちゃう。

明日、私たち親子二人で記者会見を開きましょう。

これからのこと、マスメディアを通じて発表しましょう。」

その次の日、マスコミがいっぱい入れるような大きな会場で杏子と梨々花で記者会見を開いた。

杏子と梨々花の座る長机には数えきれないほどのマイク。

杏子と梨々花が入ってくるとものすごい数のフラッシュがたかれた。

梨々花にとっては過酷な質問が飛び交った。

「梨々花さん。」

まず不倫をされていたことの質問です。

あなたは中学の頃の担任の先生だった方に引き取られ養女となりましたね。

その先生と不倫関係があったのは本当ですか？」

「不倫なんかじゃありません。」

私の方の一方的な片思いでした。

親身になって接してくださった先生にいつしか恋心が芽生えて。

最初は私自身も父親として先生のことを好きなのだと思っていました。

もちろん先生のような素晴らしい方が父になってくれたのも嬉しかったし、父としても愛していたのですが。

一緒に暮らしているうちに次第に異性として意識してしまつて。

欲張りな私は父親になつてくれた先生に恋人にもなつて欲しくなつてしまいました。

そして気がついたら父親にキスを私からしていました。

母親を傷つけるつもりなんてなかったのに。」

「今、その先生はあれから奥さんとうまういなくなつて離婚されたこともご存じでしたか？」

それは梨々花も知らなかった。

自分のした過ちのせいであんなに仲の良かった先生夫婦を不幸にしてしまつていたのだ。

梨々花は動揺してしまい真つ青な顔になつてしまった。

杏子が梨々花の手を握つた。

私がついている、頑張れというメッセージを込めて強く手を握る杏子。

「全然知りませんでした。

この場を借りて本当のことを言います。

全部私が一方的にしたことです。

先生は最後まで先生であり父親でした。

キスも拒んでいたのに無理やりしました。

それが私はわかつていました。

私のことは父親、先生、以上の感情は何もないって。

それでも、わかつていても抑えられなかったのは私だけでした。

だからこの会見を見ておられる先生の奥さん、先生とよりを戻してあげてください。

先生は何も悪くありません。

たった一度私が先生の唇を奪つただけのことです。

あれは事故です。」

「ほう、父親の唇を無理やり奪つたのですか？
大胆ですね。

清純派女優のあなたが自分から不倫しようとしたのですか？」

「不倫じゃありません！」

あれは私の片思いです。

不倫しようなんて少しも思いませんでした。

たった一度キスしたくなっただけのことです。

それだけで良かったのです。」

あんまり堂々としている梨々花を見て、さすがの記者もたじろいだ。

梨々花も自分の本当の気持ちを包み隠さず話していた。

「では質問を変えます。

養女になった家に、可愛げがないという理由だけで、児童福祉施設に返されたことに

ついてはどう思われましたか？

あなたが未だにそれを恨んでいるとお聞きました。

「私は恨んでなんかいません。

あの養女になったお家は、娘さんが事故で亡くなられていまして。

大変お気の毒なお家でした。

亡くなられた娘さんは、手はかかったかも知れませんが、愛嬌があり可愛い娘さん

でした。

私はご存知の通り可愛いところがなくて。

でも浅はかな私は、何もかも頑張れば奥さんが喜んでくれると思いました。

亡くなられた娘さんの代りになるということはそんな簡単なことではなかったのです

ね。

ただやみくもに何もかも頑張ればいいというものではなかった。

私の頑張りが返って母親に嫌な思いをさせたみたいで。

私はあの後反省しました。

養女に行くってことは何もかもやみくもに頑張ればいいという簡単なものじゃないと。

あれから娘さんのような愛らしい方が養女に來られて幸せにされているとお聞きしました。

私は何も恨んでいませんよ。」

記者たちは、梨々花があまりに凜として背筋を伸ばして話すので何も言えなくなつた。

「では、養女に行った先で、妹さんをいじめておられたのは本当ですか？」

「本当です。」

私はあの頃やさぐれていました。

こんな私なんて誰も愛してくれないと、半分やけになっていました。

だから、優しいご両親に愛され、友達がいっぱいいる妹が羨ましくてたまらなかった。

私はどんなに努力しても高校2年生になるまで家族と一緒に暮らすという夢を叶えることができなかった。

でもものほほんとしているだけでこんなに幸せに暮らしている女の子がいるのだと思うとやりきれなくなつて。

この家の母親はすごく優しい人で。

何とかしてこの母親の愛情を一身に受けたいと思つてしまったのです。

愚かな私はあの手この手を考え出してしまい、妹から母親を奪おうと思つてしまいました。

あの頃の私は温かい血の通つた人間じゃなくなっていました。

悪魔になっていました。

そして可哀想に妹は母親から嫌われて家を飛び出してしまいました。

その妹を家に泊めてくれたのが私の今の母親である伊万里杏子でした。

やがて、本当のことを杏子が義理の母親に言ってくれました。

あの家では妹が悪者になっていたけどそれは全て、私が企てたことだと。

妹は無実だったことがわかり家に戻ることができました。

あの時、妹が杏子の家に泊まりに行かなかつたら。

杏子が本当のことを義理の母親に言わなかつたら。

私は悪魔に身を売っていたことでしょう。

そして奇跡が起こりました。

杏子が私の心を鍛え直してくれたのです。

大きなダブルベッドを買ってくれたのです。

そして毎晩、私を本当の娘みたいに抱きしめて眠ってくれました。

杏子は、私の幼い頃から抱える数々の心の病気を命がけで治してくれました。

私が努力しても悪いことをしても手に入れられなかった家族。

それを杏子がくれました。

無償の愛で。

究極の愛で。

今まで得ることのできなかった楽しい学校生活も、親友も、恋人も、ドラマの仕事も。

全部元をたどれば杏子がくれたものです。

杏子が私を温かい血の通った人間にしてくれました。

杏子がいなかったら私は悪魔になっていたことでしょう。

私の母は世界中でただ一人です。

この伊万里杏子だけが私の唯一の母親です。」

梨々花がそう強く言う。

誰からともなく拍手が起きた。

会場がすごい拍手で包まれた。

「私にとってもそうです。

伊万里梨々花は私のかげがえのない大事な大事な娘です。

私はこの娘を愛しています。

今まで娘が得ることができなかった家族。

私が、私にしか使えない魔法で、梨々花にプレゼントしようと思っています。

もしも私にそんな魔法が使えるのなら、その魔法で梨々花を幸せにしようと思っています。」

会場はますますすごい拍手に包まれた。

この会見はワイドショーで何度も放送された。

絶対に良子も見えていたはずだ。

でもこの会見後、良子は姿を消した。

そして梨々花はまた杏子と奈都と三人で暮らせるようになった。

その二日後のことだった。

思いがけないことが起こった。

万梨亜の預けられている児童福祉施設から電話がかかってきたのだ。

「万梨亜ちゃんが！」

万梨亜ちゃんがいなくなりました。

伊万里さんと梨々花ちゃんの会見の後から様子がおかしかったのですごく気になっていたので。」

「万梨亜があの子の会見を見ていたのですか？」

「すごくショックを受けているみたいでした。」

伊万里さんが迎えに来たのを突っぱねはしたものの、まさか自分以外の女の子を養女として引き取っているなんて思ってもいなかったみたいで。」

杏子は急いで児童副櫛施設に向かった。

「万梨亜のいつもいる部屋はどこですか？」

何か手がかりがあるかも知れませんが！」

児童福祉施設の伊刈先生が万梨亜のいつもいる共同部屋に案内してくれた。

万梨亜の勉強机があった。

杏子は万梨亜の机の一番上の引き出しを開けた。

すると、東京と広島の間尾道の間の路線図の候補の最後の方の紙が入っていた。

多分、候補の最初の方のページだけ万梨亜が持って行ったに違いなかった。

尾道、そこは万梨亜と杏子が行った唯一の旅行の場所。

万梨亜は多分尾道に向かったのだ。

杏子は尾道に行くことにした。

急いで旅行の支度のために実家に戻った。

「お母さん！」

万梨亜ちゃんが居なくなったのは私のせいでもあるでしょ？

私も一緒に尾道に行くわ。」

「私もあの子のおばあちゃんだし、一緒に行くよ。」

久しぶりに万梨亜にも会いたいし。」

私が元気になってから一度も会ってないしね。」

尾道へは杏子、梨々花、奈都と一緒に行くことになった。

尾道に着いた。

真っ先にあの境ガ浜の水族館に行くことにした。

万梨亜はあの水族館の亀を見て喜んでいたし、あの時に買ってやった亀のぬいぐるみをすごく大事にしていたので。」

しかしその場所には水族館がなくなっていた。

もう今はあの水族館は閉館していたのだ。

次に向かったのはあの夕暮れのクルージングをした船着き場。

奇しくも今日もあの日と同じ夕暮れの美しい日だった。

万梨亜はあの日夕暮れのクルージングの時、今までで一番幸せそうな顔をしていた。

万梨亜があんなに喜んでくれるのなら、もっともっと旅行にいっぱい連れて行ってやったら良かったとずっと後悔していた。

そしてその夕暮れのクルージングの船着き場に。

万梨亜は佇んでいた。

「万梨亜！」

万梨亜！」

杏子が叫んだ。

「お、お母さん！」

「万梨亜！」

あの会見であなたを傷つけたのね！

ごめんなさい！

ごめんなさい！」

万梨亜の方へ駆け寄ろうとしたら。

「来ないで！」

私は今、世界中で一番あなたに会いたくない！

帰ってください！」

「何を言うの！」

あなたは大切なかけがえのない私の娘じゃないの！」

万梨亜は梨々花を見てはつとした。

「伊万里さんには梨々花ちゃんがいるじゃない！」

もう私なんていない娘でしょ！

伊万里さんにとって娘はその梨々花ちゃんだけでしょ！」

「やっぱりそのことで傷つけたのね。

万梨亜、じゃあ、一緒に住みましょ。

梨々花は万梨亜の妹になるのよ。

あなたはお姉さんになるの。」

「私なんていらないでしょ？」

邪魔者は一生消えるわ！

私はここで一人、強く生きて行くの！」

「お母さん、私と万梨亜ちゃん二人きりにして。

私から万梨亜ちゃんに話してみる。」

そう言っ、梨々花が万梨亜のところへ行っ。

「万梨亜ちゃん、私と一緒にクルージングしない？」

万梨亜はびっくりしたが、うんと頷いた。

ひょんなことから思い出の夕暮れクルージングを梨々花と万梨亜二人ですることになった。

「私のお母さん、すごくひどい人でね。

男にだらしない人で。

私を産んですぐに私のお父さんと別れて。

そしてその後すぐ男を作っ。

そんなだから家事も全然しない人だったの。

私は大人みたいな子どもだとみんなに言われていて。

私の子どもらしくない可愛げのない性格はこの時に形成されたの。

お母さんが子供だったから私がしっかりしてお母さんを支えないとって思っ。

小学校 1 年生の頃から、掃除、洗濯、ゴミ出し、料理全部していたの。」

「えっ！

梨々花ちゃんも？」

私もそうよ、小学校 1 年生からずっと家事はしていて。

それで無理しすぎてこんな火傷したのよ。」

万梨亜は腕の火傷後を梨々花に見せた。

「そうだったの。

あなたも随分苦労したのね。」

「私は火傷なんて全然気にしてなかった。

でも伊万里さんが責任を感じて私を児童福祉施設に入れたの。

私が普通の小学校 1 年生の女の子みたいに家事をしなくても済むように。

私は家事なんて全然苦じゃなかった。

お母さんと一緒に生活がどんなに幸せだったか。

今だってお母さんとの唯一の旅行の思い出があるこの尾道に来たのだから。」

万梨亜ははっとした。

何故か梨々花には本音が話せる。

梨々花は話を続ける。

「私がお母さんと一緒に暮らせなくなったのは。

お母さんに好きな人ができてね。

でも振られて。

それはどうやら私のせいだったみたい。

だから私さえないなければって思っ

て私を殺そうとしたの。

あの美人だったお母さんがまるでやまんばみたいになって私を追いかけて。

逃げ惑う私を追いかけまわして。

包丁で私を追いかけまわしたの。」

「嘘でしょ？

実のお母さんがそんなにひどいこと。

私なら一生立ち直れないわ。」

「私も心的外傷後ストレス障害になって、包丁を持つと手が震えるようになってしま

って。

それを治してくれたのがあなたのお母さんなの。
私が包丁を持って手を震えていたら後ろからぎゅっと手を握ってくれて治してくれたの。

お母さんの愛情で、私を癒してくれたの。」

「そんなことがあったのね。

梨々花ちゃんって私以上に苦労していたのね。」

「私、小学校の高学年の時に、忘れられない辛い思い出があるの。

私、可愛げがなかったからずっともらわれることがなかったのよ。

でも、ある日、すごく優しいような女性が私を気に入って、養女にしてくれたの。

どことなく私のお母さんに似ている顔をしていて。

すごく素敵な女性だった。

こんな素敵な女性の子どもになるんだからって、つい張り切り過ぎちゃった。

その時の私のお母さん、可哀想に私と同年の娘さんを交通事故で亡くしていたの。

その代りだと思ってお母さん、すごく優しくしてくれた。

私はお母さんの愛情を知らずに育った女の子だったから、嬉しくてね。

毎晩優しく抱きしめてくれたり、絵本を読んでもくれたり。

最初の頃は私の人生の中で一番幸せだった。

でもその幸せも長くは続かなかったの。

その亡くなった娘さんは、ドジで愛嬌のある女の子だったよね。

ピアノは間違ってたばかり。

夜中にトイレに行くのが怖くて、いつもお母さんを起こしていたみたい。

運動会の時にかけておまけに転んで泣いて。

勉強もあまりできなかったみたい。

注射や歯医者さんが怖くて泣いて。

人参が嫌いでいつも残して。

私はそんなこと知らないから張り切ったの。

勉強だってスポーツだってピアノだって、夢中で頑張った。

お母さんがその方が喜ぶと思って。

小さい頃からお母さんを守ろうと思っていたぐらいから真夜中も、注射も、歯医者も怖いなんて思ったことなかったし。

うちのお母さん、レトルト食品やインスタントしか食卓に出してくれなかったから、新しいお母さんが作ってくれた料理どれも最高に美味しくて残すなんてこと絶対にしなかったし。

亡くなったお子さんは、優しいご両親に守られて育った育ちのいい女の子だったからね。

新しいお母さんは私とその亡くなった娘さんがあまりに違い過ぎて違和感を感じるようになったの。

そして可愛げのない私をついに愛することができなかった。

それにそのお母さん、新しい子供を愛せるぐらいいまで心の病気が快復していなかったのよ。

私のせいで、心の病が悪化してしまったみたいで。

今でもお母さんに悪いことしたなって思っていて。

私に対しての不満がある日爆発してしまつて。

それ以来、私は二度とそのお母さんに抱きしめてもらうこともなくなった。
私のせいでそうなったのよ。」

「違う！

それはそのお母さんが悪い！

まだ自分の心が正常になっていないのに、新しい子供を引き取ったりして。
それは大人たちが悪いのよ！

梨々花ちゃんのせいじゃない！

梨々花ちゃん、そんなに自分を責めないで。」

「万梨亜ちゃん、ありがとう。

万梨亜ちゃんは優しいね。」

「私が辛かったのは。

火傷なんかじゃない。

この火傷を見ても辛いと思つたことなんて一度もない。

私は何を悲しんでいたのか、伊万里さんちともわかつてない！

私が一番辛かったのは、あの事故以来、お母さんが私を手放したことよ。

私、ずっと待っていた。

お母さんが、また私と暮らしたいって言ってくれるのを。

児童福祉施設に居た時いつも夜泣いていたの。

お母さんに抱きしめて欲しいって。

お母さんと暮らしたいって。

どれくらい泣いたか知らない。

来る日も来る日もお母さんを待っていて。

だからそれから辛いことがいっぱいあったけど涙なんてこぼれなかった。

あのお母さんとの別れほど辛いことなんてなかったもの。」

「そうだったの、万梨亜ちゃん。

私も全く同じ。

あんなお母さんだけど、もしかしたら迎えに来てくれるのじゃないかって。
実はずっと待っていたの。

もしかしたらあの包丁事件以来、心を入れ替えて、いいお母さんになって戻って来て、私を迎えに来てくれるのじゃないかって。

ずっと待っていた。

どんなお金持ちにもられるより、どんな優しい人にもられるより、私を産んだ実のお母さんに引き取られたかった。」

「わかる、それ！」

私も実は、すごく優しくそうですごくお金持ちの家から養女に來ないかっていう話があったけど断ったの。

どんな家だって実のお母さんにはかなわないのよね。」

「万梨亜ちゃんはお父さんを欲しいと思ったことなかった？」

「うんうん。」

私、お父さんの愛情を知らずに育っているから、お父さんもすごく欲しかった。」

「恋愛の対象も同年代より、年上の男性を好きになったりしなかった？」

「うん、うん。」

何でわかるの？

学校でも、同年代は頼りなくて、つい先生を好きになってしまふのよね。」

「一緒！」

わあ、嬉しい！

こんなに自分と気が合う人と話せたの初めて！」

「私も！」

こんなに気が合う人、生まれて初めて！」

梨々花と万梨亜は手を取り合って喜んだ。

「私、中学校の時の担任の先生がすごく好きになったの。」

先生は父親のいない私を可哀想に思っ、まるで本当のお父さんのように優しくしてくれたの。

私、育ちがよくないし、辛いことばかり幼少期にあったから、中学校の多感な頃、自分でも抑えようのないくらいに心が暴れている時期だった。

そんな心の中のものやもやしたもの、先生が全部大きな心で受け止めてくれたの。

私、スポーツはすぐできる子だった。

でも人と関わるのがうざったくて部活に入ろうとしない子だったの。

そんな私にバドミントンを教えてくれて、部活に入る大切さを教えてくれたものその先生で。

公園で一緒にバドミントンしてくれた時、すごく幸せで。

部活で人間関係に悩んだ時も助言してくれた。

私の醜い部分も含めて大きな愛で包んでくれたの。

そして私を養女にしてくれたの。

最初はお父さんができたみたいで純粹に嬉しかった。

でも先生があまりに異性としても素晴らし過ぎて段々、恋心が変わってしまったの。

一緒に二人つきりでスキーに行つてからますます恋心が募つてしまつて。

そして私から先生にキスしてしまったの。

先生の奥さんがそれを目撃してしまつて。

先生の奥さんはまるで本当の娘みたいに私を愛してくれていたの。

でも私は先生も先生の奥さんも裏切つてしまつた。

私はその時初恋も、家族も全部失つてしまつた。

児童福祉施設でも学校でもますます自分の殻に閉じこもることになってしまつたの。」

「それ、すごくわかる。

私も実は、中学校の頃、英語の先生を好きになつてしまつて。

その先生も私のことよく理解していてくれていて。

先生としても尊敬していたし、異性としても恋していた。

先生も私の身の上を知っているだけに邪険にもできなかったみたいで。

私と深く関わり過ぎてしまつたの。

かと言って、先生と男女の関係があつたわけではないけど。

あくまでも心と心の問題。

ある日、これを言つたら二人の関係は崩壊するつてわかつていて、思わず先生に告白してしまつたの。

それから先生は私を避けるようになって。

私も父親と初恋、同時に失つてしまつたの。

あれは今も辛い思い出な。

梨々花ちゃんはいいいじゃん。

そんなに素敵な男性とファーストキスできたんだもん。」

私もせめてキスくらいしたかったな。
その先生と。

私、それ以来、恋したことないのよ。」

「羨ましいなんて言うの。」

「うん、羨ましい！」

私、好きな人とキスなんて夢みたいな話。

ぶっちゃけその先生とキスしたかったもの。

公園でバドミントンしたり、スキーに行ったりもしたかった。

私デートしたことなかったもん。」

「後、全裸も見たのよ。」

「わあ、なんてラッキーなの。」

すっかり梨々花と万梨亜は打ち解けてしまった。

「私、なんだか万梨亜ちゃんとは友達になれそうだわ。」

「私も梨々花ちゃんとは何でも話せる友達になれそう。」

二人は顔を見合わせて大笑いした。

梨々花も万梨亜もこんなに自分のことを丸裸にして話したことなどなかったのだ。

「万梨亜ちゃん。」

私、引き取ってくれた家族の女の子、私の妹になってくれた子にひどいいじめをしたこともあるのよ。」

「知っているよ。」

記者会見で聴いてびっくりしたよ。」

「あの時、人生で一番悪い子だった。」

どの家族に引き取られても私は家族になれなくて。

学校で心を打ち明ける友達もいなくて。

ずっと孤独で。

お母さんに可愛がられて何不自由なく育った美園って妹が羨ましくて。

おまけに友達もいっぱいいて。

何が一番羨ましかったかというと、人を疑ったり憎んだりできないあの子の性格。

きつと私みたいにドロドロとした感情を全く持っていない人間なんだろうなって思ってた。
美園を見るたび腹が立って。」

「それもわかる。」

私もお母さんの愛情が一番必要な時に一人ぼっちになったから。お母さんの愛情をたっぷりもらって育っている性格のいい子を見るたび劣等感を感じて。

私も実は蔭でそういう子をいじめていたの。

わざと意地悪したりしていた。」

「嘘、万梨亜ちゃんも？」

「そしてそんな自分が一番嫌いだった。」

「一緒よ。」

私も美園のこと、本当は好きだったの。

何が嫌いかって心が美園みたいに綺麗じゃない自分。」

そう言って、梨々花は泣き出してしまった。

美園にあの時、本当に悪いことしたと、今更ながら反省した。

「泣かないで、梨々花ちゃん。」

また美園ちゃんに会った時に、何かプレゼントしたらどうかな？

そうだ！

美園ちゃんに尾道土産プレゼントしたら？」

「お土産をプレゼント？」

「梨々花ちゃんが本当はいい子だってきつと美園ちゃんもわかっていたよ。」

私はすぐにわかったよ。

あの記者会見で。

だから悔しかったの。

私より性格いいから伊万里さん、梨々花ちゃんを養女にしたって。

性格の悪い私なんかより梨々花ちゃんの方が可愛いつて！」

「それは違う！

万梨亜ちゃん。」

やさぐれて、どうしようもない私を救ってくれて、養女にしてくれたのも梨々花ちゃんに似ている境遇の私を放っておけなかったのよ！

万梨亜ちゃんがまるで自分に助けを求めているみたいで。

だから、私たち、家族になりましたよ！

私ずっと万梨亜ちゃんみたいな優しくて素敵なお姉さん欲しかったんだ。」

「私みたいなお姉さん？」

「私、お母さんに包丁で刺されそうになって、お母さんを失った時、一人の女の子が私の目の前に現れたの。」

茜って女の子。

茜は私の妄想の中で作り上げた女の子だった。

茜がいたから、どんな悲しいことも乗り越えられたの。

茜は私のお姉さんでもあり、大親友でもあった。

その茜に何だか万梨亜ちゃん似ていて。

茜は私の心の中のドロドロを知っていてもずっとそばにいてくれて。

私、今日、生まれて初めて茜以来、本当の自分をさらけ出せる人に出会えた。

私は、江梨香という現実の世界の友達もいるんだけど、その子にも言えなかったことも万梨亜ちゃんには言えたの。

そして気が付いたの。

私にはお姉さんも必要だって。

万梨亜ちゃん！

私のお姉さんになってくれる？」

「梨々花ちゃん！

梨々花ちゃんは今大スターじゃない！

こんな私みたいな地味なお姉ちゃん、いないじゃないの？」

「私はどんなに有名になっても、やっぱり、幼少期からずっとどこにも居場所のなかった孤独な女の子なの。」

どんなに煌びやかな世界にいても幼少期のことはやっぱり思い出すし。

これは逆に絶対に忘れてはいけないと思うし。

あんな辛いことがいっぱいあったから今の家族に感謝できるし。

だからお願い！

私の家族になって、万梨亜おねえちゃん！」

「万梨亜ちゃん。」

「万梨亜でいいよ。」

私たち、今日から姉妹なんだから！

意地張らないで、これからの人生、一緒に生きて行こうよ！」

「梨々花ちゃ……」

万梨亜は泣き崩れた。

「こんな私でも家族にしてくれるの？」

「今日から私たちは家族だよ。」

おばあちゃんもきつと、ずっと万梨亜ちゃんに会いたかったと思うし。」

梨々花と万梨亜を乗せた船は、ちょうど美しい夕暮れを見せてくれた。

「うわあ、綺麗。」

こんな綺麗な夕暮れ初めて見た！

私、家族旅行したの初めてなのよ。

先生とのスキー旅行はまるで恋人同士の旅行みたいだったし。」

「本当に綺麗だね。」

梨々花ちゃんは家族旅行初めてかあ。

私は人生で二度目。

何だかあの時より夕暮れが綺麗な気がする。」

「伊万里梨々花、この美しい夕暮れに、伊万里万梨亜と姉妹になることを誓います！」

「伊万里万梨亜も、この美しい夕暮れに、伊万里梨々花と姉妹になることを誓います！」

二人はそう言って笑い合った。

クルージングが終わると、すっかち打ち解けている梨々花と万梨亜に、杏子と奈都は驚いていた。

梨々花が目を輝かせて言った。

「私たちあの美しい夕暮れに姉妹になることを誓ったのよね？」

万梨亜ねえちゃん。」

「万梨亜ねえちゃんですって！」

杏子が驚く。

「じゃあ、万梨亜、これからお母さんと一緒に暮らしてくれるの。」

「お母さん！」

私、ずっと待っていたのに！

どうしてもっと早く迎えに来てくれなかったの！」

万梨亜はそう言って杏子に抱き付いた。

万梨亜をぎゅっと抱きしめながら杏子が言った。

「ごめんなさい。」

あなたとの約束の、脚本家か小説家になってから、お金持ちになってからあなたを迎えに行きたくて。

だから、こんなに遅くなっちゃってしまっただけ。」

「夢なんて叶ってなくてもいい。」

お金持ちになってもいい。

こうやって抱きしめてくれるだけで良かったのに。

このぬくもりだけが欲しかったのに。

お母さんのばか！」

「ごめんなさい！」

ごめんなさい！

許して、万梨亜！

お母さんもこうやってずっと抱きしめたかったの。

どれだけ万梨亜と暮らしたかったか。

どれだけ万梨亜を愛していたか。」

杏子と万梨亜は抱きしめ合っていつまでも泣いていた。

そして久しぶりに会う、万梨亜と祖母の奈都。

「万梨亜ちゃん、覚えてるかい？」

あんなのおばあちゃんだよ。

私、今までおばあちゃんらしいこと何にもできなくてごめんね。」

「忘れるわけじゃないじゃない！」

おばあちゃんにもずっと会いたかったよ。

おばあちゃんは算数セットや靴、体操着の袋作ってくれたじゃない。

マフラーだって編んでくれたし。

私おばあちゃんにももらったもの全部宝物にしているよ。」

「万梨亜、抱きしめさせておくれ。」

もう、私は昔の体の弱い私じゃないのよ。

杏子が最新の医療技術を誇る病院を紹介してくれて、手術してくれて。

あの当時は治らなかった心臓病が治ったんだよ。

これからはおばあちゃんらしいこといっぱいしてやることができるよ。
今まで一人ぼっちにして済まなかったね。

可愛い、万梨亜……」

そう言って泣きじやくって万梨亜を抱きしめる奈都。

「おばあちゃん。

私、あの時、おばちゃんにさよならした時、本当に悲しくて。

あの時のおばあちゃんの優しさがあったから、私今まで強く生きることができたの。
おばあちゃん！

今も、昔も大好きだよ！」

杏子も、梨々花も、万梨亜も、奈都もずっと泣いていた。

こうして4人は家族になったのだ。

その日の夜はあの時、万梨亜と杏子が宿泊したホテルで、花火を見ながらバーベキューをしながら4人で食事をした。

「あの時、またお母さんやおばあちゃんここに来たいって思っていたけど、まさかこんな形で実現するなんて思ってもいなかったわ。

そして、神様からもうひとつすごいサプライズ！

こんなに可愛い妹ができるなんて思いもしなかった。」

「本当ね。

私もおばあちゃんをまさかここに連れて来られるって思ってもいなかったし、もう一人可愛い娘ができるなんて夢にも思わなかったわ。」

「私も入院ばかりしていたので、こんな風に、娘と可愛い孫とこんな素晴らしい旅行ができるなんて思いもよらなかったよ。」

「私はまさかこんな楽しい家族旅行に連れて行ってくれる家族が持てるなんて、思ってもいなかった。

修学旅行も散々だったし、旅行にいい思い出なんてなかったけど。

今までの不幸な人生、全部ちやらにできるくらいに、今が幸せ過ぎる。」

4人は今までの人生で一番の最高の幸せを噛みしめた。

そして梨々花、万梨亜、奈都、杏子は思った。

今、私たちは魔法が使えるようになったと。

だからその魔法で今度は不幸せな人を幸せにしようと。

もう魔法が使えるようになったのだから。

以前の自分たちみたいな不幸な人を笑顔にしたいと心から思った。

